

大谷光瑞と台湾高雄熱帯農莊「逍遙園」の研究

2021年3月

新潟大学大学院

現代社会文化研究科

黄 朝煌

目次

序章	3
第1章 大谷光瑞と高雄について	10
1-1 大谷光瑞の生涯	11
1-2 『台湾島之現在』	18
1-3 「熱帯産業調査会」	21
第2章 熱帯農業試験地時代の大谷光瑞	30
2-1 光瑞の高雄での住所	31
2-2 その他の「大谷農園」	33
2-3 大港埔の事業用地	36
第3章 「逍遙園」別荘の創建時期について	38
3-1 建築資金の工面	39
3-2 建築設計と施工	42
3-3 「逍遙園」開園式	46
3-4 大谷光瑞の「秘書」と「大谷学生」	51
3-5 台湾「光瑞会」	53
第4章 「逍遙園」の生活について	59
4-1 『逍遙園雑詠』	60
4-2 「逍遙園」の風景と動植物	79
4-3 「逍遙園」での飲食	86
4-4 大谷光瑞と「大谷学生」	86
4-5 戦争期間中と戦後の「逍遙園」	90

第5章 近代文化住宅としての「逍遙園」について	101
5-1 「三夜荘」と「逍遙園」	102
5-2 大谷光瑞の建築思想	106
5-3 防空規則が「逍遙園」に及ぼした影響	113
5-4 大工棟梁二角幸治郎と「逍遙園」別邸	115
5-5 「逍遙園」の建築特徴再探明	123
終章	129
付録 大谷光瑞と台湾、南洋の足跡	140
参考文献	172

【凡例】

1. 引用資料などの旧字体資料については、原則として新字体に改めた。
2. 年号は基本的に西暦年で表記したが、必要に応じて日本の年号をそのまま用いた。
3. 引用文献中、判読不明の文字は○とした。
4. 本願寺といえは、とくに注記をしていない限り西本願寺を指す。
5. 本願寺管長、本願寺住職などを表す言葉には、法主、門主、宗主などがあるが、基本的に法主に統一した。

序章

1914（大正3）年、本願寺（以下本願寺といえは西本願寺を指す）第22世の法主である大谷光瑞（1876－1948）は疑獄事件¹の責任を取るために、法主を辞任した。その後中国、南洋各地で仏教事業の発揚と熱帯事業活動の展開をした。大谷光瑞の事業に伴う別荘はアジアの至る所にあり、それぞれ地域に応じた建築特色を備えていた。現存している別邸は旅順「大谷邸」と高雄「逍遙園」だけであるが、現在、「逍遙園」が高雄市の文化財として広く市民に親しまれている。

この別邸の主である大谷光瑞は、探検家、宗教家、そして政治家として日本や中国では知られている人物である。

さて大谷光瑞は台湾で「熱帯産業調査会」²委員をはじめ「臨時台湾經濟審議会」³委員などを務めるなど台湾との関わりは深かった。しかし高雄にある「逍遙園」の存在は知られていなかった。また大谷光瑞の台湾に関する研究や調査活動の実態などもほとんど知られていなかった。大谷光瑞の住まいであった「逍遙園」別邸が陸軍の眷村⁴である「行仁新村」として70年近く葬られていたが、2004（平成16）年に曾駿文氏の『新興區日本皇族別墅之探討與訪談』⁵や葉振輝⁶教授の『高雄市日本皇族別館考證』⁷という論文が世に問われてから「逍遙園」別邸存在が知られるようになった。

筆者は国立高雄大学での研究期間中、幸いにも2008（平成20）年に初めて「逍遙園」別邸の建築調査を行い、『高雄市新興區日本皇族別邸「逍遙園」基礎調査』⁸を完成した。2009（平成21）年には、修士論文である『日治晩期高雄市大谷光瑞的「逍遙園」之源流與建築構成』⁹を完成させた。上記2編の研究において、筆者は別邸の建設空間、特色ある建築の記録を作成し、西本願寺の布教史、大谷光瑞

の生涯、高雄大港埔庄の研究と建築別邸の工事参加者、及び戦後中華民国陸軍 802 病院が「逍遙園」を接収管理した歴史を高雄研究の一分野として研究を始めた。

その後、楊玉姿¹⁰教授は『高雄市史蹟賞析』¹¹において、1935（昭和 10）年に作られた「大谷光瑞所有地」の境界杭と「逍遙園」土地台帳の存在を明らかにした。さらに日本の柴田幹夫¹²教授、加藤斗規¹³研究員は、「大谷光瑞とアジア—知られざるアジア主義者の軌跡—」¹⁴、『大谷光瑞「国家の前途」を考える』¹⁵の中で、大谷光瑞が南洋、台湾における足跡を深く検討し、大谷光瑞の学生が高雄「逍遙園」に派遣されたことを明らかにした。

2014 年（平成 26）に柴田幹夫教授は『大谷光瑞の研究—アジア廣域における諸活動』¹⁶を著した。また日本と台湾の学者による研究成果をまとめて、2017（平成 29）年に台湾で前述の中国語版『興亜揚仏：大谷光瑞與西本願寺的海外事業』¹⁷を発行した。日本の学者による研究成果が台湾側の研究に多大な影響を与えていることは疑いないことである。筆者は、「高雄市歴史建築『「逍遙園」』調査研究與修復計画」¹⁸を作成する時期に当たり、柴田幹夫、加藤斗規、菅澤茂¹⁹などの日本の学者や「瑞門会」²⁰の協力を得て、2015（平成 27）年に調査を完了した。高雄では大谷光瑞の著作に関する分析、「逍遙園」の設立背景、大谷光瑞の学生とのインタビュー、「逍遙園」の土地買収、工事資料、戦後中華民国の接収管理、戦後住民の情報、建築図面、建築特徴、「三夜荘」の変遷、飛雲閣を模倣した建築設計などの貴重な情報を把握した。これらの情報は高雄市政府文化局が「逍遙園」別邸修復する際の基礎資料として活用されていた。

2017（平成 29）年 8 月から「逍遙園」別邸は修復期間に入り、2020（令和 2）年 6 月末に竣工した。筆者は過去の研究を振り返り、主に大谷光瑞の台湾におけ

る活動を幅広い視点から論じてきたが、歴史学の記述方法はまだ十分ではない。筆者は今後「逍遙園」を訪れる市民や各国の観光客にとって、具体的なキャラクターストーリーがより注目を惹きつけると考えている。とくに大谷光瑞の建築思想の理解し、秘書の人物像、「大谷学生」の経歴、工事参加者の好奇心などである。

本論文は「人」を中心に、全面的に「逍遙園」の生活の様子を描き、大谷光瑞と学生が「逍遙園」で建設した「熱帯農園」の全貌を明らかにしたい。

この目標を達成するため、筆者は2017（平成29）年12月4日から2018（平成30）年2月1日まで、新潟大学大学院現代社会文化研究会の客員研究員として新潟で研究を行った。この研究期間内において『大谷光瑞の高雄別邸「逍遙園」—日本側の関係資料』²¹を完成させた。この研究において以下の八つのことが明らかになった。①台湾総督府が大谷光瑞の熱帯事業に対して援助したこと、②大阪で学生を募集する経過が明らかになったこと、③「三夜荘」を売却し経費を集める経緯が明らかになったこと、④「三夜荘」から木材や鉄を高雄に輸送すること、⑤「逍遙園」の開墾時期、⑥「大谷学生」の生活、⑦時局の影響、⑧京焼名家森野嘉光が囑託を受け「逍遙園」開園式記念皿を制作することを明らかにした。そして、筆者は大谷光瑞の漢詩『逍遙園雜詠』30首を分析した後、「逍遙園」の命名は中国戦国時代の哲学者莊子『逍遙遊』に起源する新しい論点を提出した。

本願寺の歴史において、大谷光瑞は非常に希有な人物である。1902（明治35）年から三次にわたる「大谷探検隊」の派遣と調査活動²²やアジア各地における実業活動の展開、それに政治への参画など、従来の僧侶としての活動を越えたものであった。

2016（平成28）年2月、大谷家の「三夜荘」が取り壊された後、「逍遙園」は

大谷光瑞の私邸として稀な存在となった。大谷光瑞が「逍遙園」に居住した時期、太平洋戦争の影響を受け、彼が「逍遙園」に滞在する時間は長くはないが、『大乘』、『随筆百則』、『熱帯農業』、『逍遙園雑詠』を著し、「逍遙園」に対する叙述や、国家意識を表す文章が散見される。大谷光瑞の晩年の不安や「逍遙園」に心を預ける事実が見られる。

筆者は日治時代の台湾の建築を研究しているが、建築を理解するには、設計者の思想を明らかにしなければならない。「逍遙園」は希有な文化財であり、大谷光瑞の人間性や本願寺の建築の影響があり、「逍遙園」別邸は前述した特色を持っている。研究成果から見れば、大谷光瑞は晩年、「逍遙園」別荘を造り、秘書や学生たちを高雄に派遣した。建築学方面では、「逍遙園」は近代建築の特例であり、大谷光瑞「逍遙園」別邸は大谷光瑞が科学を重視する精神を反映している。南洋の開墾の経験から学び、シロアリに強い木材と新式な工業材料で別邸の耐久性を確保するということである。困難な時局下においても京都の大工を招聘し、近代文化を体現する住宅を建てた。本論文は建築学の範疇を超えて大谷光瑞の高雄での生活を論じると同時に、文学、歴史、政治、国際関係、都市計画、熱帯農業、台湾特有の植物の視角から、「逍遙園」の高雄都市史の意義を検証する。

大谷光瑞は高雄市民となった当日、「逍遙園」開園式に参加した高雄市尹（市長）宗藤大陸²³は「今日の高雄は二つ喜ぶべき事がある。第一は、高雄は新南群島を編入し、海上数百里を渡る新興都市になったこと。第二は、高雄市は大谷光瑞のような国際人物を市民として受け入れたこと」と語った。一方、批判もなかったわけではない。大谷光瑞が偉いことをいって、困難な時局で官庁から特別扱いをしてもらい別荘を建設し、熱帯果樹園の建設を目標に高雄駅の付近で安い土地

を購入し、更に高雄知事内海忠司²⁴を利用したことを批判していた。三谷真澄²⁵教授が『大谷光瑞の構想と居住空間』²⁶で論じているように、大谷は万能な人物であり、専門家は彼の足跡を研究し、どのような評価であっても、彼が重要な歴史人物に変わりないということを認めざるを得ないのである。本論文は「逍遙園」を手かかりにして、歴史を遡り、大谷光瑞の性格をより詳しく分析する。将来もこの課題は引き続き学界において検討される課題であろう。

この論文の執筆中に、「逍遙園」は開園 80 周年を迎えた。新型コロナウイルスの影響を受け、各国の人々の日常生活は大きく変化しており、国際交流も途絶えているが、この困難の中にもかかわらず、高雄市政府は高雄の再建 100 周年及び「逍遙園」の開園 80 周年を迎えることを祝福するために、2020（令和 2）年 11 月 1 日一連の開園記念イベントを開催して、高雄市民をはじめ、関係する人々に修復を終えた「逍遙園」が姿を見せたのである。

開幕式において、高雄市長の陳其邁氏と日本交流協会高雄事務所所長の加藤英次氏が共同で記念プレートを開封した。「逍遙園」の修復と再生を記念するため、高雄市政府は、筆者と高雄市歴史博物館の展示設計部主任の張曉旻氏に委託し、日本九州の大谷記念館から「逍遙園開園式の記念清水焼プレート」を借用し、再度「逍遙園」にて展示することにし、高雄市民に当時の台湾にとって格別の意義のある芸術品を提供した。

今回「逍遙園」の開園記念展示会の文案は、筆者が執筆したが、本論文の研究成果を高雄市政府の文化局に提供するほか、文化局と協力して必要とされる古い写真の展示について日本の先生方から授權をいただく依頼を行った。ここで筆者は、柴田幹夫教授をはじめ、掬月誓成副館長、加藤斗規研究員、菅澤茂建築師、

應雋先生、二角龍藏氏、三谷真澄教授から多大なるご協力を頂いたことに感謝の意を申し上げたく思う。



図 (1) 2020 年 11 月 1 日「逍遙園」開園 80 周年の記念写真と竣工式写真
(筆者撮影)

【注釈】

- ¹ 疑獄事件とは、1914（大正3）年、本願寺教団が、「真宗生命保険会社」や本願寺の「慈善会」から資金を流用し、また神戸須磨にある大谷家の別邸を宮内省に買い上げて貰う際に、宮内省に多額の金品を贈ったという事件である。宮内省を巻き込んだ事件でもあったので、光瑞はその責任を取り、本願寺住職、本願寺派管長の座を辞したのである。龍谷大学大宮図書館に『西六條幻夢抄』と題する疑獄事件に関する新聞の切り抜き帳がある。
- ² 「熱帯産業調査会」は、台湾総督府によって創設された政策組織である。1935年11月に台北で会議が行われ、台湾産業の発展、工業化の促進などを建議した。また三つの特別委員会があり、「貿易振興」「工業振興」「交通や文化施設の改善」などが討議された。台湾が南進基地の中核を為すということが決められた。この献策によって「台湾拓殖株式会社」が設立された。
- ³ 「臨時台湾経済審議会」とは、1941年10月に台湾総督府によって開催された審議会で主として南方進出拠点としてふさわしい台湾の在り方を審議したものである。
- ⁴ 中国大陸から渡ってきた人たちに対して、国民政府によって1949年から1960年代にかけて、日本時代の残された住宅、工場また倉庫などを利用して臨時に又は長期的な彼らの居住に提供した。この住宅を眷村と呼んでいる。台湾全土に886の眷村があった。
- ⁵ 曾駿文、「新興区日本皇族別荘の探討與訪談」、『高市文献』第17巻第4期、高雄市文献委員会、2004年12月、107ページ。
- ⁶ 国立中山大学教授、歴史学者。
- ⁷ 葉振輝、『高雄市日本皇族別館考証』、年代不詳。高雄市文化局内で発表したレジュメ。文化局からレジュメをいただいた。
- ⁸ 国立高雄大学、『高雄市新興区日本皇族別邸逍遙園基礎調査』、高雄市政府文化局、2008年。
- ⁹ 黄朝煌、『日治晚期高雄市大谷光瑞的逍遙園之源流與建築構成』修士論文、国立高雄大学都市發展與建築研究所、2009年。
- ¹⁰ 国立高雄師範大学、歴史学者。
- ¹¹ 楊玉姿、『高雄市史蹟賞析』、高雄市政府文献会、2009年。
- ¹² 新潟大学留学センター准教授/現代社会文化研究科准教授。
- ¹³ 加藤斗規氏は、大分県別府市にある「大谷記念館」研究員である。なお別府は大谷光瑞の終焉の地でもある。
- ¹⁴ 柴田幹夫編、『大谷光瑞とアジア—知られざるアジア主義者の軌跡—』、勉誠出版、2010年8月。
- ¹⁵ 同上『大谷光瑞—国家の前途を考える—』、勉誠出版、2012年。
- ¹⁶ 柴田幹夫著、『大谷光瑞の研究—アジア廣域における諸活動—』、勉誠出版、2014年。
- ¹⁷ 柴田幹夫著、『興亞揚仏：大谷光瑞與西本願寺の海外事業』、台湾博揚出版公司、2017年。
- ¹⁸ 国立高雄大学、『高雄市歴史建築『逍遙園』調査研究與修復計畫』、高雄市政府文化局、2013年。
- ¹⁹ 工学院大学客員研究員。一級建築士、元京都府文化財保護課上級文化財修理技術者。
- ²⁰ 「瑞門会」とは、戦後大谷光瑞の門下生によって作られた親睦団体。名簿の発刊や関連書籍の出版、また命日に当たる10月5日には本願寺で法要を行っている。
- ²¹ 黄朝煌、『大谷光瑞の高雄別邸「逍遙園」—日本側の関係資料』、平成30年、公益財団法人日本台湾交流協会に提出した論文。
- ²² 近年の説によれば、従来の大谷探検隊のみの行動や活動に留まることなく、広い意味で広域アジアを中心にして活動した調査活動ととらえるべきである。広島大学の白須淨眞氏や新潟大学の柴田幹夫氏等によって提唱されたものである。
- ²³ 宗藤大陸（1893—1974）岡山県生まれ。1924年に台湾に渡り、新竹市助役などを歴任し、1937年に高雄市長に転じた。戦後北海道函館市長を務めた。
- ²⁴ 内海忠司（1884—1968）京都府生まれ。京都帝国大学法科卒業。1928年に台湾総督府に転じ、台北市長や新竹州知事を経て高雄州知事になる。近藤正巳・北村嘉恵編の『内海忠司日記』（京都大学学術出版会、2012年）がある。
- ²⁵ 龍谷大学国際学部国際文化学科教授、龍谷大学世界仏教文化研究センター西域総合研究班長。
- ²⁶ 三谷真澄編、『大谷光瑞の構想と居住空間』、法蔵館、2020年2月。

第1章 大谷光瑞と高雄について

1-1 大谷光瑞の生涯

大谷光瑞（1876－1948）は、1876（明治9）年に京都で浄土真宗本願寺派第21世法主大谷光尊（1850－1903）、明如上人）の長男として生まれた。父の明如上人は幕末の混乱期から明治維新の変革時代を経て本願寺の近代化に大きな役割を果たした人物であった。かつて徳富蘇峰は光瑞を評して「彼の大きな特色は、彼において明治精神の権化たることを見出す一点である。抑も明治の精神なるものは、これを要約すれば、開国進取の四字に尽きて居る。彼れ大谷光瑞は渾身総てこれである」（『史伝大谷光瑞師』）といているが、この明治の精神は父光尊による本願寺教団の近代化のなかで培われたものであろう。1903（明治36）年、父の死去にともない本願寺住職、本願寺管長そして大谷家宗主を継承した。1899（明治32）年、初めての外遊として中国を訪問するが、その目的は「国家の前途と宗教の将来を深く考える」事であった。²⁷

同年12月にはインド仏跡旅行とヨーロッパにおける宗教制度研究のため再び外遊した。インドではベナレスからサールナート（鹿野苑）そしてブッダガヤなどの仏跡を踏破した。その後インドからヨーロッパに向かった。廣田四郎の『法主大谷光瑞師伝』によれば、「……遂に英京倫敦に入り、此処に錫を留むること3年、其間主として宗教と政治の関係を調査し傍ら慈善事業即ち免囚保護・悪少年感化院・孤児院・育児院・養老院などの組織を実地に調査せられたので、其為には独り英国における各種事業の状況を視察し、調査したばかりでなく、独逸にまで出張して実地研究に努められ、其監獄を視察せらるる時などは囚徒の取扱い方や、教誨師の説教振りなどに就て、常に細密なる注意を払ひ、大に参考に資せられたとの事である。又古今の宗教制度を調査するに当つては、遠く土耳其にまで

往つて回々教の模様を調べ、耶蘇旧教の状態を知らんが為には羅馬を訪問し、パレスティナを尋ね、希臘教を取調ぶる為には親しく露西亜に遊ぶなど、全力を傾注して其研鑽を続けられたが、尚ほ特筆すべきは一切蔵経を本国京都より取り寄せて仏典の討究を疏にせられなかった事である。而して猥下は又単に自己の勉学を以てのみ満足せられず、予て期せられたる人材養成の目的と、一は自己研究の科目に資せん為、随行の従弟大谷尊宝氏を劍橋大学に入学せしめ、渡辺哲信をして英国の宗教制度を専攻せしめた……」²⁸とあり、熱心にヨーロッパの慈善事業や宗教調査をしていたことがわかる。

その後ロンドンから中央アジア探検に向かうわけであるが、その経緯について、光瑞はみずから次のように語っている。「西域は仏教が交流し、三宝（仏・法・僧）が流通した古址である。ことに新疆の地は、インドとシナとの通路のあたり、両国の文化が接触したところで、また実に仏教東漸の要地であった。しかしながらこの地域における仏教の衰亡はすでに久しい以前のことで、昔日の状況は、今や知ろうとしても知る事ができない。私はつとにこの地域をはじめ、いわゆる中央アジアに対する学術的踏査のゆるがせにすべきでないことは知っていたが、その実行の機会は久しくつかむことができなかった。1902（明治35）年8月、私はたまたまイギリスのロンドンに遊び、日本に帰ろうとした時、ふとこの帰途を利用して、私の素志の一端を達すべきであると考えた。そこでついに決心して、みずから西域の聖蹟を歴訪し、別に人を派遣して、新疆の内地を訪れさせた。この旅行の結果は、私にますます中央アジア探究が必要であることを悟らせたので、さらに第2、第3の2回にわたって人を派遣するにいたった。……第1回の旅行は、私と渡辺哲信、堀賢雄、本多恵隆、井上弘円ら一行5人で、1902（明治35）

年8月15日、ロンドンを出発、ロシアを經由してカスピ海沿岸のバクーにはいったのは、同年9月であった。ついでサマルカンド、コーランドを経てオシュにいたり、テレク嶺を越えてカシュガルにはいり、さらにヤルカンドを経て、パミール中の一都会であるタシュクルガンにいたった。ここから私は本多恵隆、井上弘円をしたがえてミンタカ嶺を越え、フンザやギルギットを経て、カシミールに向かい、さらにインド各地の聖蹟を歴訪して日本に帰った……」²⁹この探検には光瑞自身も参加しており、このことが光瑞の名前を高めたのである。ただ前述したように父明如上人が発病し、遷化の報に接したので、光瑞は直ちに帰国し、法灯を継承したのである。

その後も「大谷探検隊」は、橘瑞超（1890－1968）を派遣し1908（明治41）年から1909（明治42）年にかけて中央アジア地域に探検（第2次大谷探検隊）を行い、ローラン古城の遺跡から「李柏文書」を発見した。3次にわたる「大谷探検隊」の派遣によって収集された文物は、神戸六甲山の「二楽荘」³⁰に集められ、研究が行われた。

大谷光瑞が法灯を次いでまもなく日露戦争が勃発し、本願寺は「臨時部」を設置し、布教使を戦時に派遣するなど戦時体制を引いた。また1911（明治44）年に中国で起こった辛亥革命に際して教団挙げて協力し、辛亥革命の指導者である孫文との交流もはじまった。³¹

1914（大正3）年、西本願寺の疑獄事件に端を発して光瑞が法主の座を引退、以後中国上海、大連、青島そして台湾高雄などを拠点として活動を行った。またジャワ、パパンダヤン山麓に蘭領インド農林工業株式会社を設立し、シトロネラ草の栽培と製油事業、セレベス、ノーガンで農園を運営し、メナドで製材工場な

どの熱帯農林産業を営んだ。

大谷光瑞の事業は、いわゆる「英才教育」を通して学生を育成し、南支、南洋各地で熱帯農業を学ばせた。この「英才教育」はやがて台湾高雄の「逍遙園」で実を結ぶことになる。台湾「逍遙園」での「大谷学生」との協同生活が軌道に乗り始めた頃、光瑞は帰国を余儀なくされた。1942（昭和17）年3月のことである。東條英機によって「大東亜建設審議会」（大東亜共栄圏の建設のための具体的な内容を審議する機関）が創設され、その委員に任命されたのである。³²光瑞は築地本願寺に滞在し活動をしていたが、二度と台湾の地を踏むことはなかった。

その後は、上海と東京を幾度となく往来し、終戦は大連で迎えた。当地関東別院輪番宇野田空や筒井助勤たち側近に「戦いに敗けたことは誠に残念であったが、これも負ける理由がなかったでもない。しかし戦いは武力において負けたが、吾々に残された任務はこれからである。念珠を持つものの仕事はこれから始まる。心身を粗末にしてはならない。これから精神浄化の戦いは限りはない、皆解ったか」³³と話したという。光瑞は膀胱腫病で満鉄大連病院に入院するが、やがてスパイ容疑で抑留され、大連市政府の地下室に監禁された。その後大連の有力者であった榊原仙次郎³⁴や石堂清倫³⁵らの働きかけにより、釈放され、1947（昭和22）年3月に日本に帰国した。そして病氣療養中の大分県別府で波乱の生涯を閉じたのである。³⁶



図 (2) 明治 42 年頃の光瑞猯下とサイン-英京ロンドンにて- (大谷光瑞、『大谷光瑞全集第 6 卷』、有光社、東京、昭和 11 年。)

表 (1) 大谷光瑞師著作一覽表

書名	出版年	出版社
旅行教範		京都：龍谷大学図書館
大無量寿経義疏	大正3年 (1914)	岡本村 (兵庫縣武庫郡)：二楽荘出版部
西域考古図譜	大正4年 (1915)	東京：国華社
放浪漫記	大正5年 (1916) 10月	東京：民友社
慨世餘言	大正6年 (1917)	東京：民友社
帝国の危機	大正8年 (1919)	東京：民友社
大勢逆行論	大正9年 (1920)	東京：民友社
極楽莊嚴：大無量寿経講話 大谷光瑞述、満洲仏教青年会編	大正9年 (1920) 1月	満洲仏教青年会
支那の現状 大谷光瑞 述	大正10年 (1921)	--
危険思想論	大正10年 (1921)	東京：民友社
仏教之要諦 大谷光瑞述、光寿会編	大正10年 (1921)	光明閣
見真大師	大正11年 (1922)	上海：大乘社
最近の歐洲	大正11年 (1922)	東京：民友社
般若波羅蜜多心経講話	大正11年 (1922) 10月	上海：大乘社

	大正13年（1924）	東京：大東社
他力真宗	大正12年（1923）4月	上海：大乘社
支那論	大正12年（1923）	東京：民友社
仏説阿弥陀経講話	大正12年（1923）	上海：大乘社
	昭和元年（1926）	大連（満州）：大乘社
対支横議並海外投資論	大正13年（1924）	東京：民友社
仏教の原理	大正13年（1924）	上海：大乘社
濯足堂漫筆	大正14年（1925）7月	東京：民友社
仏教之応用	昭和元年（1926）	大連市：光寿会
孫子新註	昭和元年（1926）4月	東京：民友社
極楽莊嚴：大無量寿経講話	昭和2年（1927）	大乘社
帝国之前途	昭和4年（1929）	東京：大乘社東京支部
無量光如来安楽莊嚴経：梵語原本 国訳 大谷光瑞訳	昭和4年（1929）	京都府堀内村：光寿会
観世音菩薩	昭和4年（1929）12月	東京：大乘社東京支部
大谷光瑞猊下御講演	昭和5年（1930）	--
仏教の大意	昭和5年（1930）	東京：大乘社東京支部
国民の自覚	昭和5年（1930）2月	東京：大乘社東京支部
無量光如来安楽莊嚴経講話	昭和5年（1930）10月	東京：大乘社東京支部
支那事変と我國民之覚悟	昭和6年（1931）	東京：大乘社東京支部
妙法蓮華経講話	昭和6年（1931）	東京：大乘社東京支部
食	昭和6年（1931）2月	東京：大乘社
国産の愛用	昭和6年（1931）	東京：大乘社東京支部
世間非世間 （大谷光瑞述；金谷哲麿編）	昭和6年（1931）4月	東京：実業之日本社
花	昭和6年（1931）9月	東京：大乘社
無題録	昭和7年（1932）	東京：大乘社東京支部
全国民に訴ふ 徳富蘇峰，大谷光瑞共述，岡部宗城編	昭和7年（1932）	近代社
支那古陶瓷	昭和7年（1932）	京都：陶雅会発行
支那の国民性	昭和7年（1932）2月	東京：大乘社東京支部
支那の将来	昭和7年（1932）	東京：大乘社東京支部
大国民讀本	昭和7年（1932）4月	東京：日本文学社
満洲国之将来	昭和8年（1933）3月	東京：大乘社東京支部
維摩経講話	昭和9年（1934）	大阪：大乘社
大谷光瑞全集	昭和9年（1934）12月～	東京：大阪：大乘社
	昭和10年（1935）12月	東京：有光社（発売）

台湾島之現在	昭和10年（1935）10月	大阪：大乘社
現下の時局に就いて	昭和11年（1936）	光瑞会
光瑞縦横談	昭和11年（1936）9月	東京：実業之日本社
支那の将来と我帝国の使命	昭和12年（1937）	東京：有光社
大陸に立つ（精神文化叢書；第1）	昭和13年（1938）7月	東京：有光社
中華民国新首都と海港（大谷光瑞興 亜論叢；第2輯）	昭和14年（1939）	大乘社
大谷光瑞興亜計画1巻～5巻	昭和14年（1939）	大乘社
大谷光瑞興亜計画6巻～10巻	昭和15年（1940）	大乘社
蘭領東印度地誌	昭和15年（1940）11月	東京：有光社
現下の國際情勢 大谷光瑞述	昭和16年（1941）	京都光瑞会
隨筆百則	昭和16年（1941）12月	東京：有光社
熱帯農業	昭和17年（1942）7月	東京：有光社 大阪：大乘社
印度地誌：附：マダカスカル地誌	昭和17年（1942）	東京：有光社
マダガスカル島誌	昭和17年（1942）10月 30日	南洋資料第102号、財団法人南洋 經濟研究所
印度地誌	昭和17年（1942）11月	東京：有光社

（出典：岡西為人編、『大谷光瑞師著作総覧』、瑞門会出版、昭和39年、国立国会図書館オンライン）

1-2 『台湾島之現在』

1917（大正6）年2月、大谷光瑞42歳の時にインドネシアジャワ島において側近の廣瀬了乗により「蘭領インド農林工業株式会社」が設立され、大谷光瑞が総裁を務めた。そこではさまざまな熱帯産業投資プロジェクトを実施され、大谷光瑞の学生が各部門の責任者を務め、廣瀬了乗は総支配人を務めた。それは大谷光瑞の南洋に対する功績の一つである。³⁷

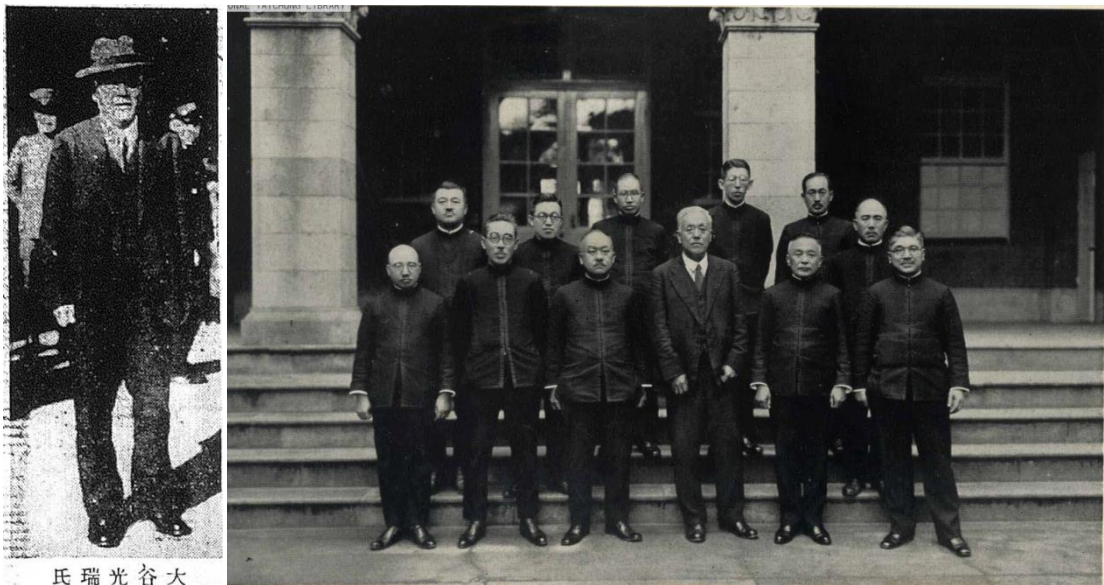
1917（大正6）年11月、大谷光瑞は台湾総督府の招きで台北に到着し、民政長官の下村宏³⁸の客人となった。夕方、北投温泉に総督の別荘「無名庵」に迎えられた。台湾への旅行は、多くの本願寺信者に歓迎されたが、大谷光瑞はすで法主の地位を退いていたので、信徒に対しては言葉を発しなかった。その旅行はただ単に宗教視察旅行ではなく、東南アジアの発展を目的とした旅行であった。11月20日に台北城南小学校で開催された「南洋視察探討」と題する演説は、日本企業の南支南洋への進出を提唱するものであった。

演説終了後、程なくして彼は南部に移り、台南、打狗（現高雄）、阿緱（現屏東）、そして蕃薯寮を訪問した。台湾に3週間滞在の間、彼は熱帯農業の予備調査を行い、台北の総督府「中央研究所」を訪問し、併せて建築中の本願寺を視察した。³⁹

大谷光瑞の初めての台湾旅行は、決して順調なものではなかった。12月初旬、光瑞は腸粘膜炎のため数日間「無名庵」に滞在し、病氣回復後、すぐに台湾を離れた。⁴⁰門司に戻り、すぐに別府「貝島別邸」に行き、静養につとめた。⁴¹その後、大谷光瑞はスラウェシ（インドネシアセレベス島）に資源調査を行うという名目でおもむき、台湾総督府から6,000元の助成金を受け取り、ジャワ島に香茅園（レモングラスガーデン）を開いた。

1930（昭和5）年12月24日に中川健蔵総督⁴²が役人を連れて大谷光瑞の元を訪ね、農業発展問題について話し合った。⁴³当時、大谷光瑞は記者団に対し、台湾総督府の予算が許せば、熱帯植物の栽培と研究に総督が支援することを提案したいと語った。⁴⁴

大谷光瑞は、1935（昭和10）年2月に児玉拓務大臣⁴⁵に招かれ基隆に着いた。台北新起町にある本願寺の台湾別院に宿を取り、総督府の農業試験場や柑橘類試験場などの主要な農業関連部隊を視察した後、中瀬殖産局長⁴⁶ら役人一行と26日間にわたって「台湾全島を踏破する」実地調査を実施した。まず新竹州石油掘削地を見学し、中部の台中州から南部の台南州に行き、四重溪、鵝鑾鼻灯台、観音鼻を廻り、東部の台東、花蓮まで移動し、最後に蘇澳、八堵を經由して、3月1日に台北に戻った。⁴⁷3月8日本願寺台湾別院に於いて台湾の経済価値をテーマとして講演をおこなった。



図（3）左図は大谷光瑞師。高千穂丸に乗って台湾に到着（『台湾日日新報』昭和10年2月17日）

図（4）右図は大谷光瑞の台湾総督府殖産局での集合写真（『台湾島之現在』昭和10年10月）

その後、光瑞は、京都伏見の「三夜荘」に戻り、すべての来客を謝絶し、昼夜を問わず時間を執筆活動に費やした。協力者数人とともに40日かけて『台湾島之現在』を書き上げた。この本は定価10円で、東京の村田利吉によって装幀されたものである。菊版で革張りとし金色の字で緑の表紙であり“台”の字と大谷家の家紋がエンボス加工されており、立派な装幀に仕上がっていた。この本は、大谷光瑞の長年にわたって蓄積された知的経験をもち、台湾の現状を総合的に公表し、⁴⁸そしてそれは拓務大臣児玉秀雄に提出した報告書ともなった。⁴⁹

筆者は「大谷記念館」の研究員加藤斗規氏の教示を得て、当時台湾総督府は大谷光瑞に大量の調査データを資料として提供したと結論付けた。資料の整理は、「三夜荘」の「大谷学生」たちに引き渡され、それによって大谷光瑞は資料の分析をおこなった。『台湾島之現在』は、台湾の熱帯農業の発展を希求する大谷光瑞の期待を表した書物であり、そのことはまた、光瑞がその後の熱帯産業調査への参加しなければならないことを意味するものであった。



図(5)『台湾島之現在』執筆中の大谷光瑞(昭和10年4月19日、「三夜荘」書齋で撮影)(『大乘』昭和10年9月号)

1-3 「熱帯産業調査会」

大谷光瑞の高雄定住は台湾総督府による招待があったことに大きく関係している。「熱帯産業調査会」が1935（昭和10）年10月19日から5日間にわたって台北で会議を開いた際、台湾総督府は各界の専門家を招待し、台湾南進政策における未来の発展方向について議論を行った。会議参加者リストには、50名の委員の名前と役職が掲載されていて、そのいずれもが政界や実業界の著名人であった。大谷光瑞のところだけ役職・職業欄が空欄となっていて何も記入されていなかった。⁵⁰光瑞自身は法主を辞した後はただの一般人になったと話していたが、本願寺の大谷光瑞は南洋地域で熱帯農業に大いに注力していることは広く知られていたため総督府から招待されたと考えられる。



図（6）1935年「熱帯産業調査会」の様子
（昭和10年「熱帯産業調査会会議録」による）

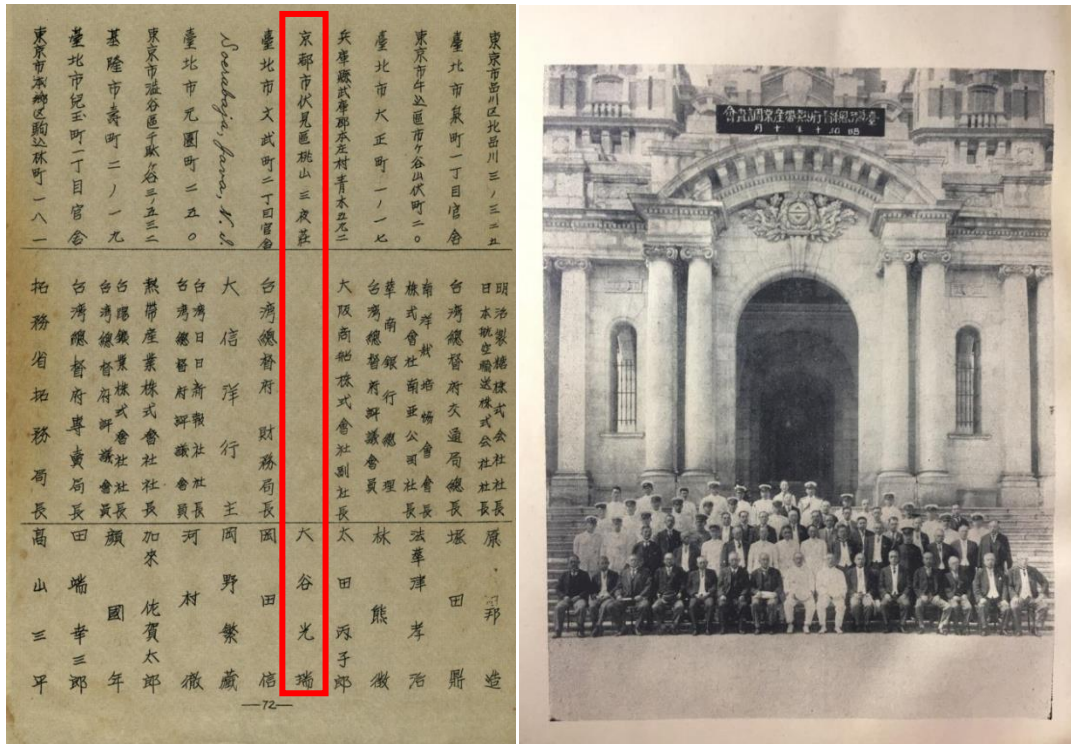


図 (7) 「熱帯産業調査会」名簿と集合写真
 (昭和 10 年「熱帯産業調査会会議録」、『大乘』昭和 11 年 1 月号による)



図 (8) 「熱帯産業調査会」の委員として大谷光瑞
 (『台湾拓植株式会社事業概観』、台湾拓植株式会社、台北市、昭和 15 年)

この重要な会議に先んじて、台湾総督府は1930（昭和5）年11月10日から14日にかけて「臨時産業調査会」を開催し、台湾の産業発展と実績を先導し、現在の産業現況と問題を提示し、将来の根本的な対策について議論した。議題は、ますます緊密な台湾経済依存関係、台湾産業の工業化、現在の国際関係の新たな変化により、台湾は日本の南方の要衝であり、隣国の中華民国と「一衣帯水」と、また、比律賓、ボルネオ、仏領インド支那、シャム、ジャワ、スマトラなどの友邦民地が接し、時には目に見えない干渉が発生し、台湾産業の開発に多年間の努力をして、南支南洋地方と経済的に不可分の関係を築き、貿易の進展を図り、南支南洋と相補を台湾の任務とした。⁵¹

台湾の特殊な地位と特殊な任務に考慮すれば、南洋の地理条件を、台湾の産業を振興させ、南支南洋に投資する企業商社を増加させることが「熱帯産業調査会」の最終目的であるのは明らかである。その会議名は元々「南方経済調査会」であったが、海外情勢を顧慮して「熱帯産業調査会」と改名した。⁵²

台湾総督府は1935（昭和10）年5月14日に「熱帯産業調査会則」を発表し、委員・臨時委員・幹事・書記のリストを作成し、さらに関連部庁の指示に従い、関連資料の収集し、幹事・書記によって整理され調査書および参考書類などを作成した。改正台湾以降の産業経済文化などの事項や成果を検証し、現況を考察し、さらに台湾、南支南洋の将来対策について調査研究を行い、協議後の討論の結果は5日間の議事事項として付されることとなった。

「熱帯産業調査会」は、そのメンバーとして、島内外における官民の権威者を網羅しただけでなく、調査研究期間中に南支南洋事業と深い関係を持つ人物や、現在南支南洋で事業を営んでいる実業家を加えた。会長、副会長一人及び50名に

上る委員、および特別事項審議のため、臨時委員を選定した。会長には台湾総督、副会長は総務長官が選ばれた。委員及び臨時委員は各庁関連の高等官及び学識経験者により総督によって任命され、幹事は各庁関連の高等官が任命された。⁵³

主な委員としては、中川健蔵総督、総務長官平塚広義はじめ台湾軍参謀長陸軍少将荻洲立兵、貴族院議員伊藤文吉男爵などの政界、そして財界からは、彰化銀行専務取締役、南洋協会専務理事や華南銀行副総理有田勉三郎、台湾銀行頭取保田次郎などが選任され、マスコミ、学界などからは、台南新報社長、台湾日日新報社長、台湾新聞社長、台北帝国大学総長幣原坦などが任命された。異色なのは大谷光瑞ただ一人であった。⁵⁴

会議は10月19日から23日まで行われた。3つの特別委員会が開かれ、第1特別委員会は「貿易振興と産業振興」を議題とし、第2特別委員会は、「民間企業への投資を助長し、融資条件を改善する方法」を議題とした。さらに第3特別委員会は「交通施設、文化施設の改善」を議題として討論が行われた。⁵⁵

24日の最終日には、「熱帯産業調査会」において慎重に議論した事項は、国策会社「台湾拓殖株式会社」を設立することであった。それは台湾を中心に南支南洋へ投資する資金を獲得することであった。「熱帯産業調査会」の議論を経て、国策会社「台湾拓殖株式会社」は南支南洋開発事業の一環として1936（昭和11）年6月2日に「台湾拓殖株式会社法」を公布した。そして7月29日に「台湾拓殖株式会社法」施行令と「台湾官有産評価委員会官制」が発表された。同年12月5日から、拓殖事業の経営と拓殖資金を供給するようになり、「台湾拓殖株式会社」は台北に設置され、政府と民間が共同で3千万円の資本金を出資して台湾拓殖債券を発行した。

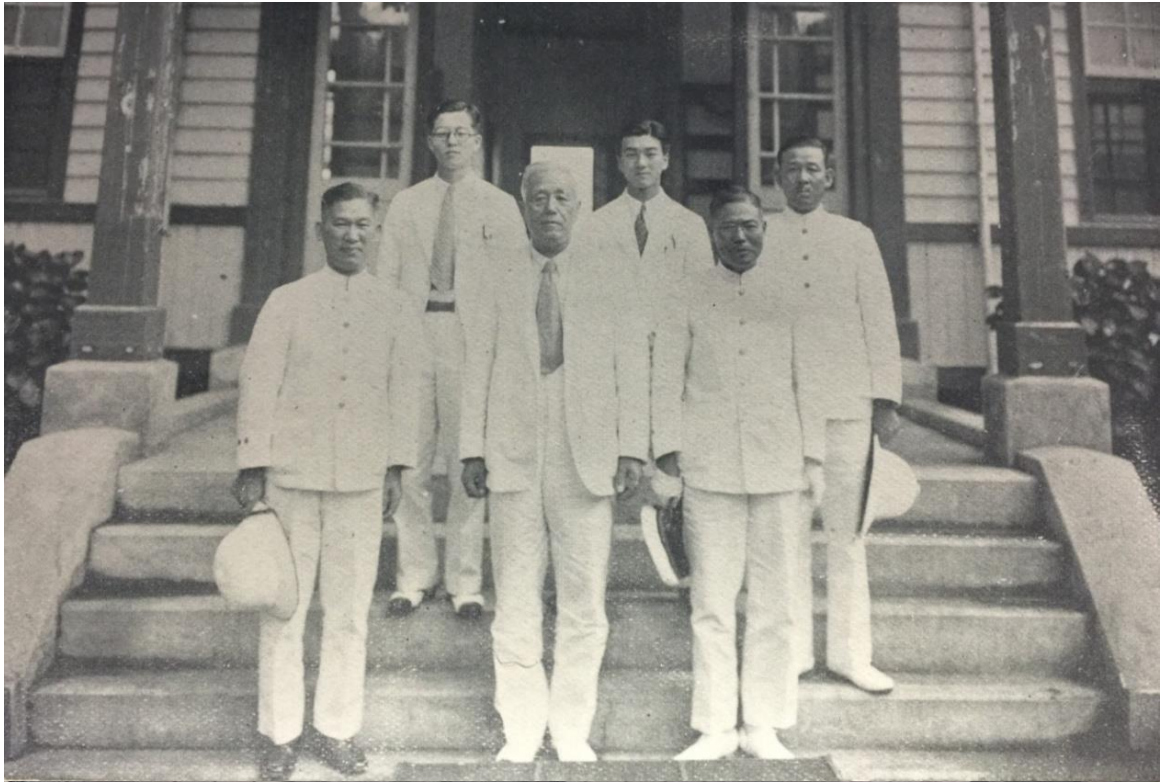


図 (9) 1935年12月29日～1936年2月23日大谷光瑞南洋諸島視察
—1936年2月5日パラオ産業試験場 (上)

図 (10) 1936年2月11日南洋庁長官邸 (両側、林長官夫妻) (下)
(『大乘』昭和11年4月号)

「熱帯産業調査会」の開催時、大谷光瑞はすでに60歳になっていて、徐々に弱っていく彼の身体にとって、暖かい天候を有する台湾（高雄）は理想的な居住地であった。とくに高雄大港埔辺りの景色は非常によく、越冬のためには格好の地であった。また、終了したばかりの南洋事業も、高雄で新たな発展の可能性があった。大谷光瑞は、自分の農園内で、パラゴムやコーヒー、マンゴ、バナナ、ライチ、柑橘など、さまざまな熱帯植物を栽培した。ゆえに、そこは高雄の一つの名所となった。⁵⁶彼は、「逍遙園」で南洋から持ち込んだ新品種の栽培実験を行うと同時に、自分の学生を「鳳山熱帯園芸試験支所」まで行かせて、専門知識を習得させた。完全なる栽培技術が究明されたものは農事試験機関に推薦してもらった。たとえば防風、防砂に効果がある種牛角瓜（*Calotropis gigantea*）を「台南州農事試験場」の責任者である三浦博亮氏に寄贈したのである。⁵⁷



図 (11) 1937 年 11 月 24 日台南州農事試験場の綿花試作地で三浦博亮場長との集合写真 (『大乘』昭和 13 年 4 月号)

筆者が『大乘』(昭和 11 年 5 月号)で台湾屏東砂糖園で撮った大谷光瑞の写真を発見したが、写真右側のスモークバーストは、撮影場所が製糖工場に非常に近いことを示している。この時期の『鏡如上人年譜』によると、1936(昭和 11)年朝日丸で台湾に出航し、3月20日に吉野丸に乗り神戸に戻ったと記しているだけである。「熱帯産業調査会」終了から、「逍遙園」の開園式までを5年間の間に、大谷光瑞は台湾を13回にわたって訪問し、1週間から3ヶ月程度滞在していた。



図 (12) 昭和 11 年 3 月 8 日台湾屏東砂糖園での写真
(『大乘』昭和 11 年 5 月号)

【注釈】

²⁷ (大谷光瑞初めての外遊については、柴田幹夫編、『大谷光瑞—国家の前途を考える—』(『アジア遊学』156号、勉誠出版、2012年)を参照。

²⁸ 廣田四郎、『法主大谷光瑞師伝』、国光館、明治43年、44-45ページ。

²⁹ 大谷光瑞、「大谷探検隊の概要と業績」、香川黙識編、『西域考古図譜』、国華社、大正4年所収。

³⁰ 二楽荘は、1909年に本願寺法主大谷光瑞によって兵庫県の六甲山麓に作られた別荘である。ここで大谷探検隊の収集した文物などが整理され、研究に供された。英才教育を施す武庫中学や、印刷所、それに園芸試験場などは併設されていた。詳しくは和田秀寿『二楽荘史談』(国書刊行会2014年などを参照のこと)

³¹ この辛亥革命と本願寺の関係については、柴田幹夫「辛亥革命と大谷光瑞」(白須淨眞編『大谷光瑞と国際政治社会』勉誠出版、2011年所収論文が詳しい。

³² 『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、124ページ。

³³ 光岡良雄、「終戦の日の猊下」、『大谷光瑞上人生誕百年記念文集』、瑞門会、昭和53年、164ページ。

³⁴ 榎谷仙次郎(1877~1968) 広島県安芸郡下蒲刈島村(現在の呉市)に生まれる。1904(明治37)年堀内組に入社、日露戦争が始まり、臨時軍用鉄道の建築をはじめて請け負う。1909(明治42)年東京築地工手学校土木科を卒業する。1919(大正8)年大連市で榎谷組を創立する。1928(昭和3)年満州土木建築業協会理事長に就任する。日本の敗戦後、大連日本人労働組合の中に設置された「引揚対策協議会」の中心メンバーであった石堂清倫氏に協力して、日本人の引揚げに一定の役割を果たした。1947(昭和22)年3月に日本に引き揚げた。1968(昭和43)年9月東京都立荏原病院にて急性肺炎のため逝去する。築地本願寺にて葬儀が執り行われた。

³⁵ 石堂清倫(1904~2001) 石川県生まれ。東京帝国大学卒業後、労働運動に従事し1927年日本共産党に入党する。1933年転向し釈放され、そして満鉄調査部に入社し、大連に赴く。その後在留日本人の引き上げに尽力する。

³⁶ 『大阪朝日新聞』1948年10月6日号によれば、「大谷光瑞師(西本願寺前法主)別府市鉄輪大

谷家でかねて病気療養中のところ五日午後九時四十分死去。七十三歳。葬儀日取は未定。同師は明如上人の男、明治36年西本願寺住職となり、又同派管長として大正3年まで宗務の進興に努力した。さらにインドシナ、西藏などをさぐり中国、南洋方面に事業経営、各宗派に先んじて満洲開教運動を試みた」と評されている。

³⁷ 加藤斗規、「大谷光瑞と南洋」、『大谷光瑞とアジア 知られざるアジア主義者の軌跡』、柴田幹夫編、勉誠出版、2010年8月、253ページ。

³⁸ 下村宏（1875-1957）和歌山県生まれ。号は海南。ジャーナリスト。政治家。台湾総督府の民政長官を歴任する。

³⁹ 加藤斗規、「大谷光瑞と台湾」、『大谷光瑞「国家の前途」を考える』、柴田幹夫編、勉誠出版、2012年8月、120ページ。

⁴⁰ 仁本正恵「本願寺の明星」、『大谷光瑞上人生誕百年記念文集』、瑞門会、昭和53年、230ページ。

⁴¹ 岡西為人編、『大谷光瑞師著作総覧』、瑞門会出版、昭和39年、95ページ。

⁴² 中川健蔵（1875-1944）新潟県佐渡の人。東京帝国大学法科卒業。1932年から1936年まで第16代台湾総督を務める。

⁴³ 「総督を訪問した大谷光瑞氏」、昭和11年12月24日、『台湾日日新報』、漢珍図書。

⁴⁴ 加藤斗規「大谷光瑞と台湾」、『大谷光瑞「国家の前途」を考える』、柴田幹夫編、2012年8月、勉誠出版、120ページ。

⁴⁵ 児玉秀雄（1876-1947）山口県生まれ。東京帝国大学法科卒業。第3代台湾総督児玉源太郎の長男。1934（昭和9）年10月、岡田内閣の拓務大臣となる。

⁴⁶ 中瀬拙夫（1884-1969）長崎県生まれ。東京帝国大学法科卒業後、台湾総督府に入り、台北州知事、殖産局長などを務めた。

⁴⁷ 原田和布、「台湾島御視察随行旅行記」、『大谷光瑞上人生誕百年記念文集』、瑞門会、昭和53年、230ページ。

⁴⁸ 『台湾島之現在』広告、『大乘』、昭和10年11月号、大乘社。

⁴⁹ 加藤斗規、「大谷光瑞と台湾」、『大谷光瑞「国家の前途」を考える』、柴田幹夫編、勉誠出版、2012年8月、122ページ。

⁵⁰ 『熱帯産業調査会会議録』、台湾総督府、昭和10年10月。

⁵¹ 高濱三郎、『台湾統治概史』、新行社、東京、昭和11年、374ページ。

⁵² 井出紀和太、『南進台湾史攷』、誠美書閣出版、東京、昭和18年、146-147ページ。

⁵³ 井出紀和太、『南進台湾史攷』、誠美書閣出版、東京、昭和18年、148ページ。

⁵⁴ 『台湾総督府熱帯産業調査会概況報告書』、台湾総督府熱帯産業調査会、昭和11年。

⁵⁵ 井出紀和太、『南進台湾史攷』、誠美書閣出版、東京、昭和18年、148ページ。

⁵⁶ 昭和15年11月2日「高雄の新名所 豪華な逍遙園 大谷光瑞氏別邸」、『台湾日報』第28冊、国立台湾大学図書館、財団法人高雄市文化基金会。

⁵⁷ 大谷光瑞、『随筆百則』、「第25則」、有光社、東京、昭和16年12月。

第2章 熱帯農業試験地時代の 大谷光瑞

2-1 光瑞の高雄での住所

光瑞が居した高雄は、「都市の勝景としては台湾第一」⁵⁸であり、また港湾としての機能は「中継港として第一位たると重軽工業地として我領土中第一流に属す」⁵⁹1917（大正6年）年初めて光瑞は、高雄（当時は打狗）を訪問し、良港に期待をかけ、香港に取って代わることのできる良港だと見做した。光瑞の卓見は賞賛されるべきであろう。⁶⁰

「逍遙園」建設計画の実行に伴い、仮住まいが必要になった。1935（昭和10）年、高雄で調査を行った際は、総督府に招かれた客人であったため、貴賓招待専用の寿山館に宿泊していた。調査終了後、大谷光瑞は台湾への投資に興味を持ち始めた。その間、彼はどこに住んでいたのだろうか。

高雄州水産試験所の裏で「昭和十年三月大谷光瑞所有地」と書かれた石碑が建材として再利用されているのが発見された。高雄州水産試験所の所在地は、元打狗英国領事館の場所にある。2008（平成20）年高雄文化局が調査を実施したところ、その場所は古くからある哨船頭（高雄港内にある地名）であるため、大谷光瑞はそこで土地購入をしたのでは、と推測された。しかし、その場所は本願寺の高雄別院に当たる南溟山宝船寺までは1キロの距離もあり、石碑も大谷光瑞が法主を務めた時に作られたものではなかった。そのうえ、発見時には石碑はしっかりと地面に立てられているのではなく、そこに捨てられていたような状態であった。加えて、浜線地域（当時高雄市内で最も栄えていたところ）は熱帯農業を行う場所ではなかった。合理的な解釈として、大谷光瑞は濱線あたりで私用の土地を購入し、私宅を設けていた可能性が非常に高いということが挙げられるだろう。



図 (13) 昭和 8 年頃台湾高雄の「寿山館」宿泊時の集合写真 (筆者が大谷記念館で撮影した)



図 (14) 哨船街の「大谷光瑞所有地」境界杭
 (『高雄市市定古蹟高雄州水産試験場 (英国領事館) 即前清打狗英国領事館登山古道調査研究暨修復計画』、高雄市政府文化局、2008 年)

大栗商行 大場栗五郎	3389	堀江町ノ一	吉島 藤吉
大谷家 大谷光瑞	3570	堀江一ノ六	
大塚洗濯店 大塚信七	3468	堀江二ノ二	

図 (15) 大谷家の所在地は堀江町 1 丁目 6 番地
 (昭和 12 年の『高雄州及澎湖庁電話帖』より、台湾総督府交通局通信部印)

1937（昭和 12）年の『高雄州及澎湖庁電話帖』に、大谷家の電話番号（3570）と住所（堀江町 1 丁目 6 番地）が明確に記載されている。近隣には近堂十助の近堂商行（土木建築）、一ノ瀬商店（和洋雑貨）、台湾日日新報社高雄支局長の中島文雄、高雄電気工業所の野田政喜、高木三千二、帖佐外科医院の帖佐直喜院長、藪そば支店の下久保政市、吉田喜一郎が住んでいた。⁶¹一方、1939（昭和 14）年 10 月に発行された『高雄州及澎湖庁電話帖』には、大谷家に関する記録は一切なかった。地境を示す石碑は全く想定外の場所で見つかったものの、少なくとも正確な時間の提示はできたと思う。大谷光瑞は、台湾全島を踏破する前からすでに高雄定住を考えていたと推断できる。

2-2 その他の「大谷農園」

大谷光瑞の秘書廣瀬了乘氏は、元々ジャワ島のスラバヤで「蘭領印度（オランダ領インド）農林工業会社」を運営していた。1927（昭和2）年に設立されたこの会社は農産品の開発と販売に従事する貿易会社であり、蚕業やシトロネラ園などの事業の展開に努めていた。1936（昭和11）年2月20日、取締役社長になった了乘氏は、大谷光瑞の指示に従って台湾に行き、事業開始のための実地調査を行うことになった。事実上、その時から、本来ジャワ島を拠点としていた事業の規模は縮小されはじめて、経営が停滞傾向を見せた⁶²。資金を作って、台湾に持ち込み、紅茶や柑橘類、鳳梨などへの投資のための事前準備を行った。『台湾日日新報』の報道によると、大谷光瑞は、①3年間で台中州能高郡埔里街挑米坑の70「甲」⁶³の土地を開墾すること、②屏東郡長興庄麟洛則の11「甲」の土地を開墾して柑橘園を作ること、および③大武山の山地を茶園として開発して台湾原住民に栽培技術を伝授することを計画していた。⁶⁴

新聞報道はただ参考資料の一つであるにすぎず、実際の状況は必ずしもその通りに成っているとは限らないと考える。南洋の事業を片付けた後、大谷光瑞が台湾での事業展開に投資した金額について、目下確認できるのは大港埔庄にある「大谷農園」だけである。「逍遙園」別邸に納入された建材からも、政府や実業家による資源提供が多くあったことがわかる。それは、多かれ少なかれ、①大谷光瑞が本願寺法主である、また②個人的な親交が多いことに起因していると思われる。それは台湾総督との付き合いが多く見られることからわかるだろう。例えば、第8代総督田健治郎⁶⁵（1919年10月29日－1923年9月1日総督在任）の『日記』⁶⁶には彼に関する記述が多数あり、また第13代総督石塚英蔵⁶⁷（1929年7月30日－1931年1月16日総督在任）も総督官邸で開催した宴会に彼を招待したことがある。

表 (2) 台湾日日新報に載せた大谷光瑞が台湾各地に農園用地を買収に就いて報道

年份	月/日	新聞の見出しと本文
1935	11/8	人事 來台視察中之伯爵大谷光瑞師。一行四名。訂本八日午後一時半。由台南到員林由台中州口山技師。導往永靖庄視察柑橘園。
	2/20	大谷光瑞氏が 今年高雄に移住 柑橘園の経営と山茶の製造にいよいよ本腰に著手
1936	3/19	大谷氏欲常住台湾 建屋高雄買入土地 (漢文版面)
	3/19	光瑞氏の農園候補地 買収交渉が成立 満洲向けの蔬菜を栽培(日文版面)
	10/23	屏東郡麟洛の農園で 果実類を試作 大谷光瑞氏愈よ著手か
	11/16	大谷農園内に鐘詰工場設置か
1940	11/2	逍遙園開園
	11/3	逍遙園の主内閣参議大谷さん 躍進高雄の市民となる

(出典：『台湾日日新報』、漢珍図書)

高雄市鳳山地政事務所が所蔵する資料「大谷光瑞親下買収書類一昭和13年3月」によれば、大谷光瑞は1938(昭和13)年3月に鳳山郡大樹庄小坪頂、九曲堂

地区の土地を購入し、熱帯果樹試作園を設置した。栽培される熱帯果樹の主な品目はパイナップルであった。その書類には土壌、苗畑、農作物、支出などについてきちんと記録されていた。さらに土地の購入に関する所有権移転登記は、土地の所在地や地番・地目・甲数（土地の面積）・所有者の名前及び住所・概要などの内容が詳しく記録されていた。また熱帯果樹試作園とされた土地の範囲図も記入されていた。その上、往復書類から明らかになったのは、大谷光瑞が書類を受け取った場所は京都伏見桃山の「三夜荘」及び「逍遙園」であった。⁶⁸



図（16）「大谷光瑞猯下買収書類-昭和13年3月」
（出典：行政法人高雄市立歴史博物館、登録号 KH2020.019.0054）

2-3 大港埔の事業用地

1939（昭和14）年3月19日の『台湾日日新報』には大谷光瑞が高雄州の内海忠司知事に、高雄に定住して、椿の栽培及び各種の事業の創出を行うための土地探しを依頼したことが報道されている。⁶⁹実際、1935（昭和10）年10月「熱帯産業調査会」の後、彼が台湾南部視察に出かけた際に、31日高雄駅まで迎えに行ったのは内海氏であった。11月2日から内海氏は大谷光瑞に同伴して、屏東の農事試験場、高雄日出村の煙草耕作移民地、そして台湾製糖所で実地調査を行い、高雄市の都市計画を詳細に把握し、その後の土地探しのための準備をしていた。11月11日付けの内海の『日記』には、「午前八時戸田師（杜多師の誤り、筆者注）来訪。大谷光瑞師の手紙を持参す。同氏居宅敷地の件なり」⁷⁰とある。最終的に、大谷光瑞は、高雄港から4キロも離れた大港埔庄にある「高雄刑務所支所」の南側に位置する台湾製糖株式会社の1万2千坪のサトウキビ畑を選定した。高雄川を超えて行く場所であるが、前金の新州庁に近接していて、高い将来性を有する近郊地域であった。

1936（昭和11）年3月17日、三塊厝派出所に11名の不動産所有主が集められて伊藤地方課長によって交渉が行われ、大谷光瑞は一坪2円という価格で土地を購入したのである。

「逍遙園」の建設準備期間はおそらく1935（昭和10）年から1939（昭和14）年にかけてであると推定される。1936（昭和11）年に大港埔庄の土地を購入後、最初は熱帯の野菜や果物を栽培する「大谷農園」にする計画や、缶詰食品加工工場を建設する計画などが立てられていた。後者に関しては、当時、缶詰食品の権威であった「北海道日本食品製造合資会社」に見積書を作ってもらおう予定であった。

その後、「逍遙園」別邸など4つの建物を造ることが決定された。⁷¹「逍遙園」建設の計画がまだはっきりしてなかった1936（昭和11）年には、早くも、対外的には「大谷農園」という概念で、光瑞の事業計画が呼ばれていた。さらに、単なる「計画」でしかなかったのに、北海道札幌市「日本食品製造合資会社」の創設者戸部侷⁷²氏に依頼し、専門家として、大谷光瑞が所有した高雄市郊外にある熱帯果菜農園において缶詰工場を設立する可能性について調査・評価してもらったという。いったい戸部侷氏は確かに高雄市に来たかどうか、新聞記事の真実性は今の段階では確認できない。とはいえ、大谷光瑞の考えが非常に明確であることは確認できる。高雄で「大谷農園」を設立することによって獲得しうるすべての資源は、熱帯農業を主軸として展開しなければならないのである。当時台湾は日本の領地であり、投資事業と資金取得については、ともに比較的安定した環境であった。

【注釈】

⁵⁸ 大谷光瑞、『台湾島の現在』、大乘社、昭和10年10月、626ページ。

⁵⁹ 大谷光瑞、『大谷光瑞興亜計画』第5巻、大乘社、昭和14年、158ページ。

⁶⁰ 柴田幹夫、『大谷光瑞の研究—アジア廣域における諸活動』、勉誠出版、2014年、126ページ。

⁶¹ 『高雄州及澎湖庁電話帖』、台湾総督府交通局通信部、昭和12年6月、6ページ。

⁶² 加藤斗規、「大谷光瑞と南洋」、『大谷光瑞とアジア——知られざるアジア主義者の軌跡』、柴田幹夫編、勉誠出版、2010年8月、263ページ。

⁶³ 「甲」は台湾の伝統的な面積の単位であり、1甲は約2934.027778坪に相当する。

⁶⁴ 「埔里街附近栽茶適地拂下数十甲」、『台湾日日新報』昭和11年3月25日、漢珍図書。

⁶⁵ 田健治郎（1855－1930）兵庫県柏原の人。1919（大正8）年文官として初めて台湾総督となる。

⁶⁶ 『台湾総督田健治郎日記』、台湾日記知識庫。

⁶⁷ 石塚英蔵（1866－1942、福島県会津の人。東京帝国大学法科卒業後、法制局に入っている。その後、1898年に後藤新平の補佐役として台湾に赴任する。1929年に台湾総督になるが、霧社事件の責任を取り辞職する。

⁶⁸ 『大谷光瑞現下買収書類—昭和13年3月』、行政法人高雄市立歴史博物館蔵。

⁶⁹ 「大谷氏欲常住台湾建屋高雄買入土地」、『台湾日日新報』昭和11年3月19日、漢珍図書。

⁷⁰ 近藤正己・北村嘉恵・駒込武編、『内海忠司日記』、京都大学学術出版会、2012年、646ページ。

⁷¹ 「大谷農園内に缶詰工場設置か」、『台湾日日新報』昭和11年11月16日、漢珍図書。

⁷² 戸部侷（1888－1968）宮城県生まれ。日本食品製造合資会社創設者であり、現在の札幌市にある「大通公園」の設立者でもある。経歴については、日本食品製造合資会社の戸部健ルイス社長のご教示を得た。記して感謝したい。

第3章 「逍遙園」別荘の創建時期について

3-1 建築資金の工面

(一) 用地買収

台湾製糖株式会社最後の社長であった笈干城夫⁷³は『土と人と砂糖の一生』の中で「大谷光瑞は相当勝手気ままに振る舞い、唯我独尊で、好き嫌いがはっきりした高僧である」と述べている。一方、大谷光瑞は笈氏に対してずっと特別な好感を抱いていたようである。それについて、笈氏は、自社製のココナツジャムで作ったスープとカナダ産の小麦粉で作ったパンを彼にプレゼントしたことや、サトウキビ園の野鼠⁷⁴料理を食べさせたことに起因していると考えていた。また、高雄市内に建造された「逍遙園」別邸2階のリビングにある床柱も、笈氏が大谷光瑞に送った上等なインド黄檀の木材で作られたものであった。さらに、「逍遙園」の敷地分割等位の実施においても笈氏から協力を受けていた。たとえ信者や政府高官から揮毫を懇願されても決して書かない大谷光瑞が、ある日突然お昼代の謝礼だといって、笈氏に自ら書いた「至人無為 光瑞」の書をプレゼントしたこともある。また木材を送ってもらった御礼に、大谷光瑞は笈氏夫婦のため、「逍遙園」別邸もしくは濱線の住居で、特別に宴会を開いたこともある。⁷⁵上述のように、「逍遙園」における土地の購入から建物の築造までの5年間において、大谷光瑞は多くの人から協力を得ていたことは確かである。

(二) 建設資金

1939（昭和14）年4月、大谷光瑞が高雄の住居を建てる資金を調達するため、京都伏見桃山にあった大谷家の別荘「三夜荘」の不用品を販売しはじめ、予約販売と京都高島屋における即売の二形式併用で行ったという。⁷⁶

1940（昭和15）年11月1日、『台湾日報』紙上に「逍遙園」の建築費用が4

万8千元に達したと報じられた。それは土地を勸業銀行に担保にしてきた融資額であった。勸業銀行の融資書類では、大谷光瑞の代わりに秘書の廣瀬了乗⁷⁷と森田隆之が債務者となり、借りた金額を材木の購入や給与の支払いに使用したとある。⁷⁸『台湾日報』によると、「逍遙園」の建築工事開始日は勸業銀行高雄支店の設立時点と同じであった。銀行でも初めは台南支店が貸し付けていたが、銀行員は大谷光瑞のことを全く知らず、わざわざ京都支店に手紙を出してひそかに「三夜荘」や大谷光瑞のことを問い合わせていた。このため、台北の本願寺にいた大谷光瑞は、台南の支店長に直接承諾書を送った。銀行は大谷光瑞のような特別な人物を信用調査しても、当然手掛かりがなかった。そして最終的に廣瀬氏と森田氏の信用情報を審査した。⁷⁹

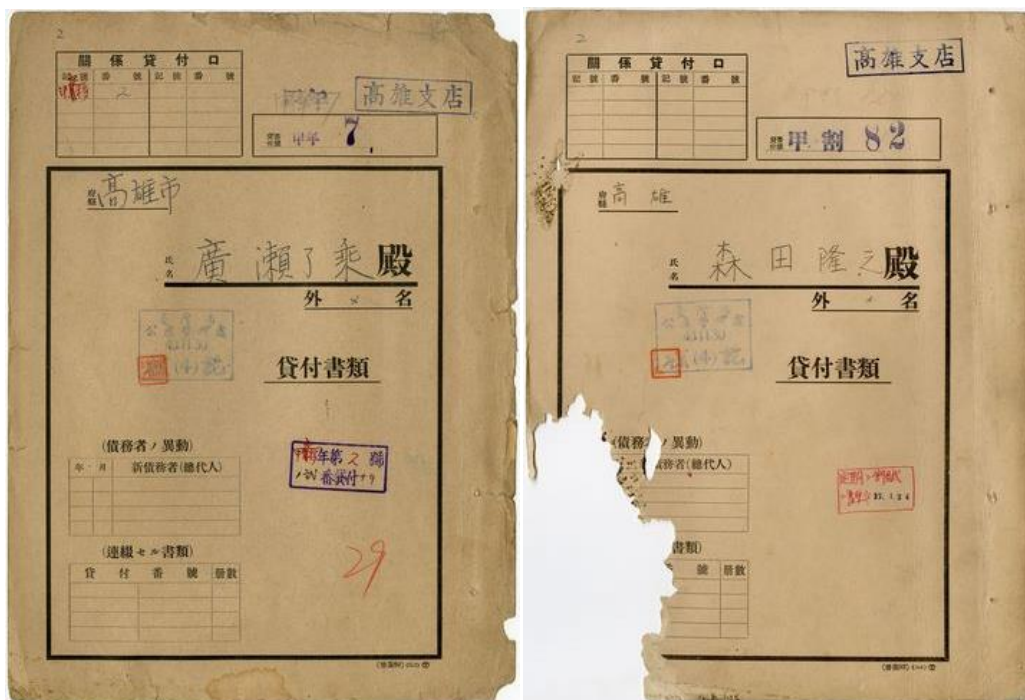


図 (17) 昭和 15 年日本勸業銀行高雄支店貸付書類-廣瀬了乗と森田隆之
 (「日本勸業銀行在台分支機構档案」、中央研究院台湾史研究所、近代史研究所)

表 (3) 大谷光瑞に買収された 13 件にのぼる大港埔庄土地リスト

森田隆之氏ニ提供致キ土地表示

街庄名	番地	土地	面積
高雄市大港埔	参〇番地	畑	貳甲壹六貳八

廣瀬了乘氏ニ提供致キ土地表示

街庄名	番地	土地	面積
高雄市大港埔	壹五ノ壹	畑	〇、貳六〇〇
全	壹九ノ壹	全	〇、〇参〇八
全	貳	全	〇、壹七五
全	貳壹ノ壹	全	〇、〇〇五五
全	参四ノ壹	全	〇、六六貳
全	壹壹六ノ壹	全	〇、参壹五四
全	壹壹七	全	〇、〇六九〇
全	壹六六ノ壹	全	〇、壹六参壹
全	参六ノ壹	全	〇、〇七参六
全	壹壹八ノ壹	全	〇、壹四貳六
全	貳八ノ壹	全	〇、〇四壹八
全	貳九之壹	全	〇、七四貳八
計	拾貳筆		壹甲九貳八参

(「日本勸業銀行在台分支機構档案」、中央研究院台湾史研究所、近代史研究所)

3-2 建築設計と施工

(一) 起工時間と居住期間

『大乘』1940（昭和15）年4月号の「消息」欄において高雄の新邸命名についての記載が「逍遙園」に関する最初の文字記録であった。⁸⁰それ以前の1940（昭和15）年2月号では、新築中の新居は、1939（昭和14）年末から計画が開始されたことのみ記されていた。また、着工したのは1940（昭和15）年3月であるという説もある。⁸¹要するに、農園の開墾計画と「逍遙園」別邸の新築工事は同時に進行されたのである。

大谷光瑞の「逍遙園」居住の始まりを、もし1940（昭和15）年11月1日から3日にかけて行われた開園式を根拠とすれば、実際の居住期間は、2年程度に過ぎないと推測できる。1941（昭和16）年5月14日、光瑞は、過労のため「地方性発疹熱」を患った。高熱が出て生死の境をさまよったため、神戸に戻り療養していたが、身体の様子は以前と比べて大きく低下した。⁸²『大乘』には、1942（昭和17）年1月、病後では最後の「逍遙園」滞在情報が記されている。⁸³

(二) 建設計画

1940（昭和15）年11月3日の『台湾日日新報』の記事では、「逍遙園」の敷地面積は1万2千坪、庭園は4千坪、建坪は250坪であると報道されている。⁸⁴一方、『台湾日報』の方では、建坪は280坪、総工費は4万8000円であると記載されている。⁸⁵京都二角工務店の二角龍蔵氏が筆者に提供した写真によれば、「逍遙園」に配置された建造物は4軒のみで、それぞれ別邸、学生宿舎、秘書廣瀬了乗の宿舎、農舎であった。別邸だけが2階建てであった。その他の写真には、池・

甘藷田・菜園などの施設も写っている。灌漑用水源は農園経営の基盤である。では、当時「大谷学生」が耕作した農地の地形上の高低起伏はいかなる状況であったのか。「大谷学生」であった大島芳夫氏の回想によれば、

「本館……左右後には池がありその後には新高山その他の高山がそびえ本館を三方から囲んでいる。本館の右側に池一つへだてて我々の宿舎あり（筆者注：学生宿舎は「逍遙園」の南側にあった）後側には池と山と広場をへだてて農舎と廣瀬さんの住居があつた（筆者注：廣瀬了乗の住所は「逍遙園」の東側にあった）。宿舎の廻りは大体我々の農業実習地でパパイヤを初め熱帯特有の果樹野菜が植つていた。正月に西瓜を食べたのもこの島からとれたものだつた。」「猯下はよく散歩せられたり。自ら果樹を植え、手入をなされたのもこの実習地であつた。猯下の御食膳に上つた果物野菜類もここからとれた物だつた」⁸⁶と述べている。

（三）工事期間と施工者

「逍遙園」別邸は、大谷式建築のうち近代文化住宅（図 18 参照）であると称され⁸⁷建築材料の一部は京都の「三夜荘」から運ばれてきた。⁸⁸別邸は大谷光瑞が自ら企画してだが、⁸⁹西本⁹⁰先生の設計にかかり、工事の細かい部分は秘書廣瀬了乗を通じて伝えられた。森田工務所の施工期間や、材料を決定する過程も、大谷光瑞の口頭での同意の後、施工されたという。森田工務所の責任者は高雄建築士組合長・森田隆之氏であつた。彼の名刺には「土木建築請負」と「設計製図監督」が印刷されおり、森田氏は、工事を請け負っただけでなく、実際に施工図を制作した人でもあつたかもしれない。

住宅たる逍遙園は新築前に大谷さんが所有する一万二千坪の平地に本年三月着工を開始したもので同園外邸資材の大半は京都三夜庄より運搬したものと云はれてゐるが表面は近代的にして裏側は寺院的なものを多分に含めてゐるがなんと云つても近代文化住宅で所謂大谷式建築である、内部の裝飾は落着きある調度、特に御下賜品の飾られてゐるのは訪問者の謙望の的であつぱり大谷さんの住む逍遙園なるかなの感をもくさせられる、同

図(18) 大谷式建築と「近代文化住宅」

(昭和15年11月3日「逍遙園の主 内閣参議大谷さん 躍進高雄の市民となる」、『台湾日日新報』、漢珍図書。)

「逍遙園」の新築工事は、農園の開墾と新邸の建築工事を併行させる方法を取った。そのため、秘書たちと「大谷学生」は、大工の棟梁たちと一緒に農園の中で自給自足の生活を送っていた。そして、大谷光瑞が視察に来た時は、「寿山館」に宿泊した。秘書田中勝治氏の回想によれば、1940(昭和15)年1、2月の間、大工棟梁の二角幸治郎氏が京都方面より来て、田中氏と二角氏が一緒に住み三食とも自炊したという。⁹¹農園中の甘藷は1尺4寸5分まで成長し、直径は4寸ほどにもなり、二角氏は喜んで甘藷を掘り、甘藷と一緒に撮影した。



昭和拾五年四月一日
 港埔三拾番地
 大進内ニテ撮影
 堀り
 後姿が宿舎建築中
 田 睦 治
 手持ツ甘藷
 一枚厚五分
 太廿直徑四寸
 二角幸治郎
 鄭春萍(臺灣)
 西田

図 (19) 二角幸治郎 (中)「甘藷掘り」
 (二角龍藏氏提供)

3-3 「逍遙園」開園式

1940（昭和15）年11月1日午後、高雄市の近郊に新しく建てられた「逍遙園」では盛大な開園式が行われていた。その場で、高雄市長宗藤大陸は、高雄市に次の二重の喜びが来たことを発表した。すなわち、①高雄市が新南群島に編入され、縦横数百里の新興大都市に成った、②大谷光瑞氏のような国際的著名人を市民として迎え入れられた、ということである。会場には高雄市各界の名士が多く駆けつけ、大谷光瑞が高雄市民に成れたことを祝賀した。⁹²



図 (20) 「逍遙園の新築披露」
（昭和15年11月2日「逍遙園の新築披露」、『高雄新報』第9冊。）

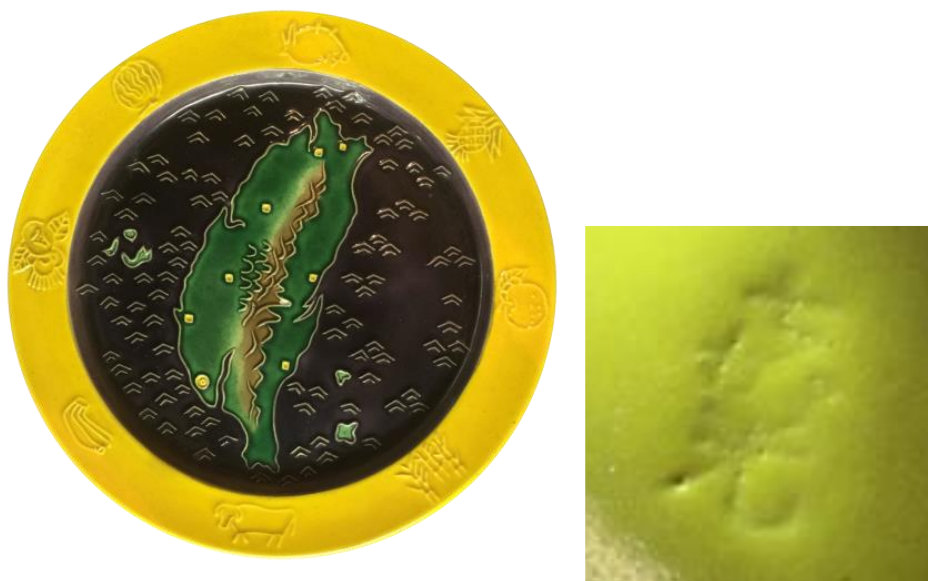
開園式の際、記念品として「逍遙園」の絵葉書と一枚の黄と青の配色の浮き彫り模様を帯びた黄交趾皿を配布した。図案は、「台湾島と物産」を題材として、皿の縁の外周には時計回りに豚、パイナップル、柑橘、サトウキビ、水牛、バナナ、蓮霧、スイカが描かれ、皿の中央は「台湾島」であり、中央山脈、淡水河、大甲溪、下淡水溪、花蓮溪、馬公、白沙、西嶼、緑島、蘭嶼の各離島及び台湾各地の都市も描かれている。これらの都市は、大谷光瑞が『台湾島之現在』を書いた時に訪れたところである。高雄市を示すマークが明らかに他の地域より大きく、今後大谷光瑞が高雄市民であることを多くの人々に伝えたいと思っているからであろう。

大阪の津村別院と別府大谷記念館に蔵されている「逍遙園」の黄交趾皿は「大谷学生」の末廣正昭氏と秘書を務めた吉田せつ氏から寄付されたものである。筆者は黄交趾皿の底部の落款から「嘉光」という字を見分け、この黄交趾皿は、京都の陶芸家、清水焼の名工森野嘉光に依頼されたことを突き止めた。依頼された時、森野は41歳であり、五代目清水六兵衛のところで学んでいた。大谷光瑞の古陶磁が好きは有名で、1932（昭和7）年に「支那古陶磁器」（陶雅会、1932年）という研究書を書いているほどだった。各別荘のために記念品を作るのは大谷光瑞の習慣のようであった。例えば1934（昭和9）年、大連「浴日荘」が開園したとき、「白川製陶・白雲陶器」に注文して側近に配った。大谷家の紋様が刻まれた白い磁器は、大谷記念館に収蔵されている。それを見た人なら誰でも、「逍遙園」の磁器の皿の色合いが鮮やかで「浴日荘」の陶磁より遥かに優れていることと思われるだろう。このことは高雄という地が大谷光瑞の心の中での位置を示しているものだろう。

表（4）森野嘉光氏略歴

生没年	1899（明治32）年4月15日～1987（昭和62）年5月2日。享年88。
出生地と親族	京都市東山区五条坂で、陶芸家の森野峰楽の長男として生まれた。息子は森野泰明である。
本名	森野嘉一郎
経歴	京都市立美術工芸学校日本画科 京都市立絵画専門学校日本画科卒業 文展特選受賞 第3回帝展日本画「比叡の山麓」初入選（大正10年） 「大毎美術展」（大阪毎日新聞社主催）で、日本画の「丘の上」が入選します。（大正12年） 第7回帝展日本画入選（大正15年） 東京銀座松屋で、陶芸作品に初の個展を開きます。（昭和1年） 第8回帝展に工芸部新設され「清流草花文花瓶」第一回展より入選（昭和2年）、以後工芸入選数十回 第4回新文展に「塩釉枇杷図花瓶」特選受賞（昭和16年） 日展審査員（昭和27年、昭和30年）、理事、参事 京展審査員 京都府工芸美術展審査員 大阪関西展審査員 社団法人日展評議員（昭和33年） 第1回現代工芸美術展「緑釉窯変耳付花瓶」発表（昭和37年） 日本芸術院賞「塩釉三足花瓶」受賞（昭和38年） 京都市文化功労者（昭和44年） 日展理事、現代工芸美術家協会参与（昭和46年） 京都府美術工芸功労者（昭和45年） 日本新工芸家連盟代表委員、日展参事（昭和55年）
作品集	『森野嘉光作陶集』、求龍堂、昭和60年。

（出典：『日本美術年鑑』昭和62・63年版、329-330ページ、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所。



図（21）「逍遙園」開園式の記念皿黄交趾焼「台湾島と物産」森野嘉光作（筆者が別府大谷記念館で撮影した）

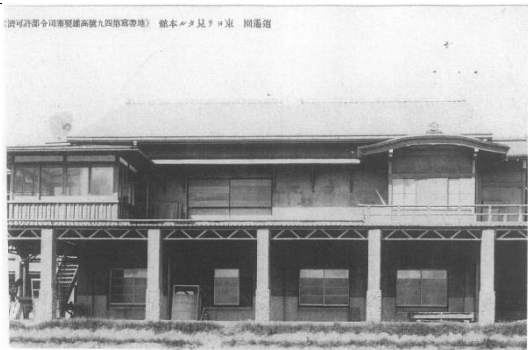
表 (5) 「逍遙園」の絵葉書



「逍遙園」全景
(地帯写第 49 号高雄要塞司令部許可
済)



「逍遙園」東北角ヨリ見タル本館
(地帯写第 49 号高雄要塞司令部許可
済)



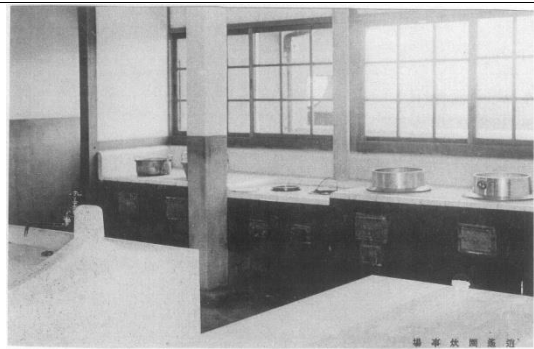
「逍遙園」東ヨリ見タル本館
(地帯写第 49 号高雄要塞司令部許可
済)



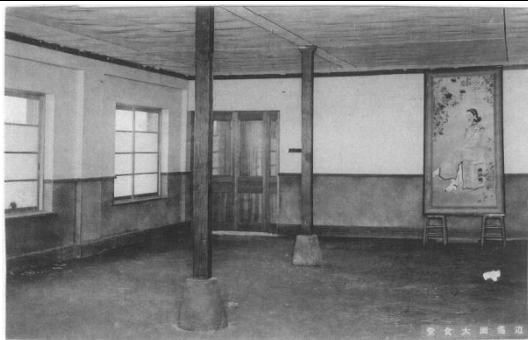
「逍遙園」農場一部
(地帯写第 49 号高雄要塞司令部許可
済)



「逍遙園」食堂



「逍遙園」炊事場



「逍遙園」大食堂



「逍遙園」公衆大防空壕

(加藤斗規氏提供)

「逍遙園」開園式が3日間行われ、1940（昭和15）年11月1日正午、当時の「内閣参議」⁹³であった大谷光瑞は別邸内で高雄市尹（市長）宗藤大陸はじめ各界の有力者、また日本から台湾にやって来た「光寿会」訪問団を招待した。11月1、2日は2日間午前10時から高雄市役所の階上で「光寿会」のために「無量光如来安楽莊嚴経」という講演を行った。11月3日は世界情勢と三国同盟の意義について講演を行った。3日間にのぼる開園式期間は、時局の影響で提供される食料が簡素化されていた。⁹⁴当日は、「大谷学生」20人も学生服を着て、「逍遙園」の北側のテラスの下で写真を撮った。



図（22）昭和15年11月3日「逍遙園」開園式での「大谷学生」
（田中勝治、「台湾での思い出」『大谷光瑞上人生誕百年記念文集』、昭和53年、
瑞門会、392ページ）

3-4 大谷光瑞の「秘書」と「大谷学生」

大谷光瑞は自分の主宰する雑誌『大乘』誌上において、1939（昭和14）年12月、大阪で「大谷学生」20名を募集し、合格者を高雄「鳳山熱帯園芸試験支所」（正しくは高雄の「熱帯産業試験所」）に送り、訓練を受けさせることを公表した。⁹⁵大谷光瑞は人材育成に力を入れたことで知られていて、台湾の発展のために日本で「大谷学生」を募集した。頭脳明晰、資性敏活、身体強健な生徒が必要とされ、1940（昭和15）年に小学校卒業者20名を公募した。申し込み先が大乘社で、申し込み締め切り日が1月20日であった。合格者は台湾高雄の「熱帯産業試験所」に配属され、南洋の発展に必要な人材を育成していた。

1940（昭和15）年2月17日、20名の優秀な少年が相愛女学校（本願寺系列の宗門校で津村別院に隣接する）で試験を行い、最終的に15名が採用された。4月27日に合格者は神戸港に集結し、「富士丸」に乗って出発した。「大谷学生」の一人である縣義治氏は、選考に参加した「大谷学生」の成績はいずれも故郷の一番いい学校に通えるはずであったが、家の事情で大谷光瑞に従うように手配されたと回想している。⁹⁶これは完全に経済問題ではなかった。彼自身を例にしてみれば、小学6年生の時、父親が大谷光瑞の崇拝者であったことから「大谷学生」の選抜に参加するよう命じられ、合格した15名の生徒の一人となり、そのまま高雄の農業実習地に派遣されたのである。

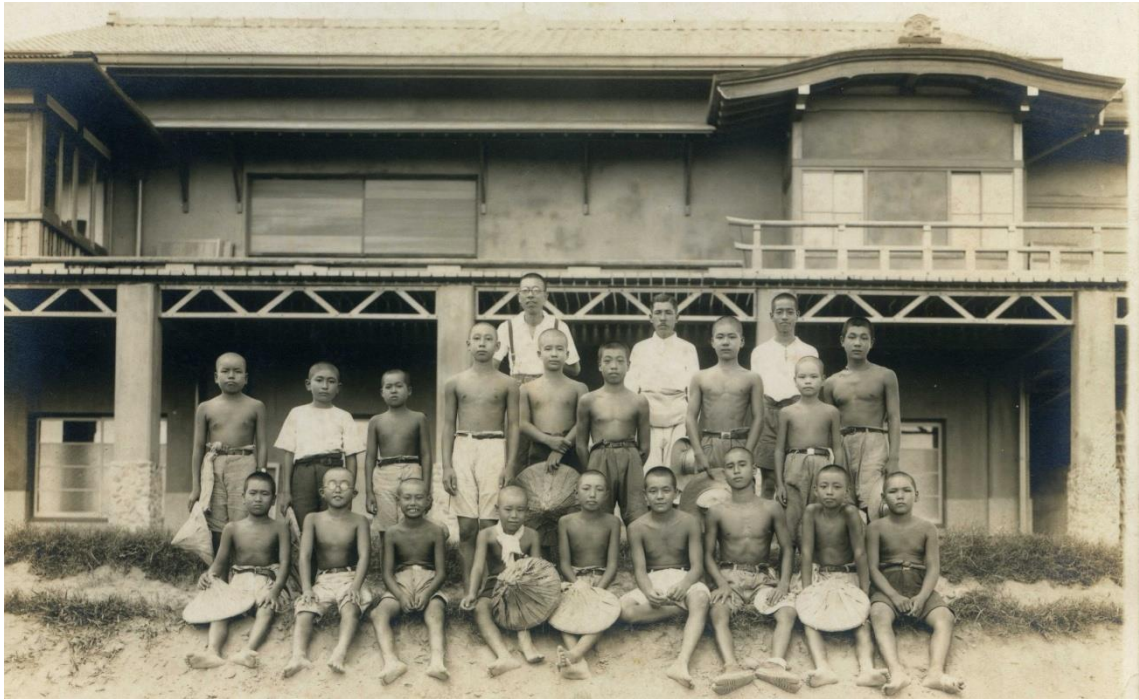


図 (23) 「逍遙園」 東側：大工棟梁二角幸治郎、廣瀬秘書と「大谷学生」
(二角龍蔵氏提供)

4月末、台北、上海、北京からの「大谷学生」が続々と「逍遙園」に到着した。やがて大阪から新たに選抜された15人の「大谷学生」もやって来た。新入生15人のうちの前述の縣氏は、台湾の状況を全く知らず、高雄に来て広大な耕地を見て、全く学校の様子ではなかったと回想している。⁹⁷「大谷学生」は全員十何歳ぐらゐの年齢で、やや年長の秘書と一緒に暮らしていた。秘書は仕事や休憩の時間そして授業スケジュールなどを手配し、日常の農作業などを学生に割り当てていた。

3-5 台湾「光瑞会」

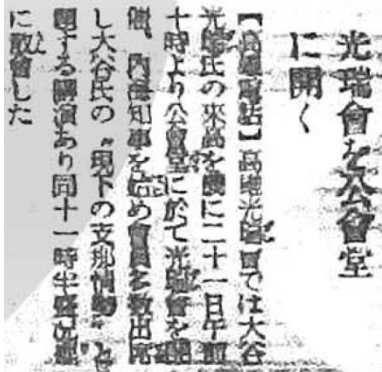
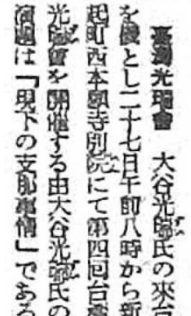
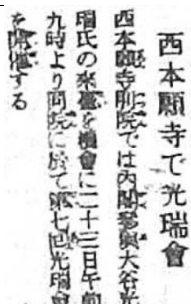
台湾「光瑞会」は、1935年（昭和10）2月22日に設立された。この会は、総督府の招聘により台湾に来た大谷光瑞が台湾島の視察期間に計画して設立したものであり、個人名義をもって初めて台湾で設立した後援会組織である。2月22日の歓迎会は、台北の本願寺で開催された。参加者は中瀬総督府殖産局長、野口知事、松岡市尹（台北市長松岡一衛）及び300名ほどの信者であった。歓迎会の中で台湾「光瑞会」を設立しようという提案が上がってきた。⁹⁸台湾「光瑞会」の設立後は、光瑞来台に際し、その都度講演を行うこととなった。講演の場所は主に台北の本願寺と高雄の公会堂の二か所で行われた。開催された場所から「台湾光瑞会」と「高雄光瑞会」のように区別していた。「光瑞会」に関する報道の表題を下記の表にまとめた。表の中に「光瑞会」のイベントを示しており、主な内容としては大谷光瑞個人の講演会であった。講演の内容は、主に仏教経典の話や中国情勢の分析、台湾の経済価値と産業の発展の話などが中心であったが、特に「高雄の将来」をテーマとして講演していたことから、大谷光瑞が高雄で熱帯農業を発展させる前に行った宣伝活動といえる。大谷光瑞は、台湾での公開講演を通して信者の力を凝集させたほか、更に世間の人々に台湾の今後の発展方向、すなわち熱帯農業の発展理念を伝えた。これは大谷光瑞が理念から行動に移った具体的な証明となっている。

表 (6) 1935～1940 年台湾「光瑞会」の公開活動

年	月/日	新聞の見出し	本文
	---	---	<p>臺北の西本願寺では信徒が中心となつて師の歡迎會を開いたが席上田中本社長によりて臺灣光瑞會の提唱あり、一舉にして會の成立を見、求めずして光瑞師が三月八</p> <p>偉人「光瑞師」、台湾、昭和10年</p>
1935	2/22	台湾光瑞会 組織するに決る 同会で光瑞氏が講演	<p>臺灣光瑞會 組織するに決る 同会で光瑞氏が講演</p> <p>西本願寺に於ける大谷光瑞氏の歡迎會は二月十日午後七時から開演。臺灣光瑞會の組織は總計にせむと見られ、野口昭平、松岡市、光瑞氏も自分の會であるからとて、同會にこの講演を快諾した。因に同會は三月廿九日に西本願寺の講堂に於て開演した。光瑞氏はこの講演を快諾した。因に同會は三月廿九日に西本願寺の講堂に於て開演した。光瑞氏はこの講演を快諾した。因に同會は三月廿九日に西本願寺の講堂に於て開演した。</p>
	3/8	大谷光瑞氏が八日講演 光瑞会員のため (講題:「台湾の經濟価値」)	<p>大谷光瑞氏が 八日講演 光瑞會員のため</p> <p>來臺中の大谷光瑞氏は八日午前七時から新起町西本願寺に於て光瑞會員のために「臺灣の經濟価値」について講演をなす</p>
	3/8	光瑞會員の爲 光瑞師が講演 入会申込は西本願寺宛 (講題:「台湾の經濟価値」)	<p>光瑞會員の爲 光瑞師が講演</p> <p>入会申込は西本願寺宛</p> <p>大谷光瑞師が臺灣の經濟価値を講じた。その講演は各報に於て大々的に報じられた。その講演は各報に於て大々的に報じられた。その講演は各報に於て大々的に報じられた。その講演は各報に於て大々的に報じられた。</p>

3/8	<p>光瑞会員 二百余名 八日も会場て 申込を受く (講題：「台湾の經濟価値」)</p>	<p>光瑞會に於ける大谷光瑞氏の講演は八月十日前から西本願寺を会場に開催される、同師の公開講演はこれが始めてなので入會者二百余名に達し各方面で非常に期待してゐるが、入會者は當日も会場にて申込みをうける由</p> <p>光瑞會員 二百餘名 八日も会場て 申込を受く</p>
11/10	<p>光瑞氏が講演 光瑞 会主催で (講題：「仏説不増不 減經」)</p>	<p>臺灣光瑞會では目下來臺中の大谷光瑞氏を招き來る十月十日前八時から新起町西本願寺別院に於て會員の爲めに大衆佛教に於ける信仰問題の哲學的根據を闡明せる「佛説不増不減經」の解説を仰ぐ事となつたがこの際入會なき方は當つて入會方を希望すると</p> <p>光瑞氏が講演 光瑞會主催で</p>
11/10	<p>光瑞会開会時刻変更</p>	<p>光瑞會開會時刻變更 光瑞會は十月十日前八時から本願寺で開會する予定であつたが都合によつて同十時開會に變更された</p>
11/10	<p>光瑞氏が野天講演 (講題：「仏説不増不 減經」)</p>	 <p>光瑞氏が野天講演 臺灣光瑞會主催の大谷光瑞氏の講演は十月十日前八時から本願寺を会場に開催される、同師の公開講演はこれが始めてなので入會者二百余名に達し各方面で非常に期待してゐるが、入會者は當日も会場にて申込みをうける由</p> <p>光瑞氏が野天講演</p>

1936	11/29	<p>高雄光瑞会 廿九日 第一回講演会 (講題:「高雄の将来」)</p>	<p>聞三時頃由神甲を獲いて、艦火した。艦火は夏の水が響く。恐つたものらしい。</p> <p>高雄光瑞会 廿九日第一回講演会</p> <p>【高雄電】大谷光瑞氏は高雄市に任官を定め、果敢にその他各事業の振興を期し、台湾産業の発展に當る事になつたが、今回同氏の健康悪化する事により、段々受ける同志の熱烈な高瑞光瑞会を組織して、同志の任官、修業等を志す事となり、且下</p> <p>邦人乗組みの埃及機墜落か 英艦逐艦が海上捜査</p> <p>【カイロ二十三日電】エチオピアのミスル航空会社の旅客機は二十三日ハイファ、パレスチナ、ポトサイド間で行方不明となつた。恐らく海上に墜落したのではない。</p> <p>【カイロ二十三日電】エチオピアのミスル航空会社の旅客機は二十三日ハイファ、パレスチナ、ポトサイド間で行方不明となつた。恐らく海上に墜落したのではない。</p>
	12/3	<p>大谷光瑞氏が講演 (講題:「台湾の経済価値」、「仏説不増不減経」)</p>	<p>大谷光瑞氏が講演 台湾光瑞会ではさきに大谷光瑞氏の「台湾の経済価値」「佛説不増不減経」と二回にわたる講演会を催して、會員に多大の感銘をあたへたが、第三回として三日午前七時半から一時間西本願寺台湾別院で「支那古陶器」の演題の下に光瑞氏の講演会を開催する</p>
1937	11/21	<p>高雄光瑞会 (講題:「支那問題」)</p>	<p>○高雄光瑞会 二十一日午前十時より公會堂に於て高雄光瑞會員に對し、大谷光瑞氏の支那問題に對する大講演あり、堂々一時、時間半意味深長にして會員に多大の感銘を與へたり</p> <p>「支部通信」、『台湾刑務月報』、台湾刑務協会、昭和13年</p>

	11/22	光瑞会を公会堂に開く (講題：「現下の支那情勢」)	
	11/26	台湾光瑞会 (第四回台湾光瑞会 講題：「現下の支那事情」)	
1939	1月15日	台湾光瑞会 (講題：「金光明最勝王經」)	<p style="text-align: center;">臺灣光瑞會</p> <p>過般大谷光瑞殿下御來臺中を機會に十二月四日臺灣別院後庭に於て開會、消交通局長の開會の辭に次で殿下には午前九時十五分より二時間と四十分にあたる大獅子吼を遊ばれた。當日松本混三氏より新たに寄贈せられたる圓盤機を用いたので二百餘名の聴衆は明瞭に拜聴することの出来た事は非常な快事であつた。講本は金光明最勝王經、和譯の全本一冊づゝ會員に配呈、式後屋外に於て殿下御出席の下に會員一同の會食があつた。</p> <p>當日殿下には後庭中央のカタンの樹下で本經の御講讀があつたので南園に於ける召伯甘棠の故事が思ひ出され、床しい事であつた。</p> <p>「台湾光瑞会」、『光乃園』、昭和14年1月15日</p>
1940	11/23	西本願寺で光瑞会 (第七回台湾光瑞会)	

(出典：『台湾日日新報』・『台湾刑務月報』・『光乃園』)

【注釈】

- ⁷³ 笥干城夫（1889－1977）、秋田県出身。東京帝国大学法科卒業後、1912年台湾製糖入社。
- ⁷⁴ 鬼鼠 *Bandicota indica*、17世紀にオランダ人が導入し、台湾最大の鼠類になる。サトウキビを食べ、台湾農家の郷土料理として有名である。台湾語では「山和肉」「山河肉」または「山貉肉」と呼ばれる。
- ⁷⁵ 笥干城夫、『土と人と砂糖の一生：笥干城夫遺稿』上巻、さきたま出版会、昭和64年、226－227ページ。
- ⁷⁶ 「消息」、『大乘』昭和14年3月号、大乘社、116ページ。
- ⁷⁷ 蘭領インド農林工業株式会社社長、大谷光瑞の秘書。
- ⁷⁸ 日本勸業銀行档案、中央研究院台湾史研究所、筆者抄録森田隆之借貸文件。
- ⁷⁹ 日本勸業銀行档案、中央研究院台湾史研究所、筆者抄録勸業銀行高雄支店長信件。
- ⁸⁰ 「消息」、『大乘』昭和15年4月号、大乘社、56ページ。
- ⁸¹ 昭和15年11月3日「逍遙園の主 内閣参議大谷さん 躍進高雄の市民となる」、『台湾日日新報』、漢珍図書。
- ⁸² 「光瑞猥下御病中記（一）」、『大乘』昭和16年7月号、大乘社、15－16ページ。
- ⁸³ 「消息」、『大乘』昭和17年2月号、大乘社、121－122ページ。
- ⁸⁴ 昭和15年11月3日「逍遙園の主 内閣参議大谷さん 躍進高雄の市民となる」、『台湾日日新報』、漢珍図書。
- ⁸⁵ 昭和15年11月2日「高雄の新名所 豪華な逍遙園 大谷光瑞氏別邸」、『台湾日報』第28冊、国立台湾大学図書館、財団法人高雄市文化基金会。
- ⁸⁶ 大島芳夫、「高雄のお住い、逍遙園」、『瑞門会誌』第2号、瑞門会、昭和27年9月1日、19ページ。
- ⁸⁷ ここでいう近代文化住宅は、応接室や玄関にドアを取り入れた和洋折衷の住宅を指し、大正から昭和の初めにかけて流行した建築様式である。新式住宅とも言われ、新しい生活様式の流入とともに、大いに広まった。
- ⁸⁸ 昭和15年11月3日「逍遙園の主 内閣参議大谷さん 躍進高雄の市民となる」、『台湾日日新報』、漢珍図書。
- ⁸⁹ 昭和15年11月2日「逍遙園の新築披露」、『高雄新報』第9冊、国立台湾大学図書館、財団法人高雄市文化基金会。
- ⁹⁰ 小生夢坊、「光瑞の矛盾性」、『再認識の台湾』、日満新興文化協会、昭和12年、62ページ。
- ⁹¹ 田中勝治、「台湾での思い出」、『大谷光瑞上人生誕百年記念文集』、瑞門会、昭和53年、394ページ。
- ⁹² 昭和15年11月3日「逍遙園の主 内閣参議大谷さん 躍進高雄の市民となる」、『台湾日日新報』、漢珍図書。
- ⁹³ 大谷は近衛文麿内閣の参議（昭和15年10月3日－1941年10月23日）を務めた。
- ⁹⁴ 「消息」、『大乘』昭和15年12月号、大乘社、89ページ。
- ⁹⁵ 「大谷学生募集」、『大乘』昭和15年1月号、大乘社、90ページ。
- ⁹⁶ 2018（平成30）年1月27日筆者は大谷記念館の加藤斗規氏に同行し、「瑞門会」員の縣義治氏宅を訪問した。その聞き取りの中で言われた言葉である。縣義治『朝降る雨 縣義治歌集』（白玉書房、1958年、155ページ。）にも同様な記述がある。
- ⁹⁷ 縣義治、『朝降る雨 縣義治歌集』、白玉書房、昭和33年、155ページ。
- ⁹⁸ 昭和10年2月22日「台湾光瑞会 組織するに決る 同会で光瑞氏が講演」、『台湾日日新報』、漢珍図書。

第4章 「逍遙園」の生活について

大谷光瑞は、暖かい「逍遙園」で越冬し、翌年の春まで滞在し、夏になると上海や大連の別荘へと移住するのであった。「逍遙園」開園式の1ヵ月前、大アジア主義者⁹⁹である大谷光瑞が近衛文麿の「内閣参議」に就任し、1941（昭和16）年9月22日に辞任するまで務めていた。高雄は日本の国策の中で南進の拠点であり、南方の資源補給においても重要な結節点であった。しかし、戦争の膠着状況によって、平和的、漸進的に発展させる方法が結局は空論となってしまう、大谷光瑞の心の焦慮は想像できる。こう見れば、「逍遙園」は大谷光瑞にとって「逍遙」の境であり、乱世の中では、ここを頼りとするほかには一時的な解放が得られないとあってよいであろう、『逍遙園雑詠』はこのような状況下で誕生したのであった。

4-1 『逍遙園雑詠』

大港埔庄は、大港溪流域で形成された平原地域であり、地形が非常に広々としていて、中央山脈の絶景をはっきりと見ることができるところである。「逍遙園」で起臥していたとき、大谷光瑞は毎朝5時に起床し、東側2階のバルコニーでコーヒーを飲みながら、日の出を静かに待つ。遠くを眺めると、日の出前の大武山の山頂に霧が薄くかかっている、一方西側のほうには、残月が寿山の山頂から下へと落ちていくのが見える。徐々に明るくなってくるうち、空にはまだ点々の星が見えるなか道路には野菜畑に沿って歩く人の数が少しずつ増えてくるのである。これは、朝早起きする人しか見られない景色であると大谷光瑞がいう。¹⁰⁰新興都市の郊外地に住むことによって、生活や交通の不便に耐えざるを得ない部分もあるが、雑踏から離れ、絶景を独占できるメリットもある。当時、「逍遙園」のあるところは、住民の私有農地と台湾製糖株式会社のサトウキビ畑以外は、ほとんどは未開発地域であり、灌漑用に作られた水路は唯一の人工建造物であった。この

ような場所を定住の地として選んだことは、63歳になった大谷光瑞の心境を反映し、別邸を「逍遙園」と命名した理由とも考えられる。

『逍遙園雑詠』は大谷光瑞による近体詩である。中国唐の時代に流行した五言律詩に体裁をとったこの詩は、五言の句が8句あり、計40字からなる。8句は首聯、頷聯、頸聯、尾聯という4つの聯からなっている。頷聯（第3、4句）と頸聯（第5、6句）は対句となり、第2、4、6、8句は押韻している規則がある（第1句は押韻しなくてもよいが、第3、5、7句は押韻しなくてはいけない）。詩文の並べ方には起承転結があり、限られた文字をもって無限の感受性と有形の形象を表している。五言律詩を表現形式に創作したことは、大谷光瑞の高い漢文の教養を裏付けているほかならない。

「雑詠」は題を決めないで自由に物事を詠むことを意味する。大谷光瑞は「逍遙園」に滞在中、それをもって自分の感情を述べ、風物を詠んだ。彼は昭和16年1月から、『大乘』に5首ずつ投稿した。『大乘』は大阪津村別院内にある大乘社によって発行された月刊誌で、大谷光瑞の活動や文章、経典の読解などを掲載していた。また門下生と秘書たちの文章も掲載されている。

「逍遙園」別邸が建てられた後、大谷光瑞の高雄での新しい生活がスタートしたが、同時に、彼は第2次近衛内閣の「参議」（第2次近衛内閣における「内閣参議」就任は、1940年10月2日である）になり、国家的事務を担うようになった。このため、彼の詩文には、国事に関する不安と心配が垣間見える。その後、第二次世界大戦の勃発を受け、彼はこの高雄の新居を離れることになった。光瑞の「逍遙園」に住んだ時間は2年にも満たなかった。

『随筆百則』¹⁰¹や『熱帯農業』¹⁰²と比較すれば、『逍遙園雑詠』にはより多くの

感情表現があることがわかる。それは当時の大谷光瑞の心境及び「逍遙園」の様子を伝えている。『随筆百則』の散文体と違い、『逍遙園雑詠』の律詩には多くの隠喩を使い、「逍遙園」研究に少なからず補足材料や新しい視角を提供している。本稿は創作背景、人物をめぐる直喩・典故を手がかりに、「逍遙園」の地理環境、建築、水源などを分析し、大谷光瑞が多く引用した荘子の「逍遙遊」の内容をも視野に入れて、「逍遙園」命名の詳細を明らかにしたい。

(一) 創作背景

「逍遙園」時期の大谷光瑞は近衛文麿内閣の「参議」（1940年10月3日～1941年10月23日）でもあった。当時は石油の輸送禁止令が出され、政界は米国と交渉か宣戦かをめぐって激しく議論していた。以下に引用した第16首は当時の国際情勢を詠っている。

我學屠龍術¹⁰³ 技成已歷年 南溟¹⁰⁴雲隔¹⁰⁵日 東海波滔天

魍魎¹⁰⁶嘯洪壑¹⁰⁷ 豺狼橫道邊 丈人¹⁰⁸今不在 鼈背¹⁰⁹尚依然

解釈：私は奥深い学問を学び、長年を経て一定の成果も得た。今、南洋の太陽は黒雲に覆われ、東海は荒波に揉まれている。化け物は溝や谷の深いところ（国の境界線のところを暗示する）で吠えていて、猛獣は私の進む道に横暴している。高德の人がいないのに、海は相変わらず荒れている。

または第10首の中では、大谷光瑞は「修蛇」と「封豨」の比喩を借りて東海と西側の侵略者、つまりアジアを植民地化する西欧列強を表象し、以下のように書いている。

我志四方在 何為白髮悲 修蛇¹¹⁰斬東海 封豨¹¹¹擊西陲

崑崙¹¹²風塵下 蹉蛇¹¹³歲月移 請看屠釣叟 九十¹¹⁴帝王師¹¹⁵

解釈：遠大な志を抱いている私は、老けることを悲しむべきではない。残虐な敵は東海に斬殺し、或いは西の辺境で打撃を与えた。風塵を経ている不安定な暮らしで、頃合いを逃した歳月が流すことになる。ささやかな仕事をしている老人を見るといい。例え九十歳でも帝王につかえる賢臣である。

高雄「逍遙園」では、1940（昭和15）年11月1日から3日間にわたる開園式が行われた。大谷光瑞はこの年の11月27日に台湾を後にしたが、12月8日再び高雄に戻り、当地で冬を過ごした。「逍遙園」開園式から最後の1942（昭和17）年3月6日¹¹⁶まで、彼は5回ほどここに住んだ。彼の台湾滞在は秋、冬と春に集中する傾向が見られ、とくに冬は時間的に長く、2、3ヶ月間も滞在したことがある。高雄の冬は暖かくて過ごしやすく、越冬用の別邸としては最適だといえる。大谷光瑞が描いた「逍遙園」の景色もこの時期のものが多い。『大乘』昭和16年1月号に掲載された彼の最初の五言律詩は、1940（昭和15）年12月頃に創作されたと推測でき、それは彼が「逍遙園」に滞在した最初の一ヶ月でもある。

1941（昭和16）年5月14日、大谷光瑞は東京で過労のため「地方性発疹熱」にかかり、高熱により危篤な状態に追い込まれた。その前、大谷光瑞は「逍遙園」で初めての冬を過ごした後、上海¹¹⁷に行って日本に戻ったが、日本で休まずに働いていたためついに築地本願寺で倒れた¹¹⁸。『逍遙園雑詠』最後の部分（第26－30首）は昭和16年6月1日に『大乘』に掲載された。その時はまさに大谷光瑞の療養時期であった。第28首の「立春後数日作」から見れば、創作時間は1940（昭和15）年12月8日－1941（昭和16）年3月2日の2ヶ月間の間であることは間違いないだろう。それは大谷光瑞が初めて冬の時期を高雄で過ごした時でもある。彼は「逍遙園」で静養し、そこで64歳の誕生日を迎え、春をも迎えた。『逍

『逍遙園雜詠』は彼の耳順¹¹⁹の心境を明かす作品だともいえる。

月刊『大乘』の性質を考慮すれば、この30首の律詩は信徒と読者を意識に入れて書かれたものと思われる。したがって、外界に向けた自己分析と宣伝とも捉えられる。筆者はこの詩の主題を二つに分けて考えている。一つは読者を対象に、新居「逍遙園」の風土や鳥獣、景色を紹介することであり、もう一つは人物や比喩を通じて感情を吐露することである。南部の田園生活の趣を楽しみながら、国家前途への不安と自分の抱負をも語る『逍遙園雜詠』は、大谷光瑞の田園生活に回帰する志向と政治に参加し志を実現したい気持ちに揺らいだ心境を描出したほか、身体の老衰や病気にも触れている。詩文内の題材も彼のそのような心理に応じて揺れている。

(二) 人物に関する直喩と典故の応用

大谷光瑞は多くの中国古代の人物を題材に詩を作っている。彼は詩の中において、諸葛孔明のように田舎に隠棲し、五柳先生（陶淵明）のように木を植えることへの憧れを書いている。そして、詩の中に維摩詰菩薩（維摩居士）など仏教における名高い僧も登場する。また、彼は過去にいた姜太公（斉を興した呂尚のこと）、任公子（有仍子のことで、中国夏・殷時代の氏族を指す）の歴史書に見えるような人物が自分を補佐してくれることに期待を寄せている。地名的には、彼は古典における武陵や桃源郷を引き出して「逍遙園」を表象しようとしている。

古典を自由自在に引用することは大谷光瑞の博学を裏打ちしているほかならない。彼は古典における官職を意味する言葉「簪組」¹²⁰を詩に使い、当時彼が担当する内閣参議の事情を仄めかしている。そして、「優曇」¹²¹という千年に一回しか開花しない植物の特徴を利用し、訪問者があまりにも少ない様子を形容している。

以下第3首を例として引用する。

田園多樂事 耕讀學南陽 日落澆花塢 月明打稻場

土肥瓜滿架 人靜鳥升床 客去掩關臥 茶烟午夢長

解釈：田園生活は趣があると思う。臥龍先生（諸葛孔明）のように、田畑のそばで読書創作しながら野良仕事をしたい。日が落ちるときに花草に水をやり、夜になると月光は稲穂の置いた場所を一面に明るく照らし出している。土地さえ肥えていれば、野菜と果物がいっぱい生えてくる。夜、人の騒ぎが静まるごろ、鳥は鳴き声を出しはじめる。世間話をしたお客が帰れば、ドアを閉めてベッドにつき、香ばしいお茶とタバコを味わい、昼寝の夢のまた続きに行く。

第4首は「逍遙園」の美しい風景を冒頭に置き、動物の声を飾りとして使っている。

頸聯は夕方の景色と動物を使い、不穏な情勢を暗に示している。尾聯は維摩詰菩薩の表象を借りて、心身疲弊と老衰していく現実を表している。第4首の原文は以下の通りである。

日夕青山望 悠然清興多 蛙聲便鼓吹 鳥語是笙歌

殘月疎¹²²林沒 斜陽黃犢過 身心共壯健 無病老維摩¹²³

解釈：夕日が西に沈み、農園からまだ彼方の青い山が見える時、私は高雅な興味に悠然と引かれる。周りの蛙の鳴き声が太鼓のように伝わり、鳥の鳴き声と心地よい合奏をなしている。残月は疎らの林から見え隠したりして、子牛は斜陽を浴びながら通り過ぎていく。心身ともに健康で、年取っても病苦がなく、俗世の高僧になるように願っている。

第6首では、大谷光瑞は陶淵明の桃源郷を借りて「逍遙園」の様子を形容して

いる。

我廬風景好 爽氣在東山 岫¹²⁴裡浮雲出 海門巨舶¹²⁵還¹²⁶

守分¹²⁷喜身健 絶欲即心閑 何必武陵¹²⁸去 桃源¹²⁹在此間

解釈：新居の風景は素晴らしい。ここから東方の山々を見ると、思わず心底から豪気が生じてくる。山から出るのは浮雲、海港に停めているのは大きな船だ。自律する私は自分の健康を喜び、欲望を捨てれば心も落ち着いて悠々自適になれる。わざわざ故郷の武陵に行く必要はない。ここはすでに桃源郷なのだ。

第8首の中では、大谷光瑞は諸葛孔明のことを取り出して自分を励ますのである。

南陽諸葛亮 龍臥在田廬¹³⁰ 心抱三分計¹³¹ 胸藏万卷書

下帷¹³²烟雨後 耕野曉晴餘 我亦將同軌¹³³ 不材耻散樗¹³⁴

解釈：南陽臥龍崗の諸葛孔明は龍が引きこもるように、田舎の素朴な家屋に隠棲している。心に天下の謀略を抱き、胸に無数の経典が蔵する。晴耕雨読を学び、無用なる人を恥とする。

第12首において、官僚になることへの切なさや嫌悪から生じる隠遁の気持ちが描かれている。

揮手辭京闕¹³⁵ ト居築海南 江湖¹³⁶身所託 簪組¹³⁷我何堪¹³⁸

近市魚鹽滿 耕田蔬菜甘 多嫌塵俗¹³⁹集 嘉客少優曇¹⁴⁰

*優曇はインドの想像上の植物であり、3000年に一度花を咲かすが、そのときに転輪聖王が出現するという。

解釈：京城を離れて国境のもっとも南側に引っ越して、身を江湖に託した。私のような人はどのように役人としての重任を担いきるのか。今住んでいるところ

は、魚が豊富にあり、野菜も美味しい。ここでは、いやらしい世俗のことがなく、邪魔にくる客もなく、そういう生活はウドンゲのように珍しいではないか。

第13首は冒頭に五柳先生が5本の柳を植えることを詠んでいる。それは大谷光瑞が「逍遙園」で椰子の木を植えたことを意味し、同じ場面は彼の詩において2回ほど出ている。

第2首の中では、彼は「椰葉戦」という葉を通じて「逍遙園」の椰子樹の葉っぱの音を形容している。第2首の原文を以下に引用する。

栽椰¹⁴¹擬五柳¹⁴² 歸臥學陶潛¹⁴³ 朝霧鷺窺沼¹⁴⁴ 午風燕入簾

壯心功未就 華髮恨新添 唯喜園蔬熟 調羹又下鹽

解釈：五柳先生に学んで5本の椰子樹を植え、陶淵明に学んで田園に隠棲した。朝霧が瀰漫と共に鷺が池の魚蝦を覗く。午後には窓からの風に従い自由に飛んでいる燕を見る。大志はまだ実現していないため、悔恨するのは多く増える白髪しかない。田園でとった野菜と果物は唯一の慰めとなり、自炊して思う存分に食べる。

(三)「逍遙園」の環境

「逍遙園」の建設地はいい加減に決められたわけではない。その場所は新しく建てられる予定の高雄駅に近い台湾製糖株式会社の敷地——大港埔庄30番地——にあり、未来の工業都市を標榜する都市計画区域に属していた。

大谷光瑞の熱帯農園事業を助けるべく、高雄知事の内海忠司は「逍遙園」の敷地買収¹⁴⁵に協力しただけでなく、政府側も大谷光瑞の事業は高雄の発展に有利すると捉え、支持の意を示した。大谷光瑞が高雄駅の敷地をめぐる買収問題を画策し、地方の反感を招いたという噂があるが、内海はそれが事実ではないと明かし、

大谷光瑞は市場価格よりも極めて低い金額で「逍遙園」の敷地を購入したのではないと弁明している。¹⁴⁶

「逍遙園」は都市発展計画書が発表された際に、比較的安い価格で購入し得たところに、大谷光瑞が現地調査を行なったことを裏付けている。彼は調査を通じてこの土地の地理的環境を知り、その地の潜在的力をも把握したのであろう。詩文における描写や別邸の建築設計から見れば、大谷光瑞は新居に新鮮感を示したが、高雄の生活についてとくに驚きとかの感情がないようである。それは「逍遙園」という存在やその美は彼の計画通りに完成したことを意味するだろう。例えば第1首ではこのように表象している。

新居東郭¹⁴⁷外 水竹¹⁴⁸避塵囂¹⁴⁹ 窓對北山雪 門開南海濤

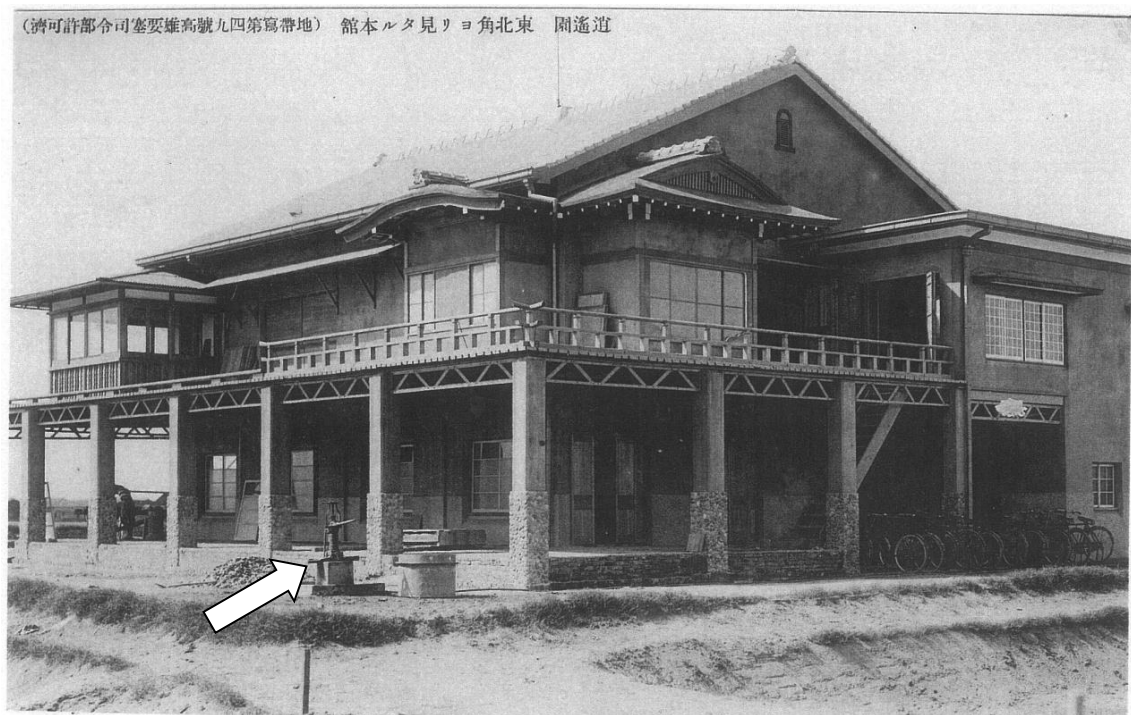
耕田常飽食 汲井未為勞 倦來時乘興 逍遙鵬¹⁵⁰翼高

この詩から、「逍遙園」は当時最もにぎやかな濱線、鹽埕の東側にあり、しかも新開発の前金地区の東にあることがわかる。郊外しか存在しない土地豊かな平原と静かな田園風景をもって、東郊外と呼ばれた。「逍遙園」は西に向け、2階の東北方向に茶の間と書斎があり、ベランダに出ると、視野に何の障害物もなく、起伏に富んでいる台湾の山並みと山頂に積もっている白い雪が見えてくる。

西南には高雄港—大谷光瑞から見れば高雄港は香港の機能を取って代わることのできる港である——がある。高雄港は南洋に一番近い港であり、地理的に恵まれていて、寿山¹⁵¹の独特な自然風景を取り込み、便利な交通と広い後背地をも有している。大谷光瑞は「水」と「竹」の表象を借りて、「逍遙園」が都心部から離れ、喧噪の影響を受けていない静けさと風景の秀麗を表現している。

「逍遙園」の食物と飲用水は全部農園からとっている。彼らは肉を滅多に食べ

ず、精進料理を食べていて、ゴミの減少にも工夫をしている。新鮮なものを家畜にやり、人の食べられない部分もえさとして使った。¹⁵²「逍遙園」には、大谷光瑞や彼の面倒を見る女性秘書など30人¹⁵³ほど居たが、30羽の鶏と2、3頭の豚も飼育されていた。それにしても、食物の欠乏がなかった。生活用水は井戸からとっている。「逍遙園」開園式に賓客に送った絵葉書を見れば、東北方向に手押しポンプ式の井戸¹⁵⁴があることがわかる。当時、この地区には水道水がなく、地下水や水路を利用することが多いので、井戸から水を取ることは大谷光瑞たちは苦とならないだろう。



図(24) 「逍遙園」の手押しポンプ
(加藤斗規氏提供)

この写真によると、少なくとも18人の「大谷学生」¹⁵⁵が農園の開墾に参加し、33人¹⁵⁶ほどの職人が建築工事に携わった。「逍遙園」の落成前、1万2千坪の土地に51人ほどの人がここで働いていた(図25参照)。門下生は大谷光瑞の指示により農業実習地といわれる農園を開墾し、食糧の欠乏しないことを目標に労働し

た。暑い高雄で働くことはよほど辛かった。それについて、「大谷学生」の一人であった大島芳夫はこのように述べている。

「昭和 16 年 4 月 6 日、逍遙園に到着。日本国内で桜は予想通りに満開であったが、我々は春の服装で台湾に来たが、あまりの暑さに悩まされた。田畑には肌を出して労働する黒い少年がいた。台湾人だと思ったが、聞いてみたら、某某先生だった」¹⁵⁷。



図 (25) 「逍遙園」東側で撮った職人と「大谷学生」の写真
(二角龍蔵氏提供)

「大谷学生」は「逍遙園」の建設のため、南国の暑い季節を過ごし、肌も黒くなってしまった。第 2 首において、大谷光瑞は初めて「逍遙園」で過ごした冬をこのように描いている。

南方花木好 三冬¹⁵⁸似素秋¹⁵⁹ 輕風椰葉戰¹⁶⁰ 晴日竹林幽

行役¹⁶¹身猶健 壯心¹⁶²老未休 喚來渭濱¹⁶³叟¹⁶⁴ 為我解深憂

この詩では、大谷光瑞は南国の自然風景を賛美している。南国の草花はよく茂っていて、「逍遙園」の冬は秋のように気持ちよくて過ごしやすい。そよ風が吹くと、椰子樹の葉がサラサラと音を立てる。晴れた日にも、静まり返った竹の林は日陰を作ってくれる。仕事のためにあちらこちらを奔走したが、この老骨はまだまだたくましい。年老いても大志を抱き続ける。渭の河で釣りをしている老人(姜

太公) をここに呼んで、自分の深い憂いを解いてくれてほしい。

大谷光瑞の二度の長期滞在も冬だった。彼は春まで滞在し、夏になると上海や大連などの別邸に移動する。高雄での生活は「逍遙園」の名前通り、逍遙自在の田園生活であるが、それはいっそう彼の内面の苦悶を浮き彫りにさせる。

「逍遙園」開園式前の9月、日本軍は仏領インドシナ半島に侵入、その後枢軸国の三国盟約がベルリンで結ばれた。日本はナチスドイツの欧州侵略を利用し、アジア各国の植民地を自分のものにした。日米の矛盾はますます激化する中、アメリカは日本に対する経済制裁を行い、石油を含む全ての商品輸出を停止し、日本の在米資産をも凍結した。「逍遙園」開園式一ヶ月前の10月3日、大谷光瑞は第2次近衛内閣の「参議」になり、1941(昭和16)年10月23日に辞任するまで仕事をしていた。近衛文麿¹⁶⁵は38、39代内閣総理大臣の任期中、アメリカとの交渉に力を尽くし、米国の参戦を阻止しようとした。だが、政府内の対立が生じ、対米交渉が挫折し、次の第40代内閣には陸軍大臣の東條英機が就任する結果となった。

「逍遙園」の美しい風景を楽しむことで、大谷光瑞はしばらく世俗から離れたが、彼が期待する姜太公のような人物はついに現れなかった。アメリカが日本に宣戦した時、大谷光瑞は東京にいた。その後彼は「逍遙園」に戻り、そこで新しい年を迎えた。加藤斗規氏はその当時の様子を文章に記している。「薄暗い夕日の中、2階のベランダの椅子に座っている大谷光瑞はただ黙りこくって新高山を眺めている。その後ろ姿の寂しさは、こちらの心まで沁みってくる」¹⁶⁶。日本の劣勢を見極めたのか、その後大谷光瑞は二度と「逍遙園」に戻ることはなかった。十数人の門人も大谷光瑞のあとを追って次々に帰国した。¹⁶⁷

第5首は大谷光瑞が朝5時に起きることにふれ、「逍遙園」の日の出の風景を描写している。五更（寅の時）は朝3時から5時の時間を指す。『随筆百則』第36則の内容はこの詩に呼応しているように見える。その第36則の詩にはこのような内容が書かれている。大谷光瑞は高雄にいる時、毎朝5時に起きる。部屋を出て、寿山の頂上にかかっている西側の残月と霧がたちこめている東の大武山の最高峰が見える。彼は一杯のコーヒーを手に持ち、日の出を待っている。空がだんだん明るくなり、光が雲を通り抜けて照らしてくるとき、星はまだぼんやりと見える。その時、菜園で行き来する人が多くなる。ここの美しい風景は、早起きでない人には、わからないだろう。¹⁶⁸

五更拂衾¹⁶⁹起 閑歩後園中 残月潮頭白 片雲山角紅

林塘烟出屋 籬落¹⁷⁰露霑¹⁷¹菘 漸見人来往 雞聲散曉風

解釈：朝5時に起きて、園内を散歩する。残月は白波のようで、朝日の光は山にかかる雲を染める。農園内の林と池の周りに霧がたちこめている。まがきに積もった露のしずくは白菜に落ちる。路上には往来する行人は漸く多くなり、雄鶏の鳴き声も風のままに伝えられた。

（四）「逍遙園」の建築と生活用水

第11首から第15首の詩は『大乘』昭和16年3月号に掲載され、そこに大谷光瑞は初めて「逍遙園」の建築形態や施設、例えば楼閣、高欄（勾欄）などを描いた。第11首のなかで、彼は池の近くにある楼閣に触れ、自分がその書齋で筆をふるうことを通じて抱負を語っている。また、疲れた時に「逍遙園」の高欄にもたれかかり、月を見る場面もある。原文は以下の通りである。

倦遊三十歳 白首嘆無能 氣力未為老 壯心猶有憑

燕鴻伴行旅 鷗鷺亦良朋 水閣時長嘯 倚欄待月昇

解釈：30年ほど放浪していて、髪もほとんど白くなった。自分の無能を嘆くしかないが、動けないほど老いていないので、志を実現する気持ちがなお強い。燕と白鳥は旅の道連れとなり、鷗や白鷺とも良い友人になった。いつも池近くの楼閣で自分の抱負を語り、そこの欄干に寄りかかり、月が昇るのを待っている。

「逍遙園」の写真を見ると、園の東と北に池があることがわかる。水路で湧き水を引き、農園の灌漑に使うことが詩の中で語られている。第14首はその農園と水のことを取り上げている。原文は以下の通りである。

世味年來薄¹⁷² 何憂多苦鹹¹⁷³ 開渠泉水導 耕隴¹⁷⁴莠¹⁷⁵苗芟¹⁷⁶

翠樾¹⁷⁷涼生戸¹⁷⁸ 晴郊風滿衫¹⁷⁹ 西山殘照赤 半被暮雲銜

解釈：近頃、役人になることに関する興味が薄くなった。世俗のことで心を煩わせるわけではない。園内で水路を作り、湧き水を引き、かまを持って雑草を抜き取り、荒れ地を田畑にする。田畑は木々に囲まれ、家屋は自然と涼しくなる。晴れた日に、広々としたところに立つと、風が袖の中まで吹き込んで、さっぱりして爽やかな気分になる。西の壽山は夕日に染められ、真っ赤になったが、夕日は半分夕暮れの雲に隠された。

第15首では、高雄では3ヶ月ほど雨がなく、ようやく雨が降り出して、池の水位は2丈ほど高くなったことが記されている。原詩は以下の通りである。

九旬¹⁸⁰嘆久旱 好雨價千金 園圃初生色 田家有喜心

耕培一犁濕 池畔半篙深 農事春來起 早秧既挺針

解釈：雨の降らない日がもう90日も続いた。その時に降った恵みの雨は千金に値するだろう。菜園の野菜が少しでも生えてくれば、農家にとってこれほど嬉しい

ことないだろう。雨が降る時に乗じて、田畑を耕す。鍬が雨に濡れられ、池の水もだいぶ上がった。春の季節をうまく利用して田畑をよく耕せば、稲の苗は針のようにまっすぐと水面を越えて伸びてくる。

既に「逍遙園」で2ヶ月ほど滞在した1940（昭和15）年2月4日以後、大谷光瑞は第28首の詩を執筆した。この詩で彼は別邸が池に囲まれている様子にふれ、ミカンの木についても言及した。

我性嫌沉寂¹⁸¹ 市朝¹⁸²為隠棲¹⁸³ 穿池屋南北 種橘井東西

人少雀銜穀 晝閑燕落泥¹⁸⁴ 海南春已半 新麥與腰齊

立春後数日作

解釈：内気な私は、人の集まる町中で暮らしている。家屋の南北に池があり、東西にミカンの木が並んでいる。世話人が少ないので、雀が常に米粒を盗み食う。昼間の暇な時は寂寥感を免れない。海の南の方では、春はもう半分過ぎてしまっただろう。そして、北側の麦はもはや人の腰くらいまで伸びただろう。



図(26) 「逍遙園」完成前の写真、左側に新しく掘られた池が二つある
(二角龍蔵氏提供)

(五) 「逍遙園」と莊子「逍遙遊」の関連性について

『逍遙園雜詠』第7首で、大谷光瑞は莊子の「逍遙遊」を引用し、町中で暮らす自分は世俗と共存し、高潔を自任すべきではないと述べている。夢の中で彼は大鳥に変身し、南洋に向かって飛んでいる。その時は、彼が高雄で携わった熱帯産業は国家南進事業の基礎の一つであることを提示している。原文は以下の通りである。

大隱¹⁸⁵棲於市 閑居半掩扃¹⁸⁶ 長風度滄海 明月入疎櫺¹⁸⁷

只合混流俗 何為誇獨醒 書堂昨夜夢 鵬運¹⁸⁸搏南溟

解釈：真の隠者は、人里離れた山中などに隠れ住まず、かえって俗人にまじって町中で超然と暮らしている。私の住む場所は繁華街に近いが、ドアを半分開けてのんびりと暮らすことができる。風は海を渡って吹いてきて、月光は窓を通して射し込む。もともと世間に溶け込むべきである。自分だけが目覚めていると自認

してはいけない。昨夜一つの夢を見た。夢の中で鵬という大鳥になり、羽を広げて南海に飛んでいった。

第9首は台湾物産の豊かさや地理的条件の優勢を述べ、それらは決して西欧列強に奪われるわけにはいかない。大谷光瑞は自分が賢明な人に追随し、一緒に努力する決意を告白している。詩の中の「任公子」は『莊子』外物篇に由来する。

「任公子」は大きな網と針を使って、大魚を釣り上げて多くの人と分け合った人物である。原文は以下に引用する。

蓬萊¹⁸⁹南海在 仙嶼出滄瀛¹⁹⁰ 水濶三千里 舟行幾十程

豊牲飼蛟鱷 芳餌畀鯢鯨¹⁹¹ 願伴任公子¹⁹² 一鉤充鼎烹

解釈：南の海に台湾という蓬萊の仙境がある。台湾は大海に昂然と独立し、三千里の海岸線を持っていて、無数の船を収容できる。家畜を餌としてミズチやワニといった凶悪な動物にやるのは面白くない。それより任公子のように、大きな釣り針を持って大魚をとり、人々と分けて食べるのがいい。

『逍遙園雜詠』のなかで、大谷光瑞は2回ほど「逍遙」という言葉を使っている。第1首の「逍遙鵬翼高」と第19首の「浩蕩說逍遙」である。前者は自分の心境を明かすのに対し、後者は「逍遙遊」の作者莊子のことを指している。第19首の冒頭に出てくる「漆園傲吏」は、東晋の郭璞¹⁹³の「遊仙詩」に材をとっている。「遊仙詩」の「漆園有傲吏, 萊氏有逸妻」という一文は莊子のことを物語っている。

『史記』第63巻「老莊申韓列伝」で莊子のことが述べられている。莊子は偏屈で高慢な人で、役人になることを恥とする。楚の国の威王は莊子の才能を知り、人を派遣して彼に大金をやり、宰相に任命しようとした。だが、莊子は笑いなが

らそれを拒否した。「千金は大したものだ。宰相もよほどの高位高官だ。だが、おそらくあなたは祭りに使われる牛を見たことがないだろう。牛は何年間も飼育された後、模様をついた服装をまとい、そして廟に連れられ、生贄として殺された。私なら、一步退いて豚でありたいが、それができるか。早く帰ってください。これ以上私を侮辱しないでください。一国の君主に束縛されるものなら、泥水に浸かった方が楽しい。一生役人にならないことこそ私の願いであり、喜びでもある」。

莊子は「逍遙遊」で逍遙の意味を詳しく説明している。逍遙の目的は無限を追求することだが、そこに逍遙の心境も必要である。逍遙の心は一種の内在的修養である。普段の忙しい生活において、本当の自我が目覚めていない。人それぞれの逍遙の心を逍遙の境においていれば、本当の逍遙が成就できる。このように、「逍遙園」は大谷光瑞の逍遙の境と位置付けていいだろう。列強に取り囲まれる乱世において、どのように突破するかを考える大谷光瑞は、「逍遙園」で休養をとり、自我を激励した。第19首の詩は次の通りである。

漆園傲吏在 浩蕩¹⁹⁴説逍遙¹⁹⁵ 邈北汗漫¹⁹⁶遠 圖南¹⁹⁷寥廓¹⁹⁸遼

鼓颺¹⁹⁹簸²⁰⁰溟漲²⁰¹ 奮翼搏雲霄 小物不能測 籓籬²⁰²鷗²⁰³雀嘲

解釈：莊子は漆園で小さな官吏として働いていた頃、高慢のため威王の任命を拒んだ。高官になりたくなく、逍遙自適の生活を追求していると彼は大声で宣った。遠い北の土地は広くて、一望果てしない。大志のある人は度量が大きい。機会を伺い波を動かし、羽ばたきして雲に飛んでいく鳥がいる。弱い人も決して軽蔑すべきではない。彼はマガキに閉じ込められた大鳥のように、スズメに嘲笑されたが、いずれ高い空に飛んでいこう。

『逍遙園雑詠』の最後の一首で、大谷光瑞は「逍遙遊」の「不龜菓」、「魏瓠」

などの表象を借りて、自分の心境を明かしている。神戸の「二楽荘」時代から、大谷光瑞は多くの門下生を育ててきた。彼は海外を旅するときには、各国の発展事業にも携わっていた。彼は人を見る目があるが、自分の能力も誰かに認められ、国家に貢献したいという期待をもっている。「逍遙園」滞在時期、彼は過去の経験を活かし政治的領域で自分の能力を發揮した。例えば、1939（昭和14）年4月彼は「興亜学院」の名誉院長になり、1940（昭和15）年10月彼は第2次近衛内閣の「参議」となり、1942（昭和17）年2月には「大東亜建設審議会委員」となった。そして1944（昭和19）年12月には小磯国昭内閣の「顧問」になるなど様々なところで国政に参加した²⁰⁴。彼は賢才を待望し、国家の発展をも憂慮した。だが、彼は自分の才能を發揮する場を見つけず、深く失望し、その感情は彼の詩の中でも窺える。第13首はその例である。

至人²⁰⁵物無滞²⁰⁶ 藏德貌如愚 三顧²⁰⁷舉農稼 一朝興釣徒²⁰⁸

石珉²⁰⁹欺拱壁²¹⁰ 魚目晒²¹¹明珠 晉用不龜藥²¹² 何憂學魏瓠²¹³

解釈：人としての最も高い境地に達するとき、いかなるものも彼を阻むことができない。見かけは愚かな人でも、高い品格を内に持っているかもしれない。君主は田舎にいる農夫の才能を重んじ、三度も訪れて、彼を抜擢しようとする。普通の石と美しい玉の差は、魚眼と宝石の違いのように、見る目にははっきりわかる。不龜藥をうまく使えば、魏瓠を無用のものとしないうらう。

4-2 「逍遙園」の風景と動植物

(一) 「逍遙園」の地理景観

「逍遙園」のあった大港埔庄は、当時最も繁華街であった鹽埕および新開発の前金地区以東の甘藷田のなかにあった。「大谷学生」の大島芳夫氏は次のように述べている。「高雄駅迄歩いて 10 分、方角の違つた市役所迄 15 分と云うと市内のど真中を思わせるが、郊外と云つてよい程静かなところだ」²¹⁴という。

「逍遙園」別邸は西向きで、2 階の北東角には一間の茶室があり、軍配型の火灯窓を通して、台湾中央山脈を一覧することができる。別邸の南西方面は高雄港——大谷光瑞の考えでは香港の地位に取って代われる新港——に面していた。ここは台湾の最も南洋に近い商業港であり、絶好の地理的位置を占めているほか、寿山の独特な景観と交通の便、広大な内地を持っていた。

「大谷学生」の大島氏は 1941（昭和 16）年 4 月に高雄に到着した。彼は、「逍遙園」附近にある建物は右側にある「陸軍病院」のみ（筆者注：病院は「逍遙園」の北にあった）、人家などは 2 丁もはなれたところにある丈だつた。「陸軍病院」も池と山（人工であるが）と道路一つ起えた所（筆者注：「逍遙園」の東北角から現在の六合一路方面に繋がる方向を指す）にあるのでいたつて静かだ」と述べている。人工の山と池の存在は、2008（平成 20）年に筆者が調査した際、戦後初期の「行仁新村」の住民から証言を得た。大島氏は春秋夏季には池で泳いだという。

筆者は上海「無憂園」²¹⁵、本願寺「錦華寮」²¹⁶の古い写真から、大谷光瑞が明らかに池を好むことを突き止めた。条件が許せば、別邸の周囲にはできるだけ広い池を配置し、大谷光瑞が子供の頃から育った「飛雲閣」もそうであった。本館

に入るためには、渡し船まで必要である。このことから、「逍遙園」の池は単なる農園のためだけに必要なものではなかった。秘書田中勝治氏は当時、別邸を囲む池を作るために、すべての生徒を動員し土を掘削してから積み上げ、小山を築き、その小山は、大谷光瑞が別邸二階の東側から見た庭園の中にあつたと述べている。²¹⁷大島氏は池が別邸の三面を廻り、池の片隅が学生寄宿所で、冬以外の春と秋の夏に、生徒たちはときどき池のほとりで戯れ、先輩たちは水に飛び込んで泳いでいたという。²¹⁸

戦後高雄「陸軍病院」は1949（昭和24）年7月に「聯勤第二総医院」に接收された。現在、国軍高雄医院院史室に所蔵されている「院外眷舎與公屋房産位置図」には、戦後初期における「逍遙園」の概要が記録されている。聯勤第二総医院が元所有者の土地銀行から30号公地（大港埔30番地）を借用して、その後、所有者の同意を得て、空軍供給部は法律に基づき配分使用の手続きを行い、土地を医院家族住宅区の行仁新村として使用する案が軍医署に提出され公文書記録として残された。そのため、元の建物4軒はともに「公産」（公的資産）と標示され医院の宿舎にされた。そこには敷地内の土堆と池も含まれていた。

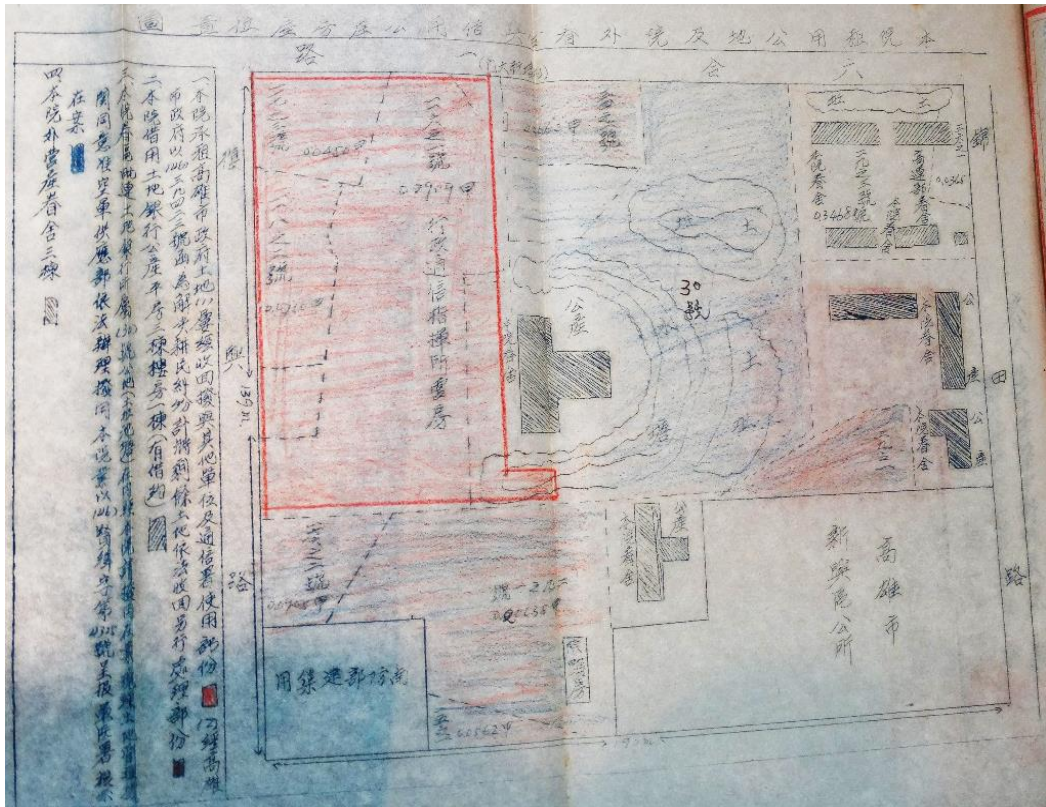


図 (27) 「院外眷舎」と「公屋房産」位置図
 (出典：国軍高雄医院院史室蔵、陳秀珍先生等により撮影)

図の中には、別邸の東側と北東側各々に一つの「土堆」が描かれており、すなわち大島氏が造った人工の山である。農園の東北角には、もう一つの土堆があった。別邸前の庭園は国軍通信指揮營房に改築され、西南角は「南防部建築用」土地に指定され、東南角には「高雄市新興区公所」が設立された。昔からの「行仁新村」の住民たちは、ほぼ軍医院に勤務したことがあり、また医官・看護婦の子孫もいた。筆者はじめ多くの研究者が住民たちに対してインタビューした結果はこの図の記載に合致している²¹⁹。

作家の許台英氏は、本籍地は南京市であるが、1951 (昭和 26) 年に二総医院 (元高雄「陸軍病院」) で生まれた。1984 (昭和 59) 年 8 月 21 日の『自立晩報』に掲載された散文「走在六合路上 (六合路を歩く)」には、次のような記述がある。許氏が 3 歳の時、家は二総医院の向かいにある「行仁新村」(「逍遙園」) に引

越しした。彼女の描写によれば、農園の中には、山澗溪谷、稲田、樹林、果園、小河、鴨寮があった。学校が終わった後、子どもたちは裸足で河辺に行って、オタマジャクシや蟬などを捕まえた。また、ガジュマルやマンゴー、ゴレンシ、グアバの木があり、翡翠色の湖水と白色の鷺鳥が悠然と遊んでおり、池の中央には古色蒼然たる日本の木造楼閣（「逍遙園」別邸）があった。彼女が5歳の時、父親が病死する数日前に「逍遙園」池畔の水草の叢の中で吐血したという²²⁰。許氏は、上の文章を以て過去の歳月の素晴らしさを表現した。「逍遙園」の自然環境は彼女の子ども時代における最高の思い出であったという。

大島氏も「逍遙園」を次のように描いた。「林立した山々にはきれいな芝生が夕日に映え、底迄見える様な澄んだ池には青々した水草が浮び畠の木々には香りの高い果物が自々の色彩を競っていた。美しい公園のあまりない高雄では「逍遙園」こそが最も美しい所だつたに違いない」²²¹。

（二）動物と植物

「逍遙園」は大谷光瑞が熱帯植物を栽培する実験基地であり、南洋から携行してきた品種は「逍遙園」において実験栽培されていた。『随筆百則』において、「逍遙園」内の植物を紹介したところが多くある。

こう考えれば、熱帯農業というのは、単に台湾に来て田んぼを作るなどの単純なことではなく、農園生活に対し身心を投入することは最も基本的なことからあるということがわかる。1941（昭和16）年12月15日に東京で発行された『随筆百則』は、大谷光瑞が熱帯圏で30年間経営を行った経験にもとづく回想であるといえる。内容は、彼の熱帯農業に対する考え、育種、植物知識の利用、飲食の調和、熱帯造園の理念、そして、上記の知識を台湾高雄の別荘において実践した

経緯を述べている。秘書田中勝治の回憶（昭和15年1月）によれば、

「猯下のお供をしてたびたび園の内外を廻りましたが、雑草の中に棘のある草がありそれが猯下の足を刺すので非常に嫌われて、仕事の合間を利用して此の草の全滅を私に命令されました。」「熱帯特有の繁殖の早さ、それに4町歩の廣さ、私も根気良く鋤で除草しましたが一雨降れば元通りと云う有様で困りました。其の頃の猯下は寿山館にお泊りでしたが時々来園されて其の棘の雑草が減っていないと云って叱られました。猯下も無理な注文と分り乍ら命令した以上は取り消すわけにもゆかず笑い乍ら耳などを引張られました。後には猯下自身も杖の先に刃物を付けて見付けられたら突き刺す様にして居られました。」と述べている。²²²

1941（昭和16）年9月14日、大谷光瑞は『随筆百則』の原稿を完成させた。当時彼は2ヵ月半の休養を経て重病が治癒したばかりで、神戸市北野町2丁目101番地にある療養所に居住した²²³。『随筆百則』は病中において彼の心情を発散するための随筆だけではなく、「逍遙園」に関する最も重要な観察記録であると見てよいであろう。とくに別邸の建築、農地の開墾事情、気候と当地の植物などを検討するには高い価値を有している。当時の「逍遙園」の農園を調査するには、植物生態系は無視することはできない。

「逍遙園」の植物は2種類に分けられる。第1は食用植物であり、第2は機能性植物である。「大谷学生」は農園開墾と農作物の世話役を担当し、農園内で自給自足の食糧提供を目標としていた。大谷秘書、「大谷学生」、および大谷光瑞の滞在期間中の食膳だけでなく、大工の二角幸治郎氏に提供するものも含まれていた。「逍遙園」の厨房の残り物を無駄にせずにして、新鮮なうちに甘藷やつるなどを併せて家畜の飼料に使われた。家畜は飽食が可能となるので、必然的に肉

質と味が上等となる²²⁴。

機能性植物は、防風・景観・水土保持・緑肥などの目的に応じてそれぞれ適合する場所に植えられた。例えば、狗牙根（キョウギシバ、*Cynodactylon*）という草は「逍遙園」の庭園を覆ったのである。『随筆百則』のなかで、3ヶ月程度で蔓延し緑萋々の感あり、とくに乾燥に対して強く、高雄のような乾燥地に最も適すると述べられている。²²⁵

百慕達草（バミューダグラス）は狗牙根（キョウギシバ）という別名を持ち、一般的にはゴルフ場などの場所に使用される。太陽の光を好み、湿地と樹蔭を好まず、踏み付けに強い。家畜の飼料に供することもできる。大谷光瑞はこの草を利用して、高雄の雨期の降水量急増に対抗し土壌の流下を防止した。「逍遙園」附近の空地は至る所にこの草が野生しており、その繁殖力の強大さは人を驚かせるという²²⁶。そのほか、農園に必要な緑肥植物として、銀合歡（ギンネム、*Leucaena glauca*）や虎爪豆（ハッショウ豆、*Mucuna utilis*）などが使われた。また、虎尾蘭は「逍遙園」別邸の車寄せ前の庭園に植えていたという（図 28 参照）。

表 (7) 「逍遙園」別荘動植物一覧

用途	分類	名称
食用	農作物	甘藷、稲、玉蜀黍
	果樹	パパイヤ、マンゴー、アボカド、サボジラ、バナナ、芭蕉、荔枝、柑橘
	油料植物	胡麻、落花生
	経済作物	ゴムノキ、コーヒーノキ
機能	香料植物	茅根香 (Vetiveriazizanoides)
	景観植物	虎尾蘭、菩提樹
	水土保持植物	狗牙根 (Cynodondactylon) 、穂花木藍 (Indigofera endecaphylla)
	防風植物	印度刺田菁 (Sesbania aculeata) 、牛角瓜 (Calotropis gigantea)
	緑肥植物	銀合歓 (Leucaena glauca) 、虎爪豆 (Mucuna utilis)
食用	家畜	鶏 30 羽、豚 2-3 頭
その他	雑草	香附子 (Cyperus rotundus)

(参考資料：昭和15年『随筆百則』・『大乘』昭和15年4月号)



食糧倉 柑橘 大谷家紋 虎尾蘭 石轆 柑橘 ポール 尺棒(しゃくぼう) 貯水タンク

図 (28) 「逍遙園」完成前の写真、虎尾蘭は「逍遙園」別邸の車寄せ前の庭園に植えていたという (二角龍蔵氏提供、筆者注記、黄乙立氏着色)

4-3 「逍遙園」での飲食

農園が人々の命を維持する食物を提供することは、田舎の農村においても同様である。ただし「逍遙園」の生活体系は家庭式ではなかった。大谷光瑞が対外的に宣揚した熱帯農業の育成という強い意志の下で、この熱帯農園の真意は農業研究にあった。

「大谷学生」の縣義治氏によると、「逍遙園」での食事と住まいはすべて生徒自弁であった。「大谷学生」たちは「逍遙園」の南側に隣接した T 字型の学生寄宿所に住んでおり、三食は「大谷学生」の中の年長者が担当していた。毎週休みの日には、「大谷学生」を管理していた秘書が必需品を買いに出かけたこともあるが、たいていは園内で産み出された食べ物が主であった。「逍遙園」では、大谷光瑞が南洋から持ってきた多くの熱帯特有の果樹や野菜を多く栽培していた。

「大谷学生」の勤勉な耕作の下では、供給不足に陥ることはなかったし、大谷光瑞の食事は学生の食事と同じく農園から持ってきたが、異なるのは食事の場所で、大谷光瑞は自分の食堂で食べていた。²²⁷

4-4 大谷光瑞と「大谷学生」

縣義治氏の記憶では数人の「大谷学生」と大谷光瑞とが一緒に食事したことがあったようだ。光瑞は生徒に親切で優しく、あだ名を使って生徒を覚えていた。²²⁸

「瑞門会誌」の学生名簿には、学生それぞれのニックネームがあり、とても面白い。「逍遙園」で生活した学生のなかで岩佐博男氏のニックネームは「サボテン」、西田秘書は「栗」、その他には「大根」、「パパイヤ」、「モクロジ」、「ギンナン」、「ラツキヨー」などの植物の名前が付けられた。さらに面白いのは、なんと「バッタ」、「ナメクジ」、「がまがえる」、「カブト虫」、「モグラ」などの命名もあった。

表(8) 高雄に住んでいた「大谷学生」と秘書

姓名	当時	あだな	入門年	入門地
田中 正一	--	--	昭和8年	--
西田 正(忠)	--	栗	昭和8年4月	伏見桃山「三夜荘」
有岡 明彦	--	--	昭和9年	--
岩佐 博男	15歳	サボテン(仙人掌)	昭和12年4月	伏見桃山「三夜荘」
田中 勝治	18歳	--	昭和13年3月	伏見桃山「三夜荘」
飯田 保夫	13歳	--	昭和13年3月	伏見桃山「三夜荘」
市田 滋	--	--	昭和13年	--
秋松 敏美	--	--	昭和13年	--
市原 茂	15歳	--	昭和13年4月	伏見桃山「三夜荘」
太寿堂 鼎	--	大公(ヌダカ) 大チャン	昭和14年	伏見桃山「三夜荘」
最初の「大谷学生」は「逍遙園」へ向かった。				
縣 義治	12歳	--	昭和15年3月	高雄「逍遙園」
中坂 誠次	13歳	がまがえる(蛤蟆)	昭和15年3月	高雄「逍遙園」
村木 三郎	--	カブト虫(獨角仙)	昭和15年	高雄「逍遙園」
柴垣 博	--	パパイヤ(木瓜)	昭和15年4月	高雄「逍遙園」
出口 国一	--	銀杏(ギンナン)	昭和15年	高雄「逍遙園」
岡村 久雄	13歳	--	昭和15年4月	高雄「逍遙園」
野本 昭二	--	--	昭和15年	--
山本 昭二	13歳	--	昭和15年4月	高雄「逍遙園」
山根 昭二	--	--	昭和15年	--
宮川 助	--	--	昭和15年	--
宮田 世三郎	14歳	モクロジ(木欒子)	昭和15年4月	高雄「逍遙園」
第2期の「大谷学生」は「逍遙園」へ向かった。				
中谷 章	--	ラツキョー(落蓄)	昭和16年	高雄「逍遙園」
福田 照夫	--	えびす(財神爺)	昭和16年	高雄「逍遙園」
小河原 辰典	--	ナメクジ(蛞蝓)	昭和16年	高雄「逍遙園」
川村 脩	--	モグラ(鼯鼠)	昭和16年	高雄「逍遙園」
大島 芳夫	--	大根(蘿蔔)	昭和16年4月	高雄「逍遙園」
武田 隆司	13歳	バツタ(蛭蝨)	昭和16年3月	高雄「逍遙園」
西本啓	12歳	--	昭和16年4月	高雄「逍遙園」
吉岡 一泰	--	--	昭和16年	高雄「逍遙園」
鳥井 信明	--	--	昭和16年	高雄「逍遙園」
久富 幹男	--	--	昭和16年	高雄「逍遙園」
野崎大六郎	--	--	昭和16年	高雄「逍遙園」
松吉 宣	--	--	昭和16年	高雄「逍遙園」
山本 淳而	--	--	昭和16年	高雄「逍遙園」
土佐 孝	--	--	昭和16年	高雄「逍遙園」
金城 武人	--	--	昭和16年	高雄「逍遙園」
小川 実	--	--	昭和16年	高雄「逍遙園」
その他				
奥出 ○	--	--	--	--
吉田せつ	21	チュウ	昭和16年1月	築地本願寺

(『瑞門会会員・客員名簿』・『瑞門会誌』第2号・『大谷光瑞師著作総覧』・『大谷光瑞上人生誕百年記念文集』)

学業も農務も重んじることは、農園の人材需要を解決するためであった。大谷光瑞の南洋事業を研究している大谷記念館の加藤斗規研究員は、大谷光瑞は英才教育や仏教經典の翻訳事業よりも、農園経営を重視しているようだと言っている。²²⁹このような状況は、以前の南洋の投資事業にも当てはまり、「逍遙園」も例外ではなかった。農園を管理する仕事は十代の少年にとっては決して楽しい思い出とはいえない。恐らく大谷光瑞の英才教育の理念の中で、苦勞した開墾も南方教育の重要な一環であったかもしれない。これは「二楽荘」時代から確立された教育方法であった。別邸の性格が異なるため、生徒が実際に行った仕事も違っただろう。

岩佐氏は1940（昭和15）年に入門した「大谷学生」の一人であり、1940（昭和15）年12月に「逍遙園」に到着した。元々は北京に派遣され、そこで中国語を学んだ。2年後、東京に転勤し、マレー語を勉強するために台湾へ行く準備を行っていた。岩佐氏は心中不本意であり、南方へ行って農業に従事する苦勞が想像できる。気候がまったく異なり不慣れなところであったが、「大谷学生」としては選択できなかった。戦後になっても、同じ年齢の者が持つべく国家に認められる卒業証明書などを欠いていたため就職活動の壁に突き当たったが、多くの生徒は、農業の間に培われた勤勉な精神のおかげで、社会で相当な地位を占めた。そこで筆者は大谷光瑞について「大谷学生」の意見などを分析したところ、太寿堂鼎氏は大谷光瑞を「メダカから見た象」と表現した。大谷光瑞の門下生になることは栄光であり、平凡な中学生の生徒になることではない。学生寄宿舎で同世代の友達と勉強したり、日中には農作業をしたり、夜には明かりの下で講義ノートを見ながら独学で自習する習慣を身につけたりすることは少年時代の貴重な体験であっ

た。²³⁰

「大谷学生」は一般的に認められるような学歴証明書が何もないが、学業に不足があるに至っていなかった。彼らは日本でいえば中学生程度なので、教材については早稲田中学の講義録及び日本国内の中学教科書と参考書を用いて勉強した。近隣の高雄商業学校に通い、英語とマレー語を勉強した。「大谷学生」の中から賢かった田中氏、太寿堂氏、縣氏、中坂氏、岡村氏を選んで、週に2日鳳山の「園芸試験支所」に派遣した。²³¹そこで江口庸雄所長と優秀な技師の指導を受け、農学の基礎と一般科学の知識を学んだ。²³²鳳山「パイナップル缶詰工場」と屏東「砂糖工場」で実習後、「逍遙園」に戻って各種の作物栽培と豚の飼育技術の改善を行った。

1941（昭和16）年4月、十数名の新入生が「逍遙園」に到着した。米国属領地のフィリピンと高雄はバシー海峡を隔てているだけであり、国際情勢が次から次へ変化していくのが感じられた。1941（昭和16）年7月、「大谷学生」の田中勝治氏は大東亜戦争の勃発により志願兵として入隊し、「大谷学生」としての三年間の生活を終えた。²³³大島氏は4月に来た新入生の一人で、4月4日の日記に上陸初日の所見が記されていた。3日間郵便船に乗って、ついに基隆港で台湾の第一歩を踏んだ。当時の空は灰色で、霧雨に見舞われていた。²³⁴4月6日に「逍遙園」に到着したが、日本では桜が咲いていたが、台湾では夏のように暑く、着ていた春の服装がこの場所に適応できず、畑の真ん中に立っていた他の少年は全部上半身が肌脱ぎになっていて、肌色がとても黒かった。7月には大体軍隊のような規則正しい生活にほぼ慣れた。²³⁵

4-5 戦争期間中と戦後の「逍遙園」

(一) 「逍遙園」の放棄

1941（昭和16）年12月に日本はアメリカとついに開戦するに至った。大谷光瑞は自宅で1942（昭和17）年という新しい年を迎えられたにもかかわらず、まったく喜べなかった。彼は「大東亜建設審議会」委員に任命され、3月初めに東京に戻った後、二度と台湾に行くことはなかった。農園建設への投資も高雄で作った新しい住居の使用も、3年で終わらせなければならなかった。同年4月以降、大谷光瑞の学生たちも、農作物や土木工事を放棄し、続々と日本に帰国したのである。後片付けは秘書の廣瀬了乘氏と西田忠氏に任されていた。その後、戦火が台湾まで飛び散り、日本軍は「逍遙園」の北側に「逍遙園」より4倍も大きくなる高雄「陸軍病院」を作り上げ、患者や負傷者を収容した。また、西南側には軍の高射砲チームを駐在させ、米軍の爆撃機への反撃に備えていた。高雄市内にある「濱線」や「鹽埕」、「前金」などの区域および「桃子園」や「戲獅甲」など軍の重工業地帯のすべてが爆弾によって破壊されてしまったが、幸運なことに、「逍遙園」は郊外にあったため、まったく被害を受けることはなかった。戦争終了まで、ずっと放置されていたのである。²³⁶

1941（昭和16）年5月に大谷光瑞は、東京築地（本願寺）で発病し、一時神戸に戻って休養した。1942（昭和17）年1月には「逍遙園」に住んでいたが、体調はかなり悪くなっていた。²³⁷太平洋戦争の影響が大きくなり、「逍遙園」は「大谷学生」だけを残して農園の管理を続けたが、主である大谷光瑞が戻ってこなかった。

勸業銀行の資料によると、1943（昭和18）年9月、森田氏は「逍遙園」に5万円の戦争保険をかけて、その保険内容は戦争中の家具と家屋の損害であった。「大

谷学生」たちの撤収後、「逍遙園」が戦争のため、どうなるかはわからなかった。この保険を引き受けた会社は元々「大阪海上火災保険（株）」であったが、その後「横浜火災海上保険（株）」に変更された。²³⁸このことから、森田隆之と「逍遙園」の関係がかなり深いことがわかる。後続の調査を待たなければならない。

（二）戦後の日本人財産の接収作業

1946（昭和21）年3月、林慶同氏（「台南北門」出身、当時23歳）が高雄に来た後、知人の紹介を受け、高雄市役所に就職し、「接受日産処理委員会（日本人の財産の受け入れを処理する委員会）」の最初の受理担当者および通訳となった。彼は、高雄州知事高原逸人²³⁹と連絡を取り合い、日本人帰国者の名簿を受け取り、期日を決めて日本人の財産の受け入れ手続きを行なわなければならない、同時に、当委員会の秘書と州知事の2人の通訳も担当した。受け入れ作業は1946（昭和21）年の年末に終了した。作業の主要な内容は、日本人の財産の整理・登録であり、動産と不動産のいずれも詳細に書き留める必要があった。土地権利に関する証明や家具など、引き渡された全品を見積もってから、近隣の住民に一時保管をしてもらった。整理、回収が完全に終わった後、すべてのものが台湾国有財産署に移送された。²⁴⁰

当時林慶同氏は、「逍遙園」の財産整理・登録作業を担当することになり、「逍遙園」所在地の大港埔30番地まで行ったのである。とくに初めて行ったときは、農園の土地面積が非常に大きいことが印象的であったといわれた。²⁴¹その時、林氏は日本籍の代理人と引き継ぎを行い、双方一緒に品物一件ずつ確認していった。土地所有権の関係書類や室内の家具も含めて、すべてが見積りされた。その場には、代理人、受取側担当者、土地銀行のスタッフが居合わせたのである。林氏は

代理人と雑談をしていた際に、「逍遙園」は越冬のための別荘であることを知った。²⁴²

その時の代理人はおそらく秘書の西田忠氏もしくは廣瀬了乘氏であったと考えられる。土地銀行の前身は日本勸業銀行であり、「逍遙園」の土地抵当に関する賃借書類を保有していた。その中には、大谷光瑞が銀行宛に自ら書いた複数通の手紙も含まれている。大谷光瑞は、「逍遙園」の土地を担保にし、廣瀬了乘氏と森田工務所の森田隆之向氏を通して、高雄支店から借款したことが判明している。したがって、森田工務所は「逍遙園」建造の主要な請負側であると推断できる。二角龍蔵氏は、父親の幸治郎氏が大谷光瑞の要請を受け、高雄大谷邸の大工工事の指導を引き受けた。開園式後の11月9日、廣瀬氏は「逍遙園」別邸内で大谷光瑞の代わりに感謝状を書き、五百円の謝礼と一緒に幸治郎氏に渡した。台湾総督府高雄医院の張欽城医師（台中州大雅庄出身）によると、1939（昭和14）年、森田工務所に勤務し、「逍遙園」で左官をやっていた隣人から、「逍遙園」は本願寺法主の家だと聞いたので、好奇心があつて見に行ったら、新しくてきれいな住居で、外装のタイルは高雄市役所に使われていたものと同じ薄青色であったという。

243

（三）「逍遙園」と「陸軍病院」との繋がり

大谷光瑞と「大谷学生」たちが台湾から離台後も、台しばらく留まっていた廣瀬了乘氏と西田忠氏は最後には日本に帰国したのである。しかし、入船町二丁目3番地に住んでいた森田隆之氏の最後の行き先は未だに分からないままである。

1946（昭和21）年、「逍遙園」が台湾政府に没収された後、それまでまったく関係を持たなかった高雄「陸軍病院」がその場所を使用するようになった。林慶同

氏は、知人の依頼を受け、再度「逍遙園」を訪ねたとき、床面に達している大きな窓ガラスの厚みが非常に印象的であったという。おそらく、政府に没収された直後にすぐ軍に徴用されたと推測できる。²⁴⁴

「聯勤第五総医院第二組」は高雄「陸軍病院」に進駐した最初の軍の病院であった。進駐後に「聯勤一〇五医院」（「後方一〇五医院」とも称されていた）と改称された。1947（昭和22）年2月28日²⁴⁵に暴動が発生し、当該医院は物資や銃器の保管を行っていたため、市民に囲まれたのである。大勢の台湾以外の地域の出身者が医院に駆けつけ、人身保護を求めた。市民と医院に進駐していた「国軍独立団第七連第一排」が対峙し、「逍遙園」付近一帯は暴動の現場となってしまった。²⁴⁶当時の『報告書』によると、1949（昭和24）年7月、「聯勤一〇五医院」は、高雄「陸軍病院」を中国広州で待命していた「聯勤第二総医院」に引き渡した。しかし、人員進駐時には、建物の修繕や土地の整備などの作業が多かったため8月1日になって、ようやく通常業務及び患者の収容が再開できたのである。²⁴⁷このような状況から、「聯勤第二総医院」が進駐した当初では、軍の幹部たちの宿泊さえも困難だったことがわかる。

「逍遙園」別邸の2階にある大谷光瑞の寝室内で、「聯勤第二総医院」院長景凌瀨少将一家の遺留品が大量に見つかった。約70年間の間、誰かに動かされる痕跡はまったくなかった。この時期から、「逍遙園」の運命が変わり始めた、といえるだろう。大谷光瑞と彼の門下生が農作物を栽培していた広大な農園は、医院側に宿舍用敷地を提供できたのである。国軍高雄医院史館所蔵の「院外眷舎」と「公屋房産」位置図には、「別邸」、「大谷学生合宿所」、「農家」、「廣瀨秘書の宿舍」という4つの建物の場所が明確に記録されていて、農園内にある灌漑

用の溜め池の地形さえも詳細に描き入れられている。景凌瀨院長一家が「逍遙園」別邸に入居し、一部の医官とその家族は他の3つの建物にそれぞれ入居していた。その他中国本土から次々と撤退してきた軍人と家族らは、周りの荒れ果てた土地を使い、臨時の住居を作り上げた。そこは、次第に一つの村落が形成され、景凌瀨院長によって、「行仁新村」²⁴⁸と命名された。

(四) 「行仁新村」に守られていた「逍遙園」

全体的にみると、「行仁新村」は「逍遙園」別邸を守る役割を果たしていたと考えられる。「大谷学生」、「農家」と「廣瀨秘書の宿舎」は長い間あまり重要視されていなかったため、最終的に解体されてしまった。一方、「逍遙園」別邸のほうは村落内にある多くの建物に重々と囲まれていたゆえに、人々に知らされない存在となった。「大谷学生」の岩佐博男氏は「逍遙園」で1年間ぐらい過ごした。日本経済回復期に、彼は高雄を訪れ、地図を片手に持ちながら、十代のときの記憶を頼りに、「逍遙園」を探し回ったことがある。しかし、見つからなかった。²⁴⁹台湾は長年の経済成長を果たしていたため、大港埔庄は既に田園風景を一面に呈する場所ではなく、高層ビルが立ち並ぶ地域となった。景凌瀨院長は、1954（昭和29）年2月に軍隊を離れて、家族と一緒にアメリカに移民した。「行仁新村」の居住者のなかでも、経済的に裕福になってきたのにつれて、村を転出し、新たな住居を買い求める人が多く現われた。現在では、「行仁新村」は以前の軍人家庭と新たに移入した新住民によって構成される独特の「眷村」²⁵⁰になったのである。

「行仁新村」住民の中、「逍遙園」が作られた経緯をしている人はほとんどいない。移入人口の増加に伴い、元々農園内にあった秘書宿舎や倉庫も次々と壊さ

れ、駐在軍隊員とその家族らの宿舎が建てられた。さらに周りの熱帯樹木もなくなった。このような状況は、60年近くも続いていたのである。

2003（平成15）年に、台湾政府が「眷村」の解体に着手し、「行仁新村」の住民が続々と転出した結果、その場所は荒れ廃れた地域となってしまった。「逍遙園」のことをまだ覚えている人のほとんどはもう80、90歳の老人である。当時、「逍遙園」の防空壕の中で遊んでいた子どもたちも中年になった。彼らはこの地域に今なお深い愛情を抱いている。彼らはこの土地に守られて、困難な年月を過ごしてきたのである。彼らは一番早く「逍遙園」別邸の重要性を認識した人たちであり、「眷村」住民という政治的立場から見ると、実に不思議に思わなければならないのである。大谷光瑞と彼の門下生が3年間しか住んでいなかった場所に、「眷村」住民は70年間も住み続けることができた。それは、「逍遙園」別邸の設計および使用した建材は大谷光瑞が求めていたものであり、非常に高水準なものであったことを裏付ける証拠ともいえるだろう。当初建築工事に携わった森田工務所、二角工務店及び台湾籍や日本籍の職人たちが共に努力した結果でもある。

（五）市民と政府による保存活動の成果

2012（平成24）年の時点で、「行仁新村」内は、「逍遙園」およびその周辺にあるごく少数の戦後の家屋のみが残されていた。高雄市各界の努力によって、「逍遙園」本館の解体は免れたのである。また、民間では、「逍遙園区再生行動小組」や「逍遙園與行仁新村影像記録文化志工団」などの団体が次々と設立され、「逍遙園」と「行仁新村」の歴史を解説し、映像保存を行なう活動が展開され、さらに、歴史資料の出版やガイドグループの形成といった住民活動に対する支援も行なわれ始めた。2017（平成29）年8月に、「逍遙園」の修復工事が開

始され、2020（令和2）年6月に竣工した。別邸は当時台湾と日本の匠たちによって作られた建築の傑作である。その敷地は大谷光瑞の夢でもある台湾で熱帯農業を発展させるための場所である。今日まで、「逍遙園」の保存活動は劇的な展開を見せてきた。歴史的な偶然もあるが、何より、高雄市民が先入観を捨て、文化資産の保護・保存の実現に極力に努めてきたことを忘れてはならない。

【注釈】

⁹⁹ 欧米列強のアジア侵略に対抗するため、アジアの諸民族は、日本を盟主として団結すべきであるという考え。ただ大谷光瑞のアジア主義は、中国の李大釗（1888～1927）中国河北省の人。中国共産党創設メンバーの一人として知られる。1913年早稲田大学に留学後、社会主義思想に触れ、日本で反袁世凱運動を起こした。その後北京大学に職を得て、新文化運動を興す。1919年には『亜細亜主義與新亜細亜主義』を著し大谷光瑞らのアジア主義を批判した。

¹⁰⁰ 大谷光瑞、『随筆百則』、「第36則」、有光社、東京、昭和16年12月、102～103ページ。

¹⁰¹ 大谷光瑞、『随筆百則』、有光社、東京、昭和16年12月。

¹⁰² 大谷光瑞、『熱帯農業』、有光社、東京、昭和17年。

¹⁰³ 莊子『列御寇』。

¹⁰⁴ 「南溟」、または「南冥」、南方の大海を意味する。莊子『逍遙遊』では、「是鳥也、海運則將徙於南冥。南冥者、天池也」とある。高雄にある浄土真宗本願寺派の寺院も「南溟山宝船寺」と名付けられていた。それが大谷光瑞による命名だったのかは不明。

¹⁰⁵ 「隔」は、ここでは「覆い隠す」の意。

¹⁰⁶ 魍魎、山中の妖怪。魍魎、水中の妖怪。どちらももともとは伝説の妖怪だったが、のちに悪人を意味するようになった。

¹⁰⁷ 「洪壑」、深い谷の意。

¹⁰⁸ 「丈人」、年寄や老練な人の意。

¹⁰⁹ 「鼇背」、大海の意。

¹¹⁰ 「修蛇」と「封豨」両方とも中国古代伝説の大型の野獣であり、『山海経』、『楚辞』、『淮南子』等古書に記載されている。暴虐な人や国を譬えて言う語に使われている。

¹¹¹ 「修蛇」と「封豨」両方とも中国古代伝説の大型野獣であり、『山海経』、『楚辞』、『淮南子』等古書に記載された。今暴虐な人や国を譬えて言う語に使われている。

¹¹² または「峴岬」、本来は険しい山の意だが、此処は不安定という意味である。

¹¹³ 「蹉蛇」は「蹉跎」の誤植か、機会を逃すという意味である。

¹¹⁴ 「九十」、九十歳という意味。小説の封神演義も中国の伝説によって、九十歳の太公望は渭水で釣りして、周の文王を見出されるという典故でもある。

¹¹⁵ 「屠釣叟」と「帝王師」の出典はともに北宋時代の張方平『送張寛』にある。「屠釣叟」とは屠殺業者の老人あるいは魚屋の老人のこと。「帝王師」は文字通り、皇帝を輔弼する賢臣である。

¹¹⁶ 「大谷光瑞師年譜」、『大谷光瑞師の生涯』、大谷光瑞猯下記念会編。

¹¹⁷ 「消息」、『大乘』昭和16年6月号、大乘社、82ページ。

¹¹⁸ 「光瑞猯下御病中記（一）」、『大乘』昭和16年7月号、大乘社、15ページ。

¹¹⁹ 何事を聞いても素直に理解できることを表す。六十而耳順『論語』為政編。

¹²⁰ 古代における官僚の冠を飾るもの、つまり、仕官の意。

¹²¹ 聚果榕、Ficus racemosa。優曇華、仏教の經典では「仙境における極上の花」とされる。三千年に一度の開花しかない。花が咲いたらすぐ凋むが、その開花は金輪王の転生を意味する吉兆と思われる。

¹²² 「疎」、疏に同じ。

¹²³ 「維摩」、維摩詰菩薩の略、維摩居士ともいう。

¹²⁴ 岫の元の意味は穴が付いてる山だが、此処では山々というkとである。典故は中国文人の陶潜

『歸去來兮辭』：「雲無心以出岫、鳥倦飛而知還」。

¹²⁵ 「舶」、大船の意。

¹²⁶ 「還」は、戻るか帰るかということである。

¹²⁷ 「守分」、本文を守る意。

¹²⁸ 「武陵」、陶淵明『桃花源記』では「晉太原中、武陵人捕魚爲業、緣溪行、忘路之遠近」とある。

¹²⁹ 「桃源」、すなわち「桃花源」。

¹³⁰ 「田廬」、田畑と屋敷。諸葛孔明が臥竜崗で建てた茅葺の庵に由来する。

¹³¹ 「三分計」、天下を三つに分ける計略の意。

¹³² 「下帷」、家に引きこもって読書に没頭する意。

¹³³ 「同軌」、同道、同行の意。

¹³⁴ 「樗」、莊子『逍遙遊』では「吾有大樹、人謂之樗」とある。樗の木は木目がこまやかでないため、平凡な人を譬えて言う語、あるいは謙遜語として使われる。

¹³⁵ 「京闕」、京や首都の意。

¹³⁶ 「江湖」、津々浦々の意。

¹³⁷ 同注釈 62

¹³⁸ 「堪」、重要な任に当たる意。

¹³⁹ 「塵俗」、世俗の物事。

¹⁴⁰ 同注釈 63。

¹⁴¹ 誤植と思われる。椰→榔。

¹⁴² 「五柳」、陶淵明の号「五柳先生」のこと。陶淵明は『五柳先生伝』を書いた。後世では、それをもって隠遁者を指す。

¹⁴³ 「陶潛」、またの名は淵明、字は元亮、東晋潯陽柴桑の出身。

¹⁴⁴ 「鷺窺沼」とは鷺を狩りに池や沼などを覗くことである。例えば、北宋の黄庭堅『和尾仲觀試進進士』：「癡坐鷺窺沼」を見よ。

¹⁴⁵ 加藤斗規、「大谷光瑞と台湾」『大谷光瑞「国家の前途」を考える』、柴田幹夫編、2012年、勉誠出版。

¹⁴⁶ 「大谷氏土地買収に 一部市民が反対運動 高雄駅敷地問題の纏れ」昭和11年3月26日、坂本悠一監修、朝日新聞社、『朝日新聞外地版・台湾版』、ゆまに書房、東京、2010年04月。

¹⁴⁷ 「郭」、城外の意。

¹⁴⁸ 「水竹」、水と竹のこと、つまり清らかで静謐な環境。

¹⁴⁹ 「塵囂」、俗世間の喧騒。陶淵明『桃花源』では「借問遊方士、焉測塵囂外」とある。

¹⁵⁰ 莊子『逍遙遊』では「北冥有魚、其名為鯤。鯤之大、不知其幾千里也。化而為鳥、其名為鵬。鵬之背、不知其幾千里也。怒而飛、其翼若垂天之雲。是鳥也、海運則將徙于南冥。南冥者、天池也。」とある。「鵬」はそこに由来する。

¹⁵¹ 寿山、古代では打狗山、打鼓山、鼓山と言い、現在は俗に柴山という。台湾の高雄市の西南に位置し、海に臨んでいる天然の要所。サンゴ礁石灰岩からなっているため、そこに天然の洞窟が非常に多い。日本領だった時代に、本田静六はヨーロッパ伝来の環境保護理念を導入し、海岸地域を含めて一帯を「寿山記念公園」とし、1928年から同園をオープンした。

¹⁵² 大谷光瑞、『随筆百則』、「第97則」、有光社、東京、昭和16年12月。

¹⁵³ 大谷光瑞、『随筆百則』、「第79則」、有光社、東京、昭和16年12月。

¹⁵⁴ 「逍遙園」の東北の一角。加藤斗規氏所蔵の「逍遙園」絵葉書より。

¹⁵⁵ 「大谷学生」が「逍遙園」の東側に集合し、写真を撮った。二角龍蔵氏所蔵の「逍遙園」写真より。

¹⁵⁶ 職人が「逍遙園」の東側に集合し、写真を撮った。二角龍蔵氏所蔵の「逍遙園」写真より。

¹⁵⁷ 大島芳夫、「逍遙園へ入門の頃の日記より」、『瑞門会誌』第2号、瑞門会、昭和27年9月1日。

¹⁵⁸ 「三冬」、冬の三か月を指す。つまり孟冬（旧暦10月）、仲冬（旧暦11月）、季冬（旧暦12月）。

¹⁵⁹ 「素秋」、秋のこと。

¹⁶⁰ 「戦」、顛に同じ。「揺れる」「おののく」の意。

¹⁶¹ 「行役」、旅行の意。

¹⁶² 「壯心」は「雄心」と同じ意味である。漢語の熟語が「壯心不已」である。出典は曹操〈歩出

夏門行)：「老驥伏櫪、志在千里。烈士暮年、壯心不已」

¹⁶³ 「渭濱」、つまり渭水の浜、渭水のほとり。渭水のほとりにいた老人は姜太公である。

¹⁶⁴ 「叟」、お年寄りや老人の意。

¹⁶⁵ 近衛文麿（1891～1945）近衛家第30代当主。三度に渡り首相を歴任した。大谷光瑞とは親戚に当たる。

¹⁶⁶ 加藤斗規、「大谷光瑞と台湾」、『大谷光瑞「国家の前途」を考える』、柴田幹夫編、2012年8月、勉誠出版、128ページ。

¹⁶⁷ 前掲「大谷光瑞と台湾」。

¹⁶⁸ 大谷光瑞、『随筆百則』、「第36則」、有光社、東京、昭和16年12月。

¹⁶⁹ 「衾」、布団の意。

¹⁷⁰ 「籬落」、竹や樹木の枝で編んだ柵。

¹⁷¹ 「菘」、白菜のこと。

¹⁷² 「年来薄」、南宋の陸游『臨安春雨初霽』に由来する。

¹⁷³ 「苦鹹」、人間社会における各種の境遇。

¹⁷⁴ 「隴」、壟に同じ。あぜのこと。

¹⁷⁵ 「莠」、猫じゃらしのこと。

¹⁷⁶ 「芟」、草刈の意。

¹⁷⁷ 「翠樾」、緑樹が茂っている様子。

¹⁷⁸ 「戸」、家、住み家のこと。

¹⁷⁹ 「衫」、単衣のこと。

¹⁸⁰ 「九旬」、4月15日から7月15日までの90日間。ここでは3か月の時間を指す。

¹⁸¹ 「沉寂」、静寂の意。自己韜晦を暗に意味する。

¹⁸² 人の集まるどころ。『論語・憲問』では「於公伯寮、吾力猶能肆諸市朝」とある。

¹⁸³ 「棲」に同じ。

¹⁸⁴ 「燕落泥」は燕さえも離れるという寂寞たる比喩である。例は中国南北朝の薛道衡『昔昔鹽』の「暗牖懸蛛網、空梁落燕泥」を見よ。

¹⁸⁵ 「大隱」「大隱朝市」に由来する。本気で隠遁しようとする人であれば、たとえかまびすしい市場に身を置いても、その志を変えることはないという意。晋の王康璩『反招隱』では「小隱隱陵藪、大隱隱朝市」とある。

¹⁸⁶ 「扃」、門のこと。

¹⁸⁷ 「櫺」、門や窓、欄干の彫刻付き格子。

¹⁸⁸ 注44に同じ。

¹⁸⁹ 「蓬萊」、渤海にある仙人が居住している伝説の山。ここでは台湾を意味する。

¹⁹⁰ 「滄瀛」、大海のこと。

¹⁹¹ 「鯢鯨」、魚を飲み込む鯨と鯢、凶暴な人を誓えている語。

¹⁹² 「任公子」は莊子『任公子釣魚』に由来する。『莊子・外物篇』では「任公子為大鉤巨緇、五十犗以為餌、蹲乎會稽、投竿東海、旦旦而釣、期年不得魚」とある。

¹⁹³ 郭璞（276～324）六朝時代東晋の学者、文学者。山西省の人。「遊仙詩」は彼の代表作の一つである。

¹⁹⁴ 「浩蕩」、廣々とした様子。

¹⁹⁵ 「逍遙」、『逍遙遊』のこと。

¹⁹⁶ 「汗漫」、元代の夏文彦『図繪宝鑑・卷三・宋』では「董羽字仲翔、毗陵人。善畫魚龍海水。其洶湧瀾翻、咫尺汗漫」とある。

¹⁹⁷ 「圖南」、高い志を持つ人の譬え。莊子『逍遙遊』では「而後乃今培風、背負青天、而莫之夭闕者、而後乃今將圖南」とある。

¹⁹⁸ 「寥廓」、南朝梁の劉勰『文心雕龍・雜文』では「宋玉含才、頗亦負俗、始造對問、以申其志、放懷寥廓、氣實使之」とある。

¹⁹⁹ 孫元衡『赤嵌集』に由来する。

²⁰⁰ 「簸」「揺れ動く」の意。

²⁰¹ 「溟漲」、大海のこと。南北朝時代の謝靈運『游赤石進帆海』では「溟漲無端倪、虛舟有超越」とある。

²⁰² 「籬籬」、「藩籬」とも言う。竹などで編まれた真垣のこと、ここでは欧米列強を指す。

- 203 「鵙」、莊子『逍遙遊』では「斥鵙笑之曰：“彼且奚適也？我騰躍而上、不過數仞而下、翱翔蓬蒿之間、此亦飛之至也、而彼且奚適也？”此小大之辯也」とある。
- 204 「大谷光瑞上人略歴」、『大谷光瑞上人人生誕百年記念文集』、瑞門会、昭和 53 年、426-427 ページ。
- 205 「至人」、聖人や徳を有する人物のこと。莊子『逍遙遊』では「至人無己、神人無功、聖人無名」とある。
- 206 「滯」、障害のため、流れが悪いという意。
- 207 「三顧」、諸葛孔明を招くべく、劉備が三度にその庵を訪ねたこと。
- 208 「釣徒」、「煙波釣徒」を自称する張志和のこと。彼は釣りをする際、目的は魚にあらずという志を表すため、えさを用いない。
- 209 「石珉」、玉に似た美しい石。『荀子・法行』では「君子之所以貴玉而賤珉者、何也？」とある。
- 210 「拱璧」、一抱えほどもある大きな玉石、めずらしい宝物の譬え。
- 211 「晒」、「謗る」や「あざ笑う」の意。
- 212 「不亀薬」、莊子『逍遙遊』では「宋人有善為不亀手之薬者、世世以泝澣統為事」とある。
- 213 「魏瓠」、つまり魏王の瓠、無用の長物の譬え。莊子『逍遙遊』では「魏王貽我大瓠之種、我樹之成而實五石。以盛水漿、其堅不能自舉也、剖之以為瓢、則瓠落無所容。非不号然大也、吾為其無用而培之」とある。
- 214 大島芳夫、「高雄のお住い、逍遙園」、『瑞門会誌』第 2 号、瑞門会、昭和 27 年 9 月 1 日、19 ページ。
- 215 「無憂園」は、大谷光瑞が 1921 年上海に作った広さ一万坪にも及ぶ別荘である。
- 216 「錦華寮」は、本願寺境内に 1937 年に北尾春道によって作られた大谷光照（第 23 世本願寺法主）の私邸である。大谷光瑞の建築指導があったといわれる。
- 217 田中勝治、「台湾での思い出」、『大谷光瑞上人人生誕百年記念文集』、瑞門会、昭和 53 年、395 ページ。
- 218 大島芳夫、「高雄のお住い、逍遙園」、『瑞門会誌』第 2 号、瑞門会、昭和 27 年 9 月 1 日、19 ページ。
- 219 2013 年、林子建・潘永瑢・曾玉冰・林何臻・盧昱瑞・林子博・吳秉倫が行った「行仁新村」住民に対するインタビュー記録による。
- 220 許台英、「走在六合路上」、『人生放異采』、林白出版社、台北、1986 年、58-59 ページ。
- 221 大島芳夫、「高雄のお住い、逍遙園」、『瑞門会誌』第 2 号、瑞門会、昭和 27 年 9 月 1 日、19 ページ。
- 222 田中勝治、「台湾での思い出」、『大谷光瑞上人人生誕百年記念文集』、瑞門会、昭和 53 年、394 ページ。
- 223 「消息」、『大乘』昭和 16 年 8 月号、大乘社、18 ページ。
- 224 大谷光瑞、『隨筆百則』、「第 79 則」、「第 97 則」、有光社、東京、昭和 16 年 12 月。
- 225 大谷光瑞、『隨筆百則』、「第 16 則」、有光社、東京、昭和 16 年 12 月、49 ページ。
- 226 大谷光瑞、『隨筆百則』、「第 16 則」、有光社、東京、昭和 16 年 12 月、50 ページ。
- 227 2018（平成 30）年 1 月 27 日筆者は大谷記念館の加藤斗規氏に同行し、「瑞門会」員の縣義治氏宅を訪問した。その聞き取りの中で言われた言葉である。
- 228 太寿堂鼎、「メダカから見た象」、『大谷光瑞上人 人生誕百年記念文集』、昭和 53 年、瑞門会、409 ページ。
- 229 加藤斗規、「大谷光瑞と南洋」、『大谷光瑞とアジア 知られざるアジア主義者の軌跡』、柴田幹夫編、勉誠出版、2010 年 8 月、259 ページ。
- 230 太寿堂鼎、「メダカから見た象」、『大谷光瑞上人人生誕百年記念文集』、瑞門会、昭和 53 年、409 ページ。
- 231 田中勝治、「台湾での思い出」、『大谷光瑞上人人生誕百年記念文集』、瑞門会、昭和 53 年、395 ページ。
- 232 太寿堂鼎、「メダカから見た象」、『大谷光瑞上人人生誕百年記念文集』、瑞門会、昭和 53 年、408 ページ。
- 233 田中勝治、「台湾での思い出」、『大谷光瑞上人人生誕百年記念文集』、瑞門会、昭和 53 年、395 ページ。
- 234 大島芳夫、「逍遙園の頃の日記より」、『瑞門会誌』第 2 号、瑞門会、昭和 27 年 9 月 1 日、8 ページ。

ージ。

²³⁵ 大島芳夫、「逍遙園の頃の日記より」、『瑞門会誌』第2号、瑞門会、昭和27年9月1日、9ページ。

²³⁶ 加藤斗規、「大谷光瑞と台湾」、『大谷光瑞「国家の前途」を考える』、柴田幹夫編、2012年8月、勉誠出版、128ページ。

²³⁷ 「光瑞猊下御病中記（一）」、『大乘』、昭和16年7月号、大乘社、15ページ。

²³⁸ 日本勸業銀行档案（台湾中央研究院台湾史研究所）。

²³⁹ 高原逸人（1899-？）福岡県の人。東京帝国大学法学部を卒業後、台湾総督府に勤務する。高雄州内務部長から1942年に高雄州知事となる。

²⁴⁰ 曾玉昆、「林慶同先生訪問記録」、『高市文献』第10巻第2期、高雄市文献委員会、1988年、46ページ～48ページ。

²⁴¹ 曾駿文、「新興区日本皇族別墅之探討与訪談」、『高市文献』第17巻第4期、高雄市文献委員会、2004年12月、107ページ。

²⁴² 曾駿文、「新興区日本皇族別墅之探討与訪談」、『高市文献』第17巻第4期、高雄市文献委員会、2004年12月、107ページ。

²⁴³ 曾駿文、「新興区日本皇族別墅之探討与訪談」、『高市文献』第17巻第4期、高雄市文献委員会、2004年12月、106ページ。

²⁴⁴ 曾駿文、「新興区日本皇族別墅之探討与訪談」、『高市文献』第17巻第4期、高雄市文献委員会、2004年12月、108ページ。

²⁴⁵ 2.28事件は、1947年2月28日に台北市で闇たばこを売っていた女性（本省人）に対して、警官が暴行を加える事件が起こった。その後台湾人（本省人）による抗議活動が台湾全土に広がった。

²⁴⁶ 陳秀珍等5人、『時代巨流中湮沒的医療地景-陸軍第八〇二総医院的前世今生（1941-1977）』、高雄中学、2015年12月、19ページ。

²⁴⁷ 陳秀珍等5人、『時代巨流中湮沒的医療地景-陸軍第八〇二総医院的前世今生（1941-1977）』、高雄中学、2015年12月、20ページ。

²⁴⁸ 彭大年、「高雄市新興区行仁新村村史」、『眷恋：陸軍眷村』台北：国防部部長弁公室、2007年、233ページ。

²⁴⁹ 2013年10月4日夜京都市下京区烏丸通四条下ルからすま京都ホテル2階の中国料理「桃李」において取材した岩佐博男氏の口述記録より。

²⁵⁰ 台湾において外省人が居住する地区を示す名称である。

第5章 近代文化住宅としての「逍遙園」について

5-1 「三夜荘」と「逍遙園」

大谷光瑞は、「逍遙園」を熱帯農業の試験地とし、「逍遙園」開園式後の毎年冬に3ヶ月程度の滞在をすることにした。「逍遙園」2階の書斎で、彼は『隨筆百則』、『熱帯農業』などの著作を書き上げた。書斎に用いた建材は、父親である大谷光尊により作られた伏見桃山にある「三夜荘」を解体して持ってきたものである。なぜわざわざ解体して台湾まで持ってきたかということについては、建設資金の不足であるか、それとも、台湾には高い技術を持つ大工がいないかということであるかは、まだ明らかになっていない。書斎床の間の壁には、梵文で次のような一行の経文が書かれている。すなわち、「野獣の王・獅子のように、勇猛で自信があり、恐れを知らぬ」という文章である（図 30 参照）。宗教家としての大谷光瑞も、探検家としての大谷光瑞も、あるいは農学者としての大谷光瑞も、一生かけてこの一文を実践していた。さらに、人生の各発展段階において、彼は、明確な目標を持ち、別邸を造り、秘書や学生たちをアジア各地に転々させた。京都伏見桃山の「三夜荘」、神戸の「二楽荘」から始まり、中国旅順の「大谷邸」、上海の「無憂園」、大連の「浴日荘」、そしてジャワ島 Majalengka の「環翠山荘」と Garut の「大観荘」、最後には高雄の「逍遙園」に辿り着いた。高雄は海外放浪の大谷光瑞にとって、余生を託す夢の土地となったのである。



図 (29) 「三夜荘」書齋の写真、床ノ間右上に書かれた梵文
(加藤斗規氏提供)

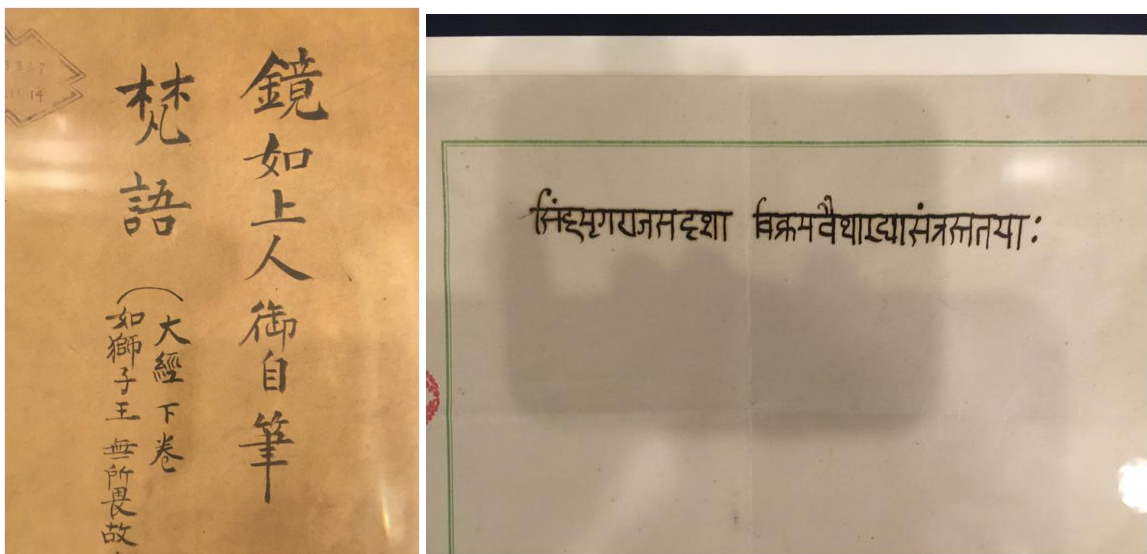


図 (30) 梵文「野獣の王・獅子のように、勇猛で自信があり、恐れを知らぬ」
(筆者撮影、龍谷大学世界仏教文化研究センター・アジア仏教文化研究センター
国際シンポジウム「大谷光瑞師の構想と居住空間」)

「逍遙園」の主体部分は煉瓦造と鉄骨造の併用で、それ以外の木造部分は2階に集中していた。とくに京都「三夜荘」の移築作業は難度が高く、当時は大工二

角幸治郎氏に任せた可能性がかなり高い。そのほか、幸治郎氏はまた木工部分と室内装飾部分の指導役を担当した。例えば、日本建築のテラスにあたる「高欄（勾欄）」「唐破風」は日本人しか使わない特殊な木工技術であった。2014（平成26）年3月幸治郎氏の息子龍蔵氏が「逍遙園」を訪ねた時、自ら父親の仕事を確認された。現在の「逍遙園」内部の装飾は幸治郎氏の指導の下で完成されたと考えてよいようである。とくに網代天井などの、床の間にしか使わない高級装飾は、父の得意業であるといわれた。京都では、天井を組む材料は、一般的に、比較的安価な榿（*Chamaecyparispisifera*）、または赤杉や楸などの貴重材料を使用していた。現在損壊している「逍遙園」書斎の床柱は、筆者と林仁政博士が共同で鑑定し、青剛櫟（アラカシ、*Quercus glauca*）であるとした。新聞記事²⁵¹によれば、当時の床柱は檜木が使用されており、材料が「三夜荘」に由来するという説は確かに一定の信憑性があると考えられる。

二角龍蔵氏から提供された父親幸治郎氏の遺品の中に、廣瀬了乗が大谷光瑞の名義で感謝の意を表し500円を贈予するという感謝状が1通あった。²⁵²二角幸治郎氏（1897－1964）は京都本山の「錦華寮」の新築工事に建築技術者として携わっていたと推定できる。この「錦華寮」は大谷家本邸（大谷光照法主の住居）として1937（昭和12）年3月に完成する。1935（昭和10）年以降に三夜荘の改修工事に携わった二角幸治郎氏は、その腕前を買われ、本願寺内事室長の柱本瑞俊（前述の明覚寺住職）の依頼により、逍遙園工事に携わり、1940（昭和15）年から1941（昭和16）年11月まで台湾に赴任している、²⁵³「逍遙園」の室内設計を指導するために高雄に招聘されたのである。当地の森田工務所と協力して作業したのである。当時の日本では1ヵ月の給料は40～50円であったのに対し、大谷光

瑞は惜しみなく 80 円を二角幸治郎氏に渡した。龍蔵氏は小さい時火鉢の傍で静かに大人たちの話を聞くのが好きで、幸治郎氏から、大谷光瑞がお金を使うのはすごいなどの話を聞いたことがあるという。²⁵⁴

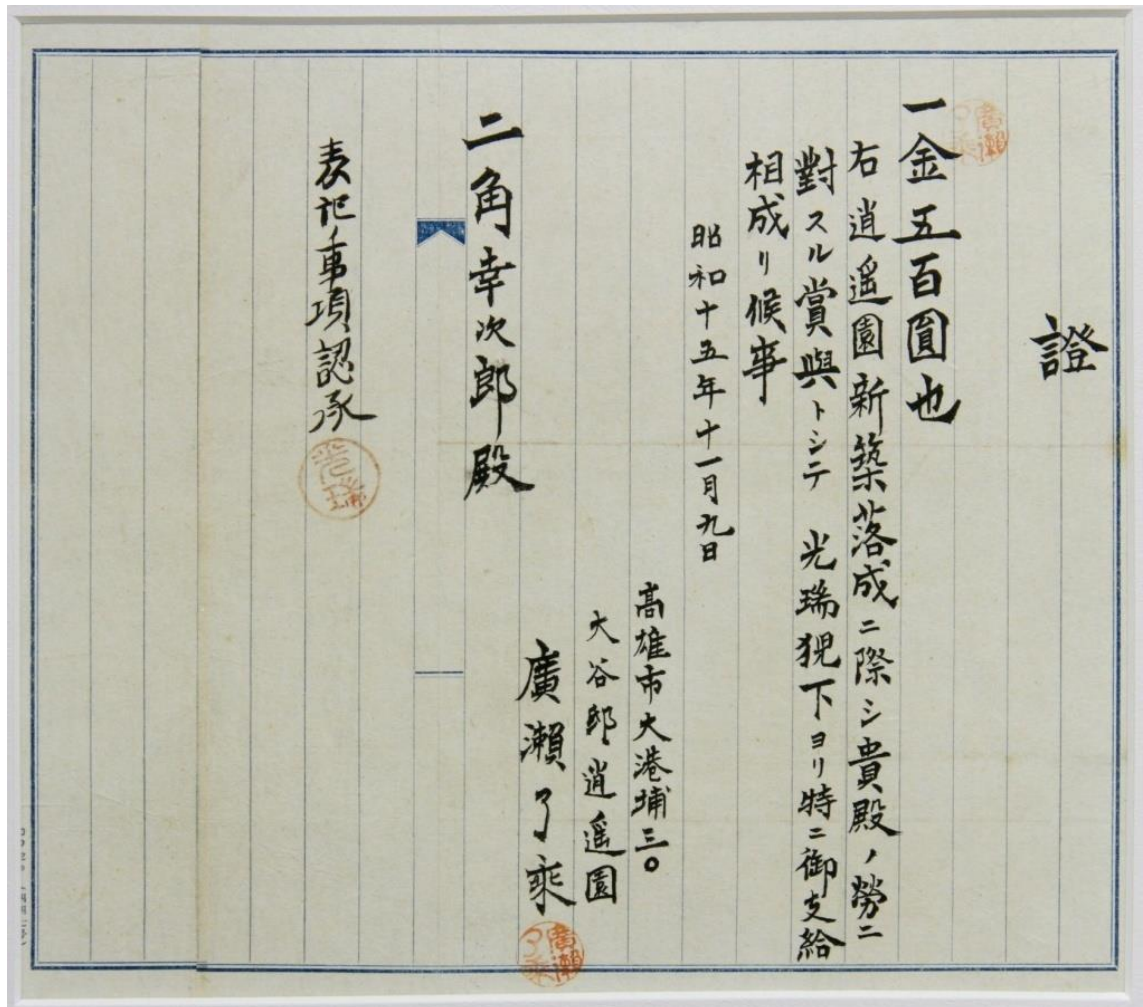


図 (31) 大谷光瑞 (廣瀬了乘) から二角幸治郎氏に送られた感謝状
(二角龍蔵氏提供)

5-2 大谷光瑞の建築思想

(一) 建築用木材について

大港埔庄の広大かつ肥沃な農地の中で、延べ1万2千坪の敷地を占める台湾製糖株式会社の所有地²⁵⁵に新しい荘園が建てられた。中央にはグリーン色の外装をもつモダンな近代文化住宅の「逍遙園」別邸が作り上げられていたのである。別邸の外観も内装も、大谷光瑞自身のデザインによって作られたのである。建築の専門家ではない彼は終生積み上げてきた考えや思想、および人生経験のすべてを、この建物の建造に力を注いだのである。

二角幸治郎氏は「逍遙園」完成後、軍人が「逍遙園」を訪ねて来て、鉄骨造りの家と精巧な木造建築を見て、非常に驚いたのを記憶している。軍部はもちろん大谷光瑞を恣意的に批判することを敢えてしなかったため、二角さんに「今は国の非常時なのに、こんな豪華な家を建てるなんて」といわざるを得なかった。²⁵⁶

1942（昭和17）年1月に徴用文化人としてジャワ戦線に向かう途中の富沢有為男、²⁵⁷大宅壮一、²⁵⁸浅野晃²⁵⁹たちが「逍遙園」に大谷光瑞を訪問している。

富沢は「その住宅は軍病院前のすぐ前にあるだだつ広い原っぱに、何となく住む人の奇癖をそのままに現わした、支那人とも本島人ともまた、日本人とも区別のつきかねる建築法が用いられてゐた。強いていへば本業ならぬ土地か相場で、一当て当てた町医者が素人設計で造った病院がとも思はれ、また何か怪しげな宗教の会堂の如く感じられる節もある」と感想を述べている。²⁶⁰

実は、大谷光瑞は豪奢な人ではなく、明確な動機と考えができてから実行したのである。「逍遙園」別邸を建てる前に、使用される木材に関して、既に、シロアリによる破壊問題を考えていた。たとえば、大谷光瑞は南洋に滞在したことがあ

るため、台湾のシロアリの怖さを十分認識していた。ゆえに、別邸のような木造建築には、総督府営林所の紅檜、柚木（チーク）や太平洋鉄木など、シロアリ防止に優れている木材を使用することに拘った。彼自身のいい方によれば、「不肖の高雄「逍遙園」を作るや、阿里山の扁柏の外、南洋群島の鉄木及チークの古材を以てす。家屋堅固にして虫蠹の害を免れ、風に耐へ雨に立つ。之に住居するに精神も亦自から剛健の風を養ふ」²⁶¹という。また、「台湾に於て全くその害〔筆者注：シロアリの害〕を蒙らざる木材はチークと肖楠（libocedrusmacrolepis）の2種にして、ベニヒ（chamaecyparisformosensis）、廣葉杉（Cunninghamialanceolata）是に次げり。チークは現在台湾産は未だ長大ならず、肖楠は土産にして長大材なきに非ざれども産額極めて少なく、価貴く需用を満す能はず。故に一般の需用としてベニヒ、廣葉杉を用ひざるべからず。不肖の住宅はベニヒを用ひ、チークの古材（廢船材）と太平洋鉄木を用ふるを以て幸ひにその害を免る」²⁶²ともいった。これからの記述から、大谷光瑞が晩年「逍遙園」に対する熱い期待感を持っていたことがわかる。

2008（平成20）年、筆者は、1階の大食堂と2階の書斎の間の床梁は台湾総督府営林所が提供した紅檜（ベニヒ）を使用したことを発見した。日本勧業銀行高雄支店の貸付記録によれば、森田隆之氏は嘉義天龍材木店から嘉義産の紅檜中等材を購入し、輸入材料としては京都天龍材木店総代理から日本内地の杉の中等材および南洋材の中等材を購入した。数量はそれぞれ780才、165才、95才であった〔*筆者注：「才」は日本の木匠が使う体積単位。1才=1寸×1寸×10尺（3.03cm×3.03cm×303cm）〕。²⁶³



図 (32) 二角幸治郎、西田忠と原住民親子 (屏東公園)
(二角龍蔵氏提供)

龍蔵氏は、その父親がかつて台湾において西田忠秘書と一緒に屏東に観光に行ったり、原住民の集落を見学したりしたほか、また北部に赴き木材を選んだといったことがあると述べている。²⁶⁴要するに、「逍遙園」2階の木造部分の工事に関して、一人で高雄に来た幸治郎氏は木造建築専門家の身分として森田工務所に協力したのである。「逍遙園」内の木材に残された大量の「墨付き」のうち、幸治郎氏が残したのも少なくなかったであろう。筆者は木材の専門家とともに復元工事を始める前に木材の種類調査を行い、各部に使用された材料とその出自を指摘した。表にまとめて参考に供したい (表9参照)。

表 (9) 「逍遙園」新築工事木材種類

材種	出自	使用場所
廣葉杉 (福州杉)	日本 (仕入先: 高雄施合発 (商) 行、三井物産大阪支店、天龍木)	別邸屋根

	材株式会社嘉義工場)	
紅檜 (ベニヒ)	台湾総督府営林所 (嘉義阿里山産か)	書斎床梁
扁柏 (ヒノキ)	台湾嘉義阿里山	婦人室 (女秘書 4 名)
鉄木	不明	不明
チーク材	台湾総督府営林所高雄州旗山出張所が譲渡した樹齢 30 年の間伐材	不明
チークの古材	「三夜荘」新館から移築の廃船材	露台 (テラス)
タガヤサン (Cassia siamea)	「三夜荘」新館から移築されたと推測する。	婦人室床柱
ダンベルギアシソ (Dalbergiasisso)	台湾製糖株式会社橋仔頭工場 筧 干城夫寄贈	広間床柱 2 本
クスノキ	「三夜荘」新館から移築されたと推測する。	書斎床板
赤檜 (アカガシ)	「三夜荘」新館から移築されたと推測する。	書斎床柱
榎 (サワラ) または 赤杉、楸	二角幸治郎	各所の網代天井
一部の建材	「三夜荘」新館から移築されたと推測する。	可能な場所：座敷床の間、茶室、書斎
鉄材	日本製鉄株式会社八幡製鉄所製品 「三夜荘」新館から移築	広間、食堂、書斎、炊事場、光瑞師寝室

(『随筆百則』、日本勧業銀行所蔵文書、『台湾日報』第 28 冊、林仁政博士、京都二角工務店二角龍蔵氏のインタビュー内容、田中勝治、「台湾での思い出」、『大谷光瑞上人 生誕百年記念文集』、瑞門会、394 ページ。)

また、もっとも重要な対策として、地面との直接接触を回避するため、木材の使用は 2 階以上に限定させ、建物の主要構造には鉄骨が用いられたのである。そうすることによって、木材は建物の脇役的存在になった。大谷光瑞は、京都の住居「三夜荘」から伝統的な木造の部屋をそのまま台湾まで運び、「逍遙園」別邸 2 階の北東向きの角部屋として使っていた。本来別邸用に設計したものではなかったため、サイズのにはあまり適用できず、仏壇と茶室の屋根や母屋の軒を作るのが順調には行かなかった。当時、施工担当の二角工務店はかなり多くの気力をそこに費やしたに違いないだろう。工務店の責任者である二角幸次郎は、本願寺「錦

華寮」の建造を請け負った人である。大谷光瑞は彼を高雄に招き、技術指導を務めてもらった。京都の建築専門技術者はやはり台湾の職人ができない匠の技を持っているからである。その点は、「逍遙園」内の随所に見られる各種の天井から十分裏付けられている。²⁶⁵

(二) 「逍遙園」で使用された「三夜荘」の鉄骨構造

新しい建築材や技術の導入においては、「逍遙園」別邸の用材が極めて稀な事例になるといえるだろう。鉄骨の梁には改良型変形フィントラス (modified fink truss)、テラスにはトラス桁 (trussed beam) が使われた。同時期に、日本の株式会社武智鉄工所によって建てられた高雄駅 (昭和 15 年 3 月 30 日竣工) も、その屋根には鉄骨が使われていたのである。一方、木材に関しては、およそ 10 種類以上が使用されていて、室内のドアには安くてきれいな合板さえも用いられたのである。家主が苦心して造り込んだ実験性の高い住宅であることは明らかである。

「逍遙園」2 階の鉄骨構造は、日本製鉄株式会社八幡製鉄所が生産した鋼材を使用した。腹板の錆を除去後に文字が発見された。そこには、はっきりと「(S) B. S. 8×5 SEITETSUSHO. YAWATA. ヤワタ」という規格等の情報が記されていた。

「(S)」は商標、「B. S.」は鋼材の規格が (British Standards) によること、「8×5」は断面が 8inch×5inch であることを意味し、「YAWATA」は、生産地が八幡 (現福岡県北九州市) であることを示している。



図 (33) 日本製鉄株式会社八幡製鉄所製鉄骨
(筆者撮影)

鉄材の出どころについては、秘書の田中勝治があることを語った。田中秘書は、1938（昭和13）年10月に派遣され台北の台湾総督府の士林園芸試験支所で熱帯農業の勉強をしていた。1940（昭和15）年1月に「逍遙園」へ派遣され、そして廣瀬了乗秘書が田中、志水純（昭和8年入門）、樋脇康治（昭和13年入門）を連れて台北から南へ開墾に出向いた。その当時の「逍遙園」には住む部屋がなかったため、しばらく秘書たちは寶船寺に泊まり、毎日「逍遙園」まで通うこととなった。大谷光瑞は「寿山館」に住んでいた。²⁶⁶

1940（昭和15）年1月末の時、大工の二角幸治郎が「逍遙園」に到着した。まず田中秘書とほかの大工棟梁とで仮設の家屋を作った。その当時は電力がなかったため皆は家の中で自炊をしていた。大谷光瑞は、「三夜荘」の新館を高雄に移築することを計画していたため、鉄材とチーク材を先に「逍遙園」まで運送し、そ

の後、その他の建築材料を逐一運送してきた。田中秘書が大谷家の代表として指名され、各建築材料の検収と管理を行っていた。三月のはじめ、秘書の西田正も派遣されて、3人で暮らすこととなった。その後、新築工事において本館のほか、廣瀬了乘氏の家と T 字型平面の学生寮及び巨大な農業倉庫も続々と作られた。²⁶⁷

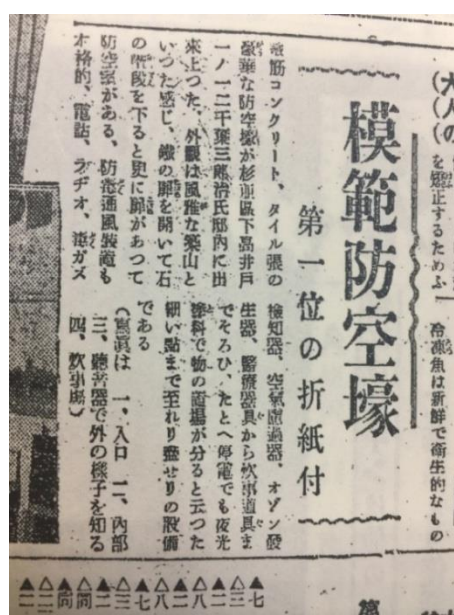
田中秘書の説明によれば、約 1940 (昭和 15) 年 2 月の時、材料がやっと高雄に到着し、「逍遙園」の開園日の 11 月 1 日までは僅か 8 か月の作業期間しかなかった。筆者は、当時の基礎工事及び一階の防空壕が既に設計図の通り完了したことを想定した。そうすると、「三夜荘」の資材が非常に重要なものとなる。別邸の 2 階における全ての部屋が鉄骨構造のフレームに基づき築造しなければならないため、大工棟梁の二角幸治郎の助けがなければ、「逍遙園」は別邸の建築本体を順調に完了することができなかった。

5-3 防空規則が「逍遙園」に及ぼした影響

1938（昭和13）年2月13日、中国軍機は、台北、新竹州を空襲、「国家総動員法」²⁶⁸1938（昭和13）年以降、日本は中国沿岸の封鎖を開始し、極東地域における日本と米国両国の矛盾が日増しに拡大していた。米国の対日政策の転換と米国領属地のアラスカ、ハワイ、フィリピンからの軍事力の強化によって、日本を不安にさせた。「逍遙園」の建設時には、すでに日本経済に大きな影響を与えていた時期であったが、アメリカは1940（昭和15）年9月に石油・鉄鋼の禁輸および在米資産凍結を実施したことに伴い、戦争勃発前の国際情勢が「逍遙園」の建築過程と重なった。



昭和15年10月8日『高雄新報』



昭和15年10月15日『高雄新報』

図(34) 台湾の防空規則と防空訓練のニュース
(昭和15年『高雄新報』第9冊、国立台湾大学図書館、財団法人高雄市文化基金会)

『台湾新報』と『高雄新報』の昭和15年10月8日と15日の紙面には、高雄州防諜連盟や防空壕施設、防空団や防空訓練計画の記事が随所に見られる。高性能を標榜する防空設備と設計が顕著となり、民衆に対しては模範防空壕とは何かを

教え、ガスマスク装置、電話、無線機、毒ガス検知器、エアフィルター、オゾン発生器、緊急医療器具、炊事器具、及び停電時に必要な夜光塗料などが準備された。1940（昭和15）年11月2日の『高雄新報』の記事を上記に載せておいた。「逍遙園」開園式当日、大谷光瑞は賓客を案内し、完備した防空室、完全無欠な建築構造を来客に披露したのである。



図（35）「逍遙園」公衆大防空壕
（加藤斗規氏提供）

5-4 大工棟梁二角幸治郎と「逍遙園」別邸

「逍遙園」開園式は11月1日にはじまり、計3日間行われた。2日目の新聞記事では、別邸の内部が相当詳しく紹介されている。書斎、寝室、製図室、大小食堂、婦人室、控室、書生部屋、炊事場、浴室、食糧蔵、および180人を収容できる大防空壕と60人が入れる家庭防空壕があり、全てにおいて完璧な別邸であるという。²⁶⁹ 実は、「逍遙園」は開園式当日にはまだ完成していなかった。1940（昭和15）年11月1日の『台湾日報』においては「大体竣工」²⁷⁰の4文字が書かれている。二角幸治郎氏がその時持ち帰って保管されていた「逍遙園」写真は、当日開園式に参加した賓客がもらった記念品と同じものであった。ただ、賓客がもらったのは絵葉書であり、フィルムから現像した写真ではなかった。これはなぜであろう。



「逍遙園」開園式絵葉書

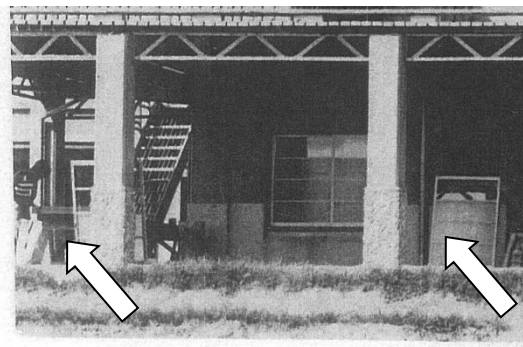


二角幸治郎提供の写真

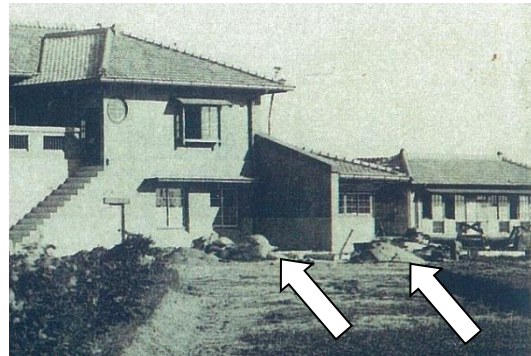
図(36) 絵葉書と写真の比較
(加藤斗規・二角龍蔵両氏提供)

明らかに、幸治郎氏がもらったのは日常の写真であった。つまり、「逍遙園」開園式の前に、撮影者はすでに絵葉書を製作するために計画的取材を行いはじめたのである。撮影者は全室外景10枚と室内4枚を撮った。他の写真には、幸治郎氏が屏東に行って観光したものも含まれているので、撮影者の身分は秘書である可能性が高い。これで、撮影者が写真の構図を決めた時、画面内に入っている工匠

を他所に移動させず、大工が東側のテラスの下でドアや窓などの製作を急いでいる場面をそのまま絵葉書の画像に使用した理由を説明できる。「逍遙園」全景の写真には、多くの施工具が映っており、窓のあるべきところも空洞のままである。撮影者は身内の人であるからこそ、完成を急ぐ事情をよく把握しており、記念絵葉書の製作もいうまでもなく緊迫した状況下で行われたのであろう。



「逍遙園」北面に備え付けられる
窓戸



「逍遙園」周辺の左官道具

図(37) 絵葉書から加工した。
(加藤斗規氏提供)

大食堂の絵葉書はまた新しい事実を教えてくれる。食堂の南側の隅には、1幅の巨大な美人図が竹製の腰掛けの上に置かれていた。加藤斗規氏の考察によれば、この絵は野村泉月の作品「更想」²⁷¹であったという。上海で流行った半袖チャイナドレスを着用した女性が描かれている。1939(昭和14)年台湾総督府第2回府展において特選を獲得したこの作品は、おそらくお祝品として大谷光瑞に贈られたのであろう。撮影者が記録したこの一瞬は、室内未完成のため、この絵が一時的に、出入りしやすい広々とした大食堂に置かれていた事実を示している。

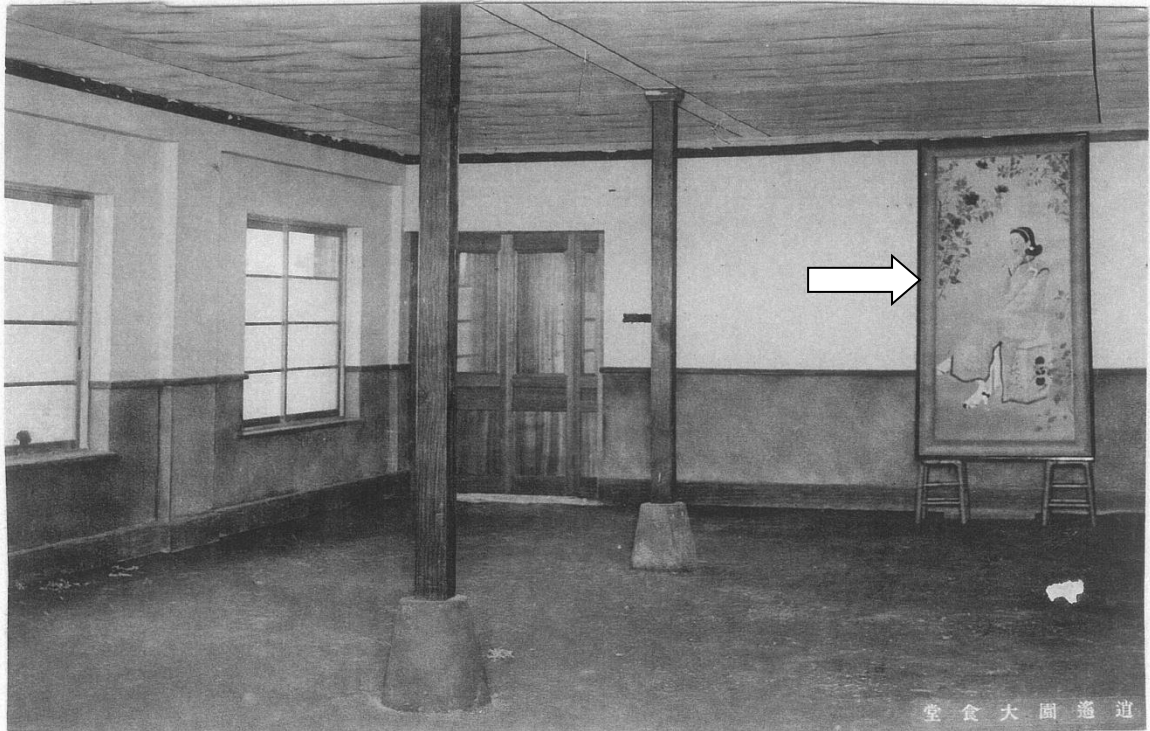


図 (38) 大食堂内一景、野村泉月の作品「更想」
(加藤斗規氏提供)

前述した大谷光瑞より惜しみなく与えられた報奨金500円と感謝状については、日付がともに11月9日と書かれている。これは、幸治郎氏が「逍遙園」開園式に参加したことを意味していると考えられる。龍蔵氏が筆者に対してこのことを証言した。²⁷²さらに、幸治郎氏は開園式後も「逍遙園」に留まっていた。報奨金を受領した後も建築工事に協力し続け、1941年10月に至って龍蔵氏の兄の従軍によって台湾から離れたという。

前述したように、田中勝治氏はかつて、幸治郎氏が1940（昭和15）年の1、2月の間に高雄に到着したと述べている。龍蔵氏の記憶では、父親は家から離れておよそ2年間、全く帰らなかったという。幸治郎氏が高雄に滞在した目的はもちろん「逍遙園」の仕事完成のためであった。とくに開園式の後、大谷光瑞と4名の女性秘書が入居し、邸内の空間が需要を満たせないことに気づき変更を行った。

例えば、女秘書たちは大谷光瑞の世話をするため、上品な床の間とタガヤサンの床柱を有する2階の和室に住むようになった。この部屋は、実は、もともと大谷光瑞が使用する予定の空間であった。²⁷³プライベート面の問題を解決するため部屋のドアのデザインが変更されたという。

また、炊事場は、すべての区域中唯一の、天井を設けていない空間であった。厨房の熱気は上方の通気口を通して排出することができるが、鉄骨構造が唐突に頭上で交差していることや、鉄柱がかまどの前等の不適切な位置に立っているなどの問題点が避けられなかった。これらの現場で起こった問題は、素人が住宅を設計する際に生じるずれを反映しており、構造と空間が適切に融合できなかったのである。

「逍遙園」本館の元の空間は開園時期の設計に基づき、内部は二角幸治郎により改修された。筆者は最新資料に沿って推定した間取りの名称の改正は次の通りである。

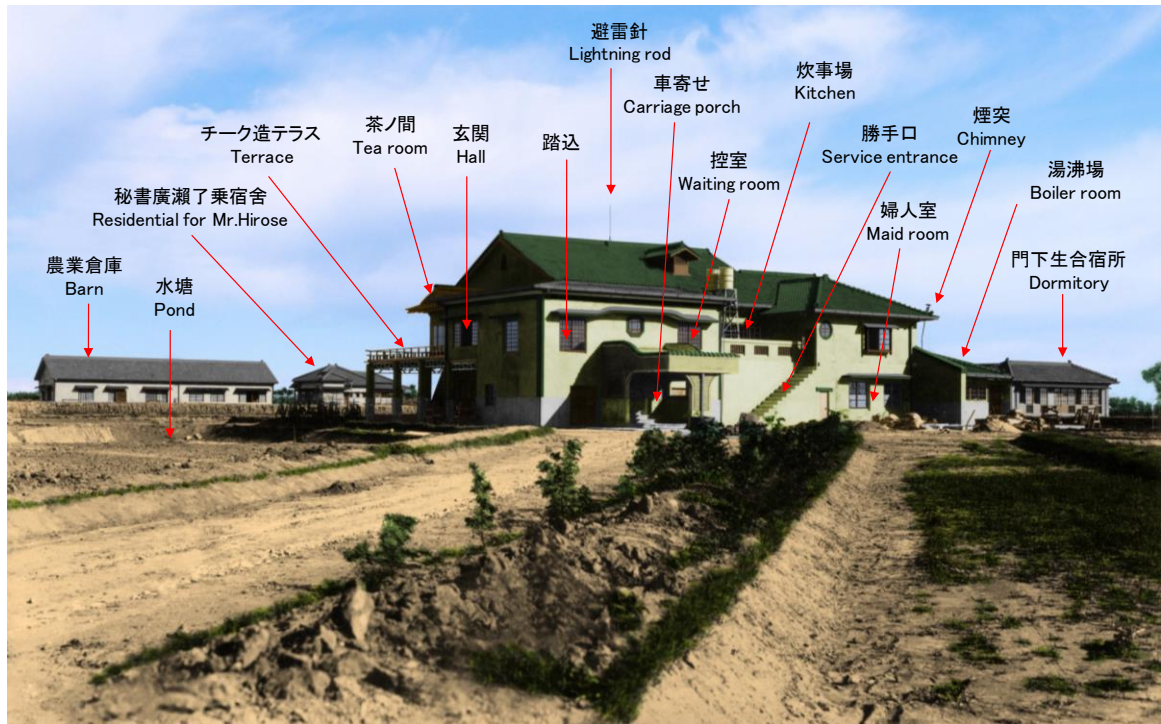


図 (39) 「逍遙園」本館の建築特徴説明 (西北角)
(二角龍蔵氏提供、筆者注記、黄乙立氏着色)

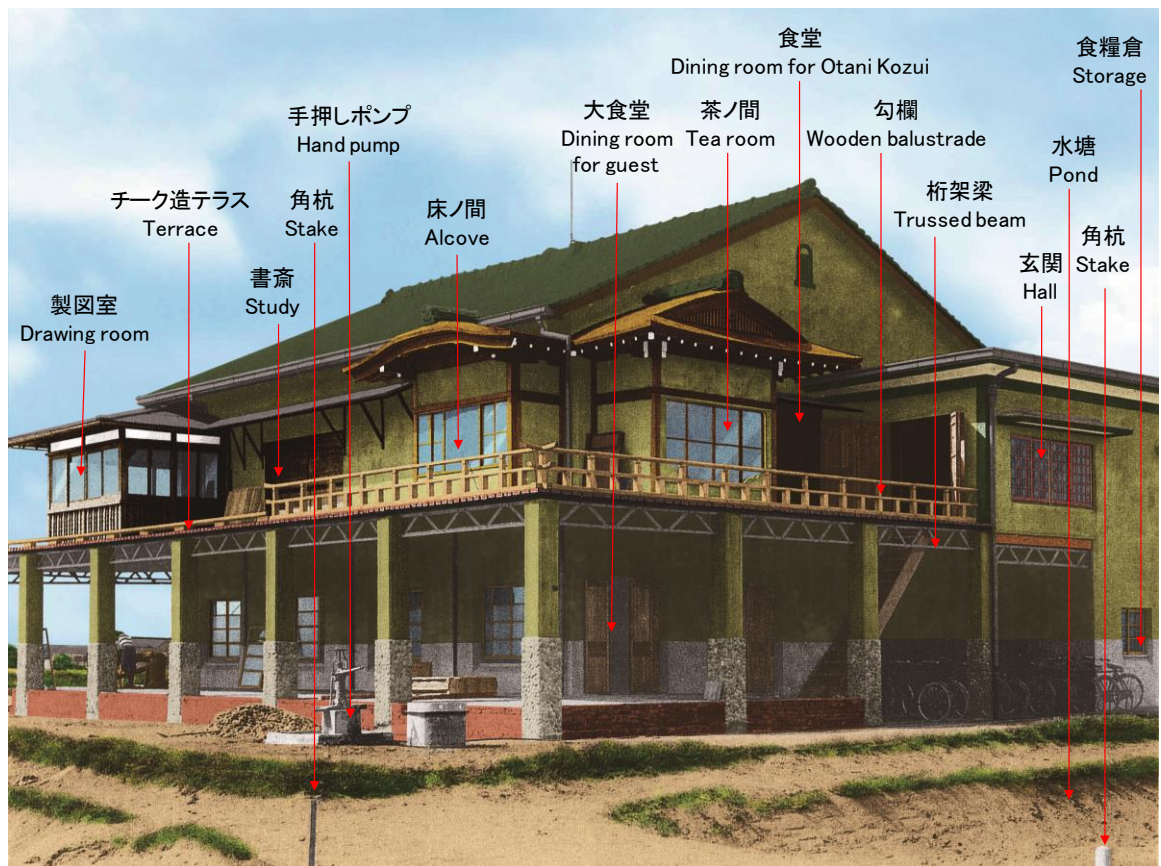


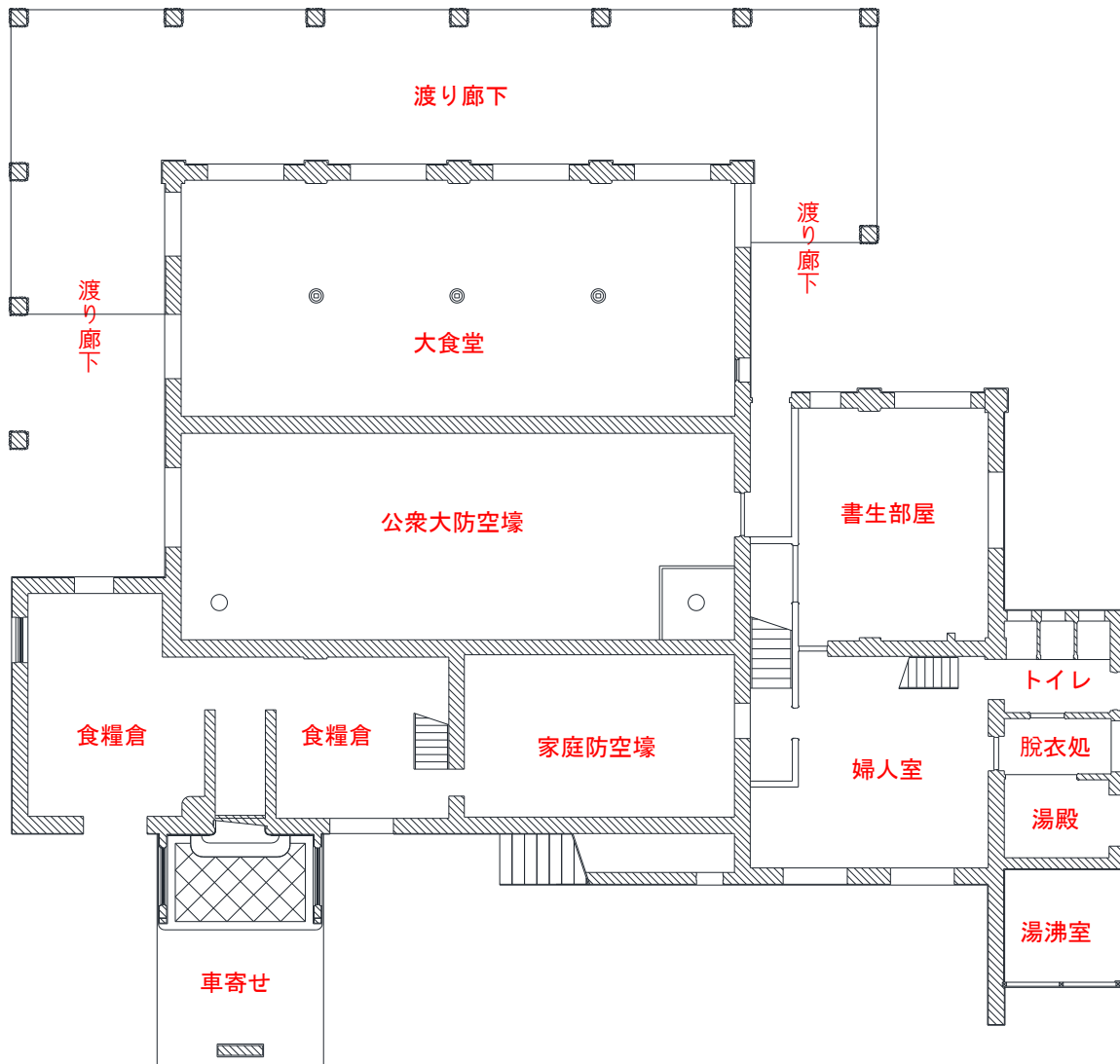
図 (40) 「逍遙園」本館の建築特徴説明 (東北角)
(加藤斗規氏提供、筆者注記、黄乙立氏着色)

表 (10) 「逍遙園」本館内部空間名称

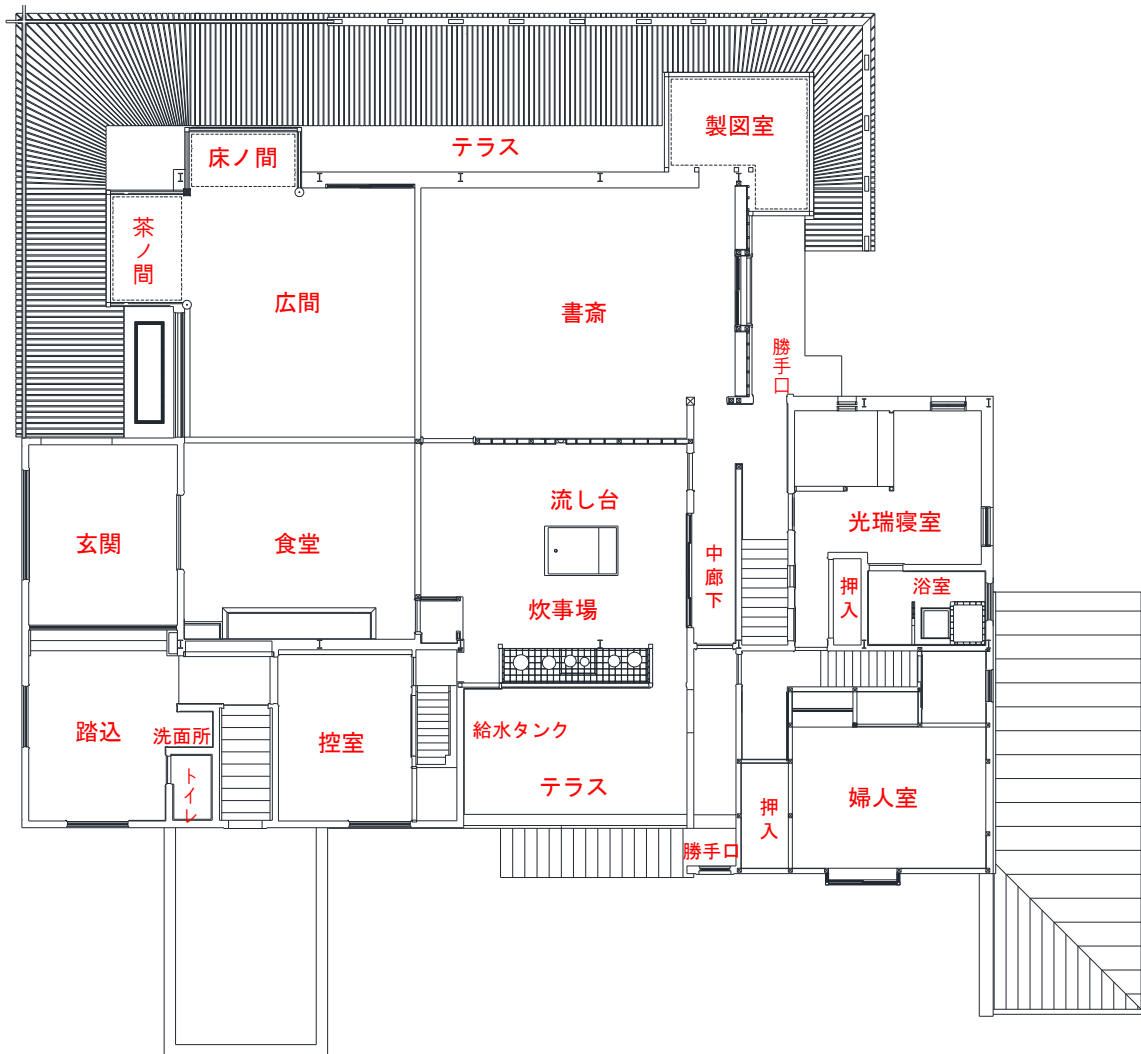
所在階	名称	考証と説明
1 階	車寄せ Carriage porch	大谷家の家紋あり。緑色系タペストリータイルと瑠璃瓦を使用。
	食糧倉 Storage	車寄せの左右にある。
	湯殿 Bath room	おそらく女性秘書の使用に供された。
	書生部屋 Student room	おそらく「大谷学生」か女性秘書に向けて提供された部屋であろう。
	大食堂 Dining room	「大谷学生」用ではなく、おそらく「逍遙園」開園式の時、賓客を招待した場所。
	公衆大防空壕 (180 人) Air raid shelter	煉瓦造り。
	家庭防空壕 (60 人) Air raid shelter	煉瓦造り。
2 階	踏込	矢形網代天井。 壁に衣装掛けフックあり。脱鞋処、手洗処、便所付 (ゲスト用)
	玄関 Hall	矢形網代天井。
	控室 Waiting room	待ち合わせ室。
	食堂 Dining room	大谷光瑞が食事する場所。
	広間 Hall	リビングルーム、大谷家の家紋がある場所。
	茶ノ間 Tea room	リビングルームに併設されたスペース、「三夜荘」移築
	床ノ間 Alcove	リビングルームに併設されたスペース、「三夜荘」移築
	書斎 Study	「三夜荘」移築。
	製図室 (書院) Drawing room	「三夜荘」移築。
	炊事場 Kitchen	食器棚のために中央廊下の天井を改造。 炊事場から食堂へ繋がる空間は、プライベート面を配慮して緩衝区域を増設。
	婦人室 Maid room	亀甲網代天井。 女性秘書 4 名の居住、およびプライベート面の配慮によってドアを改造。
	大谷光瑞寝室	中亜 (中央アジア) 様式
	浴室 Bath room	バスタブ、シャワー、トイレ付。

テラス Terrace	チーク廃船材を採用、高欄（勾欄）付
----------------	-------------------

(出典：筆者調査、昭和15年11月2日「高雄の新名所 豪華な逍遙園 大谷光瑞氏別邸」、『台湾日報』第28冊。)



図(41) 本館一階平面図
(Jérôme Lanche・筆者作成)



図(42) 本館二階平面図
(Jérôme Lanche・筆者作成)

5-5 「逍遙園」の建築特徴再探明

筆者の前作『日治晩期高雄市大谷光瑞的逍遙園之源流與建築構成』、及び2013年に書いた筆者の主要論文《高雄市歴史建築「逍遙園」調査研究與修復計画》の中には、明らかな誤りがあるので、現在新しい知見を基づいて訂正する。

(一) 「間尺」

2008年筆者が「逍遙園」を調査中、婦人室と推測する和室の中で床ノ間の上に放置された長さおよそ3メートル、断面10センチ四方の杉の角棒を発見した。当時この杉角棒には穴が開けられ、他の木造部材と組立てられ、床ノ間の結構の一部であった。それ故取り外すことは出来なかった。杉角棒の表面には墨で6.8センチの間隔で線が描かれ、線の間には本館各部屋の名が標記されていた。

筆者は大工用の「間尺」、また「尺棒」ともいわれた物と思っていたが、「間尺」は木造建築で使われるものであり、日本時代の「間尺」は常に大体3メートル或いは4メートル程の長さを記すものである。この方法は「木割法」また「尺間法」と呼ばれ、間、尺、寸、分を単位として記録するものである。

即ちこの「間尺」は「逍遙園」の専用の工具であり、部屋の名称と構件高度を乗せたものであった。例えば、「逍遙園」本館の一階は煉瓦造である。煉瓦の厚さは全て2寸(6センチ)、モルタルの厚みの0.8センチを加えて計算したものである。図(44)のように一番下の「防空床」は一階の防空壕の床の部分である。上部は大食堂の床、「木煉瓦」は大食堂の巾木の高さ、「食堂窓台」は窓の框の敷居、「食堂窓、各出入口鴨居」は窓の框の鴨居、又は「学生室木煉瓦」、「食堂木煉瓦」、「梁受、鉄筋」である。「逍遙園」の一階工事が終了後、この「間尺」は処分されずに木造二階の部材となって再利用された。



図 (43) 格子の幅は6.8センチ
(筆者撮影)

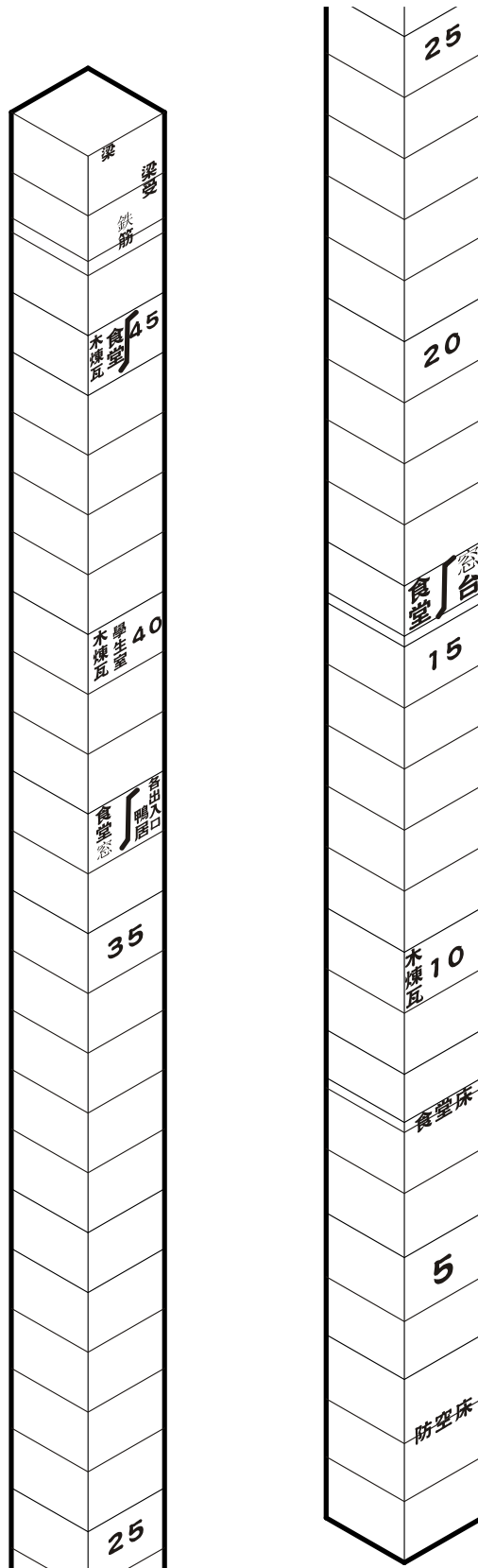


図 (44) 間尺の記録図
(筆者作成)

(二) 木造テラスの丸い穴

大谷光瑞《隨筆百則》の10則には：「不肖の高雄逍遙園を作るや、阿里山の扁柏の外、南洋群島の鐵木及チークの古材を以てす。家屋堅固にして蟲蠹の害を免れ、風に耐へ雨に立つ。之に住居するに精神も亦自から剛健の風を養ふ」とあり、また白蟻に対する22則は：「不肖の住宅はベニヒを用ひ、チークの古材（廢船材）と太平洋鐵木を用ふるを以て幸ひにその害を免る」という自慢話である。

「逍遙園」の木造テラスは北、東、南三面で、池に呼応し、素晴らしい視野である。チークの廢船材は品質もよく、白蟻に抗する効果もある。実に優れた選択であった。それにより、大谷光瑞の建築知識は豊かであり、建材の持つ性質も考慮し、当地の風土にも応えられるものであった。

テラスに使われたチーク材の断面は平均幅10センチ、厚さ4.5センチ、舗設の隙間1.5センチから4センチまでである。筆者の調査によると、この木材等は丸い穴と鉄製のボルトが多く使われていた。そのボルトは木材を船に固定する為木材を貫き通し、船の甲板を分解した残りであると推測する。田中秘書の証言によると、チーク材と鉄材は三夜荘新館から移築した。そういえばこの丸い穴は明らかに移築の証拠である。

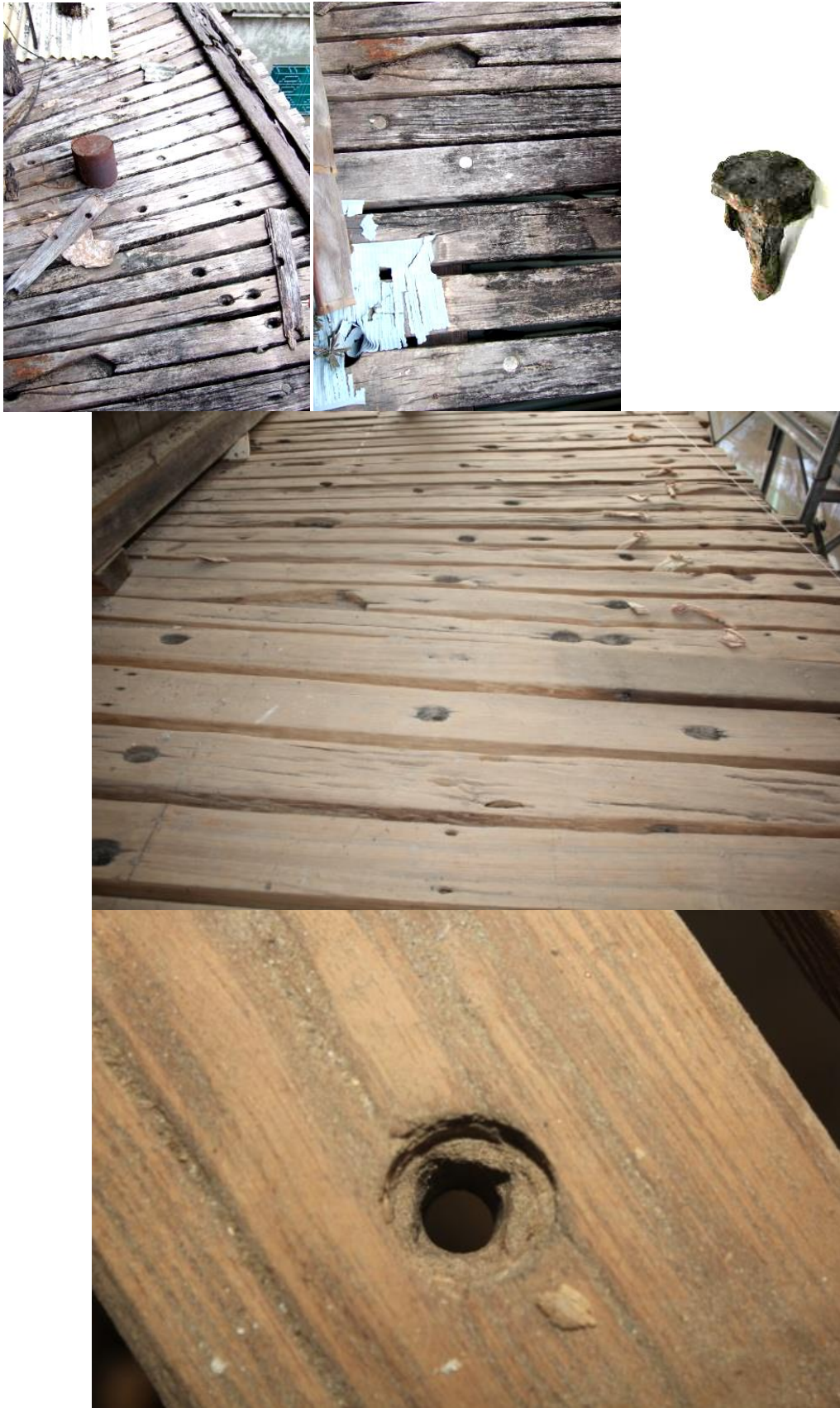


図 (45) 露台の木と丸い穴
(筆者撮影)

【注釈】

- ²⁵¹ 昭和 15 年 11 月 2 日「高雄の新名所 豪華な逍遙園 大谷光瑞氏別邸」、『台湾日報』第 28 冊、国立台湾大学図書館、財団法人高雄市文化基金会。
- ²⁵² 京都二角工務店、二角龍蔵氏提供。
- ²⁵³ 菅澤茂、「西本願寺別邸三夜荘の研究」、『台湾の日本仏教 布教・交流・近代化』、柴田幹夫編、勉誠出版、2018 年 8 月、240 ページ。
- ²⁵⁴ 2017 年 12 月 14 日、筆者が東寺洛南会館において、菅澤茂氏・王達来博士と一緒に二角龍蔵氏を訪ねた際の口述記録による。
- ²⁵⁵ 高雄市新興区地政事務所が保管している大港埔 30 番地に関する土地及び建物の登記資料による。
- ²⁵⁶ 2017 年 12 月 14 日、筆者が東寺洛南会館において、菅澤茂氏・王達来氏に同行し、二角龍蔵氏を訪ねた際の口述記録による。
- ²⁵⁷ 富沢有為男（1902～1970）大分県生まれ。名古屋の旧制東海中学から東京美術学校（現東京芸術大学）卒業。1942 年に陸軍の報道班員となり、従軍作家としてインドネシアに 1 年間赴く。その際に高雄を訪問した。
- ²⁵⁸ 大宅壯一（1900 年～ 1970）大阪府出身。茨木中学から第三高等学校を経て東京帝国大学に入学する。社会学を専攻する。1941 年海軍宣伝班としてジャワ島に赴いた。
- ²⁵⁹ 浅野晃（1901 年～1990 年）滋賀県の人。東京府立第一中学から第三高等学校を経て、東京帝国大学法学部を卒業。1942 年陸軍宣伝班の一員として、台湾高雄経由でジャワ島に赴く。戦後立正大学教授を長く務めた。
- ²⁶⁰ 加藤斗規、「大谷光瑞と台湾」、『大谷光瑞「国家の前途」を考える』、柴田幹夫編、勉誠出版、2012 年 8 月、126 ページ。
- ²⁶¹ 大谷光瑞、『随筆百則』、「第 10 則」、有光社、東京、昭和 16 年 12 月、29 ページ。
- ²⁶² 大谷光瑞、『随筆百則』、「第 22 則」、有光社、東京、昭和 16 年 12 月、65 ページ。
- ²⁶³ 日本勸業銀行档案、台湾中央研究院台湾史研究所。
- ²⁶⁴ 2017 年 12 月 14 日二角龍蔵氏に対する聞き取りより。
- ²⁶⁵ 株式会社ニカク工務店のホームページ及び二角龍蔵氏に対する訪問記録による。
- ²⁶⁶ 田中勝治、「台湾での思い出」、『大谷光瑞上人生誕百年記念文集』、昭和 53 年、瑞門会、395 ページ。
- ²⁶⁷ 田中勝治、「台湾での思い出」、『大谷光瑞上人生誕百年記念文集』、昭和 53 年、瑞門会、395 ページ。
- ²⁶⁸ 1938 年 4 月 1 日第 1 次近衛内閣によって第 73 帝国議会に提出され、制定された法律。日中戦争の長期化による総力戦の遂行のため国家のすべての人的・物的資源を政府が統制運用できる旨を規定したもの。
- ²⁶⁹ 昭和 15 年 11 月 2 日「高雄の新名所 豪華な逍遙園 大谷光瑞氏別邸」、『台湾日報』第 28 冊、国立台湾大学図書館、財団法人高雄市文化基金会。
- ²⁷⁰ 昭和 15 年 11 月 1 日「光瑞氏別邸逍遙園 開園式と講演会」、『台湾日報』第 28 冊、国立台湾大学図書館、財団法人高雄市文化基金会。
- ²⁷¹ 台湾展図録：東洋画部
http://ndweb.iis.sinica.edu.tw/twart/System/database_TE/02te_lists/te_lists_pages/t
- ²⁷² 2017 年 12 月 14 日、筆者が東寺洛南会館において、菅澤茂氏・王達来博士に同行し、二角龍蔵氏を訪ねた際の口述記録による。
- ²⁷³ 2018 年 1 月 27 日、筆者が加藤斗規氏と共同で「大谷学生」にインタビューしたとき得た証言による。

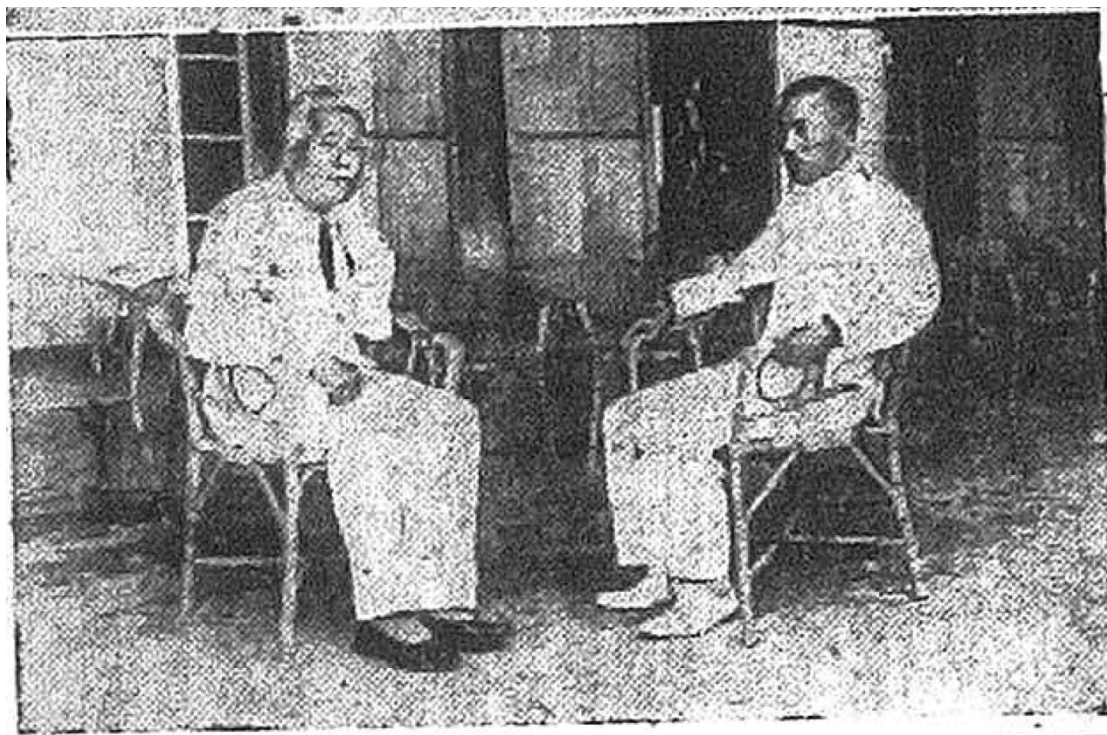
終章

本研究の第1章と第2章は、大谷光瑞の人生の後半つまり台湾で従事していた仕事を総合的に分析して、大谷光瑞による熱帯農業の開墾の過程を南洋から高雄に移ったことを明らかにした。日本統治時代における台湾の発展政策とは、「工業は日本、農業は台湾」²⁷⁴となっている。大谷光瑞は、「南進論」²⁷⁵を提唱し、南洋時代から長年に渡り経営してきた熱帯農業の知識と経験とを有する人物であった。台湾総督府の招きにより「熱帯産業調査会」に参加後、彼に対しては、内外から様々な援助があり、又本願寺の前法主という立場から後援会組織として台湾「光瑞会」が作られ、物心両面から支援を受けた。その後、大谷光瑞は「大谷学生」たちを選抜して南洋あるいは台湾各地へ学習のために派遣した。

台湾全島を踏査して『台湾島之現在』を発表した後、彼は高雄に居留することを決めた。理念から行動に移り、熱帯農莊の「逍遙園」を「産業振興」の実験基地として、台湾の産業を自給自足のできるようにするだけでなく本国日本も支援できる島にすることを目指した。彼は『台湾島之現在』の中で次のようには語っている。「台湾島は吾帝国の如意宝珠なり」と。²⁷⁶「逍遙園」の開園式に、大谷光瑞と一緒に東側のテラスに座っていた高雄市長宗藤大陸も1941年（昭和16）に次のようにいった。「高雄は日本のお臍である」²⁷⁷と。彼は、大谷光瑞と同様な意見を持ち、国の政策の中心点を次第に南に移すことを主張し、台湾が日本国版図の中心となることの重要性を説き、そして人口が既に13万余りに達している高雄市は、南進都市の特徴を備えており、広々とした腹地があるほか、良好な港湾、運河の建設もあるし、極めて良い条件に恵まれ、全面的に都市工業化を推進することもできると主張した。²⁷⁸

高雄州知事の内海忠司と台湾製糖株式会社社長の笥干城夫は、大谷光瑞の代わ

りに農園用地を取得するために奔走した人物である。彼らの手配により光瑞が希望した熱帯農園が実現できたのである。上記のことから分かるように、「熱帯産業」、「大谷光瑞の高雄観」、「敷地問題」の研究課題を通して大谷光瑞が高雄での発展と時代の背景を作り上げてきたのである。



【図 46】大谷光瑞と宗藤大陸

(出典：昭和 15 年 11 月 3 日「逍遙園の主内閣参議大谷さん 躍進高雄の市民となる」、『台湾日日新報』)

第 3 章は、大谷光瑞は、大谷農園の土地を入手後、「逍遙園」の築造の着手から「逍遙園」開園式までの過程を細かく紹介している。60 歳を過ぎた大谷光瑞が台湾で老後生活を送ることに決めた理由は「逍遙園」の建設に大きく関係するものである。彼のためにこの避寒別荘の夢を実現させたのは、森田工務所を含め、二角幸治郎、秘書「大谷学生」たちなどの面々であった。「逍遙園」での活動は、南洋の事業を継承する巨大な作業であり、光瑞が晩年力を注いだところであった。

詩人の児玉花外²⁷⁹は「南洋の島王」という詩歌を作って大谷光瑞を讃えた：「……光瑞伯、今やセレベス島を中心に。椰子、護謨、珈琲や凡ゆる有効草木、蕨勃鬱蒼の万樹木の中に生活して。宛ら南方の大樹王、その本願寺時代の紫衣も、おゝ夏、初秋の碧空、垂細垂の草木の色青く。恰も南洋の大海王、襟に金衣襴や珠輪ならで、胸間珍奇なる貝殻を飾るも、産業開拓の男児の本懐……」²⁸⁰

「南洋の島王」から「熱帯産業調査会」の委員になり、さらに高雄市民になった大谷光瑞は、台湾総督府と高雄州の信頼と支持を得て、1937年5月9日訪台時に次のように述べた。「別荘といふよりは私の台湾に於ける本宅といった方が適当だらう」²⁸¹そして次のことも語った。「高雄に家が出来たら毎年冬頃は此方で暮す、その為に今度の家は成る可く幅広く凌ぎよく都合の好いやうに府の西本君に命じ設計させた」²⁸²大谷光瑞の言葉から高雄を熱帯農業の発展基地としてみているだけではなく、長い目で見て居留することを考えていたことが分かる。昭和3年²⁸³に新築したばかりの「三夜荘」の新館まで撤去し、その資材を高雄に運び込み、尚且つ使わない不用品を売り出して資金を調達していたのである。

1935年から1940年の間、光瑞は、台湾と南洋を往来して、一步一步「大谷農園」の計画を進めていき、さらに南投埔里、高雄大港埔庄、高雄大樹庄、屏東麟洛などの土地を購入して農園を作った。さらに高雄での熱帯農業の発展を目的として「大谷学生」を募集し、ゼロから農園を開墾をし、池を作るために築山を造った。さらに毎週、学生に高雄商業学校を通わせ英語、マレー語の勉強をさせた。そして優秀な生徒を鳳山の熱帯園芸試験支所、士林園芸試験支所そして台湾総督府工業研究所の有機化学工業部などへ行かせ見習いをさせていた。²⁸⁴南洋或は台湾で大谷農園に入門した「大谷学生」たちが酷暑の南部地域で上記の訓練を受け

た理由は、彼らには特殊な使命が与えられていたからである。大谷光瑞の弟の大谷尊由²⁸⁵が台湾を訪れたときに田中勝治秘書に次のことを語った。「インドネシアのジャワ島に大谷家の農場があるから其処へ行く事になる、やがて日本が中心になって亜細亜から白人を追い出して亜細亜人の手に取り戻した時に混乱が起こるだろうから其の時、現地の人達の指導的立場に立って独立を助けるのがお前達日本青年の役目である」と。²⁸⁶

日本が南部の資源に依存していることは、1939年（昭和14）の末に、日本の本土で起きたコメ、石炭、砂糖の不足問題により、緊急的に台湾から救援物資を調達したことからわかる。その頃、高雄にいた大谷光瑞は、「北主南従」の政策に反対しており、このような空想を変えないと、アジア復興計画が成り立たないことを断言していた。光瑞は、『易経』の「霜を履みて堅氷至る」という言葉を挙げて、与野党に微小な兆候からものを知ることと、大自然運行の原則を尊重することに注意を喚起した。霜を踏んで歩くようになると、堅い氷が張る寒い季節が来ることを知らなければならない。大谷光瑞はこれを憂慮して国の重点を南部に置き、高雄港というゲートウェイを善用して台湾の熱帯産業を発展させることを訴えた。日本国内の人々に台湾南部のことを理解させるため、引き続き『台湾島之現在』と『熱帯農業』という本を著したが、相変わらず日本国内の意見は南部への発展に対し無関心であった。彼の意見は、日本の与野党から受け入れられず、情け容赦なく嘲笑されていた。²⁸⁷それ故に、やむを得ず、「逍遙園」にて詩を書いて落ち込んだ気持ちを発散し、信者に心の内をこぼしていた。「内閣参議」、「大東亜審議会」委員などを歴任していた大谷光瑞は、「逍遙園」に長期滞在して静養後、春になるとまた国のために奔走し続けた。

「逍遙園」は、大谷光瑞が台湾に残した有形遺産である一方、高雄への描写は彼の心境を語る文章であり、詩詞は、無形遺産であるともいえよう。第4章は、五言律詩である『逍遙園雜詠』をもって「逍遙園」内部の生活環境及び園内の果樹などの植木や動物を探求することにある。

大谷光瑞が残した文章には日記類がない。門下生の話によると、それは彼が抜群の記憶力を持っているためである。だから、今までの研究は日記ではなく、彼の文章や他人が書いた評論を材料に分析したものである。『逍遙園雜詠』を読解することによって、大谷光瑞の博学がわかるだけでなく、詩句に含まれる彼の感情が読み取れ、そして当時の彼の様子が目の前にあるように読者は感じられる。それは『逍遙園雜詠』の第1の価値だと思える。

そして、第2には、執筆の時間を推測すれば、当時の情勢がわかってくる。詩は一般的に花鳥風月を歌い、生活に対する思いを述べるものが多いが、大谷光瑞は君主と賢臣、役人と農夫、隠遁と出世などの題材を多く創作に取り入れている。そこに大谷光瑞の欧州戦場に対する考え、政治的立場および西欧列強に対する批判が現れている。そして、それらのことへの憂慮から彼をしばらく解放し、癒してくれる「逍遙園」の役割も見落としてはならないだろう。

第3に、園内の物事に関する記録もその価値の一つである。台湾の法定文化財において、「逍遙園」は珍しいものである。土地の購入から、区域の選定や、入居者、建築設計、建築工事、建築材料、庭園のデザイン、生活形態、食べ物の生産、水源などはすべて特徴的である。80年を経ても、我々は大谷光瑞の詩文における竹、椰子樹、ミカンの木、梅の木、稲、白菜、なす、大豆、水路、池、さらには牛、スズメ、ツバメ、白鷺などの具体的描写から、当時の園内の様子を想像する

ことができる。それも台湾人が知りたいところである。

第4の価値は生活に対する感性と詩的美である。大谷光瑞が残した文字は静的だが、韻律があるため、読むとリズムがあり、能動的な感じを人々に与えるのである。日の入りや日の出や、月の変化、遠景と近景の切り替え、天気と季節の移り変わりから、雨の音、船の汽笛の音、および蛙の声、鳥の声、雄鳥の声、犬の声等々、全体的に視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚といった五感から園内の生活を細かく描出している。分かりやすく、生き生きとした描写である。

第5に、「逍遙園」の命名を裏付ける材料としての価値がある。「逍遙園」という名前は最初に公表されたのは『大乘』昭和15年4月号の「消息」欄であった。それによれば、「逍遙園」完成の半年前、大谷光瑞はすでにその名前を決めたという。「逍遙遊」は荘子の理想的世界を表現し、『莊子』を代表する文章である。『逍遙園雑詠』の第19首は直接「逍遙遊」を取り出して、大谷光瑞の当時の心境をほめかしている。「逍遙」という言葉も大谷光瑞にとって新たな意味が帯びてくる。

「逍遙園」で過ごした2ヶ月間は、大谷光瑞が自分なりの逍遙自適を探る時間でもある。

これまで「逍遙園」は熱帯農業の事業用地や越冬用の住宅地として位置づけられてきたが、荘子の「逍遙遊」を視野に入れて考察すれば、「逍遙園」は大谷光瑞の精神的居場所、修行する場所でもあると考えられる。『逍遙園雑詠』は64歳の大谷光瑞の生活と心境を記録した貴重な文章であるといえよう。

大谷光瑞は、建築の専門家ではなかったが、「逍遙園」別邸と農園の設計を企画し、材料の活用および農園の造営において独特かつ大胆な考えを示した。異なる材料を組み合わせる際の経験不足や空間計画上の問題点が現れてはいるものの、

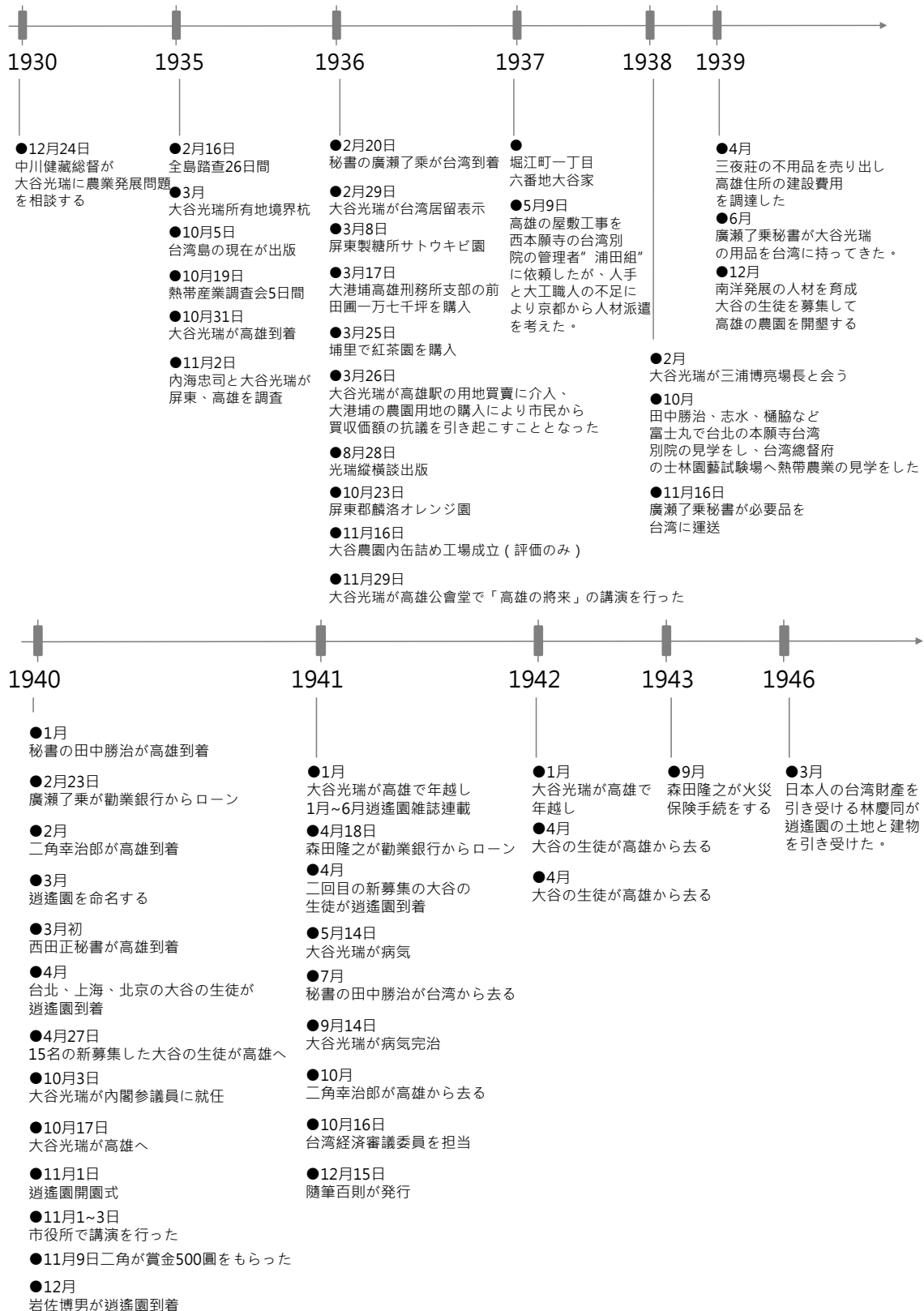
建築を地域に適合しようとする思考の軌跡は非常に明確であった。この「逍遙園」は、農業の発展を喚起するための荘園建築であった。その意義と価値は、台湾建築史上希有な存在であること、また大港埔の歴史が刻まれていること、そして地貌の初期的様相が保存されていることにある。筆者は、植物学、建築学の視野から「逍遙園」の建設経緯を考察しつつ、加えて大谷光瑞の台湾滞在に関連する研究資料を若干補足することができた。「逍遙園」別邸の復元工事は、材料、予算、当時の資料の不足などの現実的要因に制限されるため、その最初の空間的様態と工芸の価値を完全に取り戻すことはできないかもしれない。とはいえ、筆者の願うところは、本論を通して有形文化財の背後にある無形の意義を社会に認識してもらい、さらなる歴史の真実の解明に向けて小さな一歩を踏み出すことである。

「逍遙園」の独特な文化価値は、荘子の考え方を核心的事実として確立されている。筆者が注目しているのは、1940年に台湾日日新新聞紙に「近代文化の住宅」という言葉をもって形容した独特な建築風格だけでなく、その建築の過程も唯一の存在であったことである。激動の時代背景の下で、第5章に「逍遙園」の築造は下記の四つの要因に影響を受けていることを取り上げて記載している：①「三夜荘」の鉄材、木材を転用、②大谷光瑞の建築の造詣、③戦争期間における台湾の防空規則と防空訓練の推進、④大谷光瑞の経済問題である。

1936年2月、大谷光瑞は内外に台湾に定住することを宣言したが、大谷光瑞の高雄駅の用地取得問題に関して、台湾の人々からの大港埔土地の買収に対する反対運動が起きたことが報道された。²⁸⁸引き起こしたことを伝えた。台湾総督府は、戦争の備えとして防空対策を進めており、高雄要塞本部も全市に防空訓練に従い空襲対応を実施し、新築の建物には防空壕や防空室の設計を追加することを要請

していた。このため「逍遙園」の別邸という新築工事の一階の内部には二つの防空壕を作ることが必須となった。1937年5月、光瑞は台北の浦田組²⁸⁹に「逍遙園」の別荘の築造を委託したが、担当する職人が見つからなく、その上、資金問題もあったことから熱帯農荘の建築計画が3年間も滞った。仕方なく大谷光瑞は、京都から大工棟梁の二角幸治を招聘してきて、「三夜荘」の新館を撤去し、更に不用品を売って金に換えた。台湾製糖株式会社の社長もインドオウダンを別邸の（広間）の床柱として寄付した。2016年2月、老朽した「三夜荘」が解体された。²⁹⁰ 筆者は、「逍遙園」は「三夜荘」の姉妹館であると考えている。ほとんどの建築構造と共に大谷光瑞の生活形態も高雄に残されることになった。大港埔庄30番地に位置するこの特殊な混合建物は、台湾の建築史において貴重なケースとなったであろう。

本研究は、「逍遙園」は「南進論」の目的で建てられたものであること。そして戦争による資源問題、人手の不足問題が建築計画の延期をもたらしただけでなく、大谷光瑞が日本の資源を売却して高雄で資金を調達することとなり、何回も十数名の「大谷学生」を募集して高雄の開墾を行い、さらに大谷光瑞が土地を抵当にし日本の勸業銀行から借款をして建築工事の早期完工を期待していたことを明らかにした。大谷光瑞は、悪条件の下でも怯むことなく最終的に「逍遙園」を完了させた。本研究の最後には、10年間にわたる「逍遙園」の建築計画を時系列にまとめ、大谷光瑞や「逍遙園」建設に関わったなど人々の行動や遭遇を明らかにした。この研究により多くの人たちに「逍遙園」の完全な姿を提供したく思う次第である。



図（47）逍遙園計画のタイムライン
（筆者製図）


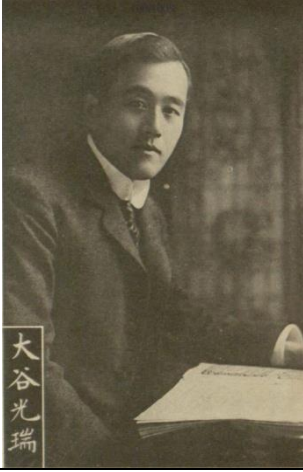
【注釈】


- ²⁷⁴ 薛化元、『「農業台湾・工業日本」一考察』、公益財団法人日本台湾交流協会、2006年。
- ²⁷⁵ 1930年前後から日本政府は、資源確保の観点から南洋を重視し、とくに南洋からの石油や資源などを確保するために、いわゆる「南進論」を積極的に推し進めていた。
- ²⁷⁶ 大谷光瑞、『台湾島の現在』、有光社、東京、昭和10年10月、3ページ。
- ²⁷⁷ 宗藤大陸、「高雄は日本の躰也」、『奉祝紀元二千六百年 躍進台湾大観続編 台湾特輯記念号』、中外毎日新聞社、東京市、昭和16年、323ページ。
- ²⁷⁸ 宗藤大陸、「高雄は日本の躰也」、『奉祝紀元二千六百年 躍進台湾大観続編 台湾特輯記念号』、中外毎日新聞社、東京市、昭和16年、323ページ。
- ²⁷⁹ 児玉花外(1874～1943)は、日本の詩人。はじめ社会主義詩を、後に愛国詩をよくし、「熱血詩人」の異名をとった。
- ²⁸⁰ 児玉花外、「南洋の島王大谷光瑞」、『拓殖新報』第84号、大正8年9月。
- ²⁸¹ 『台湾日日新報』、昭和12年5月10日、第(七)版。
- ²⁸² 小生夢坊、「光瑞の矛盾性」、『再認識の台湾』、日滿新興文化協会、昭和12年、62ページ。
- ²⁸³ 鄔如法、「光瑞猥下と私」、『大谷光瑞上人生誕百年紀念文集』、昭和53年、瑞門会、343ページ。
- ²⁸⁴ 田中勝治、「台湾での思い出」、『大谷光瑞上人生誕百年紀念文集』、昭和53年、瑞門会、395ページ。
- ²⁸⁵ 大谷尊由(1886～1939)京都生まれ。本願寺文学寮(現龍谷大学)を卒業。大谷光瑞の実弟、1937年近衛内閣の拓務大臣を務めた。後内閣参議、北支開発会社総裁などを歴任した。
- ²⁸⁶ 田中勝治、「台湾での思い出」、『大谷光瑞上人生誕百年紀念文集』、昭和53年、瑞門会、393ページ。
- ²⁸⁷ 大谷光瑞、『熱帯農業』、有光社、東京、昭和17年発行、804-811ページ。
- ²⁸⁸ 大谷氏土地買収に一部市民が反対運動「高雄駅敷地問題の^{もつ}纏れ」昭和11年3月26日、坂本悠一監修、朝日新聞社、『朝日新聞外地版・台湾版』、ゆまに書房、東京、平成22年4月。
- ²⁸⁹ 浦田組は浦田永太郎によって作られた建築請負業である。浦田永太郎(1874～?)兵庫県の人。1898年に台湾に渡る。台北請負業組合の評議員となる。代表的なものとしては、浄土真宗本派本願寺台湾別院庫裏の新建造工程がある。大園市蔵編、『台湾人物誌』、台北谷沢書店、大正5年、323ページ参照。
- ²⁹⁰ 「伏見三夜荘解体へ」、『読売新聞(大阪本社版)』平成28年2月9日夕刊。



付録 大谷光瑞と台湾、南洋の足跡

■の部分は大谷光瑞師が台湾に滞在する時期を表したものの。

□の部分は認識できない。



時間		郵船名	行先	到着	事由/動向	取材編集
大正4年 (40歳)	5月17日正午		上海	露領浦塩斯徳	浦塩斯徳(ウラジオストク)に於ける本願寺出張所起工式臨場の 大谷光瑞師 	久保三友、『大正実観』、帝国軍人教育会、大正5年、253ページ。
大正5年 (41歳)	9月				上海仏租界に借家して居住、近隣の孫文邸と往来す。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、79ページ。
	10月					大谷光瑞、『放浪漫記』、民友社、東京、大正5年。
大正6年 (42歳)	2月				南洋に渡航、ジャバ島スラバヤに蘭領インド農林工業株式会社を設立。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年。
	9月27日				南洋視察談(漢文版面) 大谷光瑞師曰。井里汶(印度尼西亜爪哇島、位於西爪哇省附近的中爪哇省邊境、雅加達以東297公里處)。於南洋諸島中。氣候最純。通計一年中。恰如本邦六月下旬。土民甚親邦人。土民居此。如無懷氏之民。大抵乏教之感念。與支那人之間。有種々葛藤。夫開拓新天地。首要自然的要素。即該地政治。土民風俗。他如經濟狀態。皆宜審察。開拓之初。農業為主。商業為從。荷屬諸島中。爪哇自三百年来。為其國力之淵源。今日人口	漢文版『台湾日日新報』大正6年9月27日、第(二)版。

					殆過於稠密。本邦労働者。絶無移入之餘地。井里汶則有之。中唯農業。最可從事。但欲發展。而乏資本。則勞多功少。不可不知。昨年更迭現總督。頗知本邦國情。待邦人極寬。且多方便。移住之人。先要信用。苟能高其品格。何至為土人所輕視哉云々。	
	11月				台湾全島視察、阿里山 石井光次郎、大谷光瑞、 下村宏 [北投無名庵に撮影]	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年。 加藤斗規提供。
	12月				腸粘膜炎と診断される。	
大正7年 (43歳)	1月3日		基隆	門司	別府・鉄輪貝島別邸で静養。	仁本正恵、「本願寺の明星」、 『大谷光瑞上人生誕百年紀念文集』、瑞門会、昭和53年、230ページ。
	3月				孫文政府最高顧問となり広東訪問。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年。
	4月				セレバスにて珈琲園を購入。	
	7月				所有船光洋丸台湾よりセレバスに向う途中難破沈没。	
	8月3日				大谷光瑞所有船光洋丸メナドへ航行中、呂宋の北東角五十哩の沖合にて台風に遇ひ顛覆す、乗組五十名中二十六名は鶴丸に救助され基隆に着せしも他の二十四名は破船さ共に今尚ほ漂流しつ、ありさ云ふ。	「海事日記」、 『台湾通信協会雑誌』、大正7年。
大正9年 (45歳)	4月				大谷光瑞と蘇峰学人夫妻 	徳富猪一郎、 『烟霞勝遊記上巻』、民友社、大正13年。

					大正九年四月奈良ホテルに於て蘇峰学人大病後の初旅行中	
	7月				ジャワに農園を購入。日華事変前まで経営す。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年。
大正11年(47歳)	1月				上海「無憂園」完成、月刊誌『大乘』を創刊。	
大正13年(49歳)	10月6日				大谷光瑞替岡部庸三郎『熱帯衛生』一書写序言。	岡部庸三郎、『熱帯衛生』、聚英閣、東京市、大正14年。
昭和4年(54歳)	4月				上海に於ける關焯之、王一亭、狄楚青。 	『大乘』昭和12年5月号。
	6月				孫文国葬に国賓として招待さる。(代理として小笠原彰真参加)	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年。
昭和5年(55歳)	6月				「光瑞会」を設立。	
	12月	香港	基隆		香港に向かい、基隆に寄港、農事試験場視察。	
	12月19日				大谷光瑞師 廿二日来台 一泊して香港へ	『台湾日日新報』昭和5年12月19日、第七(七)版。
	12月24日				美しい秘書を連れて 大谷光瑞氏來台す 例に依り豪放磊落な態度で 記者を前に怪氣焰 総督(中川健蔵、左二)を訪問した大谷光瑞氏(右) 	『台湾日日新報』昭和5年12月24日、第二(二)版。



昭和6年(56歳)	2月				  三夜荘にある大谷師の書齋	大谷光瑞、『世間非世間』、実業之日本社、東京、昭和6年。
	5月				上海別院竣工。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年。
	6月6日				 「三夜荘」園内の香桜観賞  「三夜荘」で温室栽培観賞	大谷光瑞、『花』、大乘社、東京、昭和6年。
昭和7年(57歳)	1月				上海事変勃発、別院に砲弾数発落下。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年。

						大谷光瑞、『無題録』、大乘社、東京、昭和7年。
	11月					
昭和8年(58歳)	11月				大連光瑞会発会式に臨み大連にて越年。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年。
					 台湾高雄寿山館に於て。	九州別府大谷記念館で撮影原田和布氏提供。
昭和9年(59歳)	12月				 台湾台北本願寺別院にて。	九州別府大谷記念館で撮影皆山なか氏提供
					『大谷光瑞全集』を大乘社より刊行を初む。是年三夜荘を中心として大連・ジャヴァ・台湾等各地に赴く。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、110ページ。
昭和10年(60歳)	2月16日	高千穂丸			大谷光瑞氏が十六日に来台 真宗本願寺派前法主大谷光瑞師は今回児玉拓務大臣の斡旋により本島視察のため本月十六日著の高千穂丸にて渡台さることになった、滞在中の日程は未だ確定してゐないが、大略次の如くなるであらう。 台北 二、三泊 台南 一泊 高雄 二泊 恒春 二泊 台北(帰路) 二、三泊 尚、台北では鉄道ホテル宿泊の予定。	『台湾日日新報』昭和10年2月9日、第(七)版。 大谷光瑞、『台湾島之現在』、有光社、東京、昭和10年10月。

				 <p>大谷光瑞台湾総督府殖産局に於いて殖産局の官吏との集合写真</p>	
2月22日				<p>台湾光瑞会 組織するに決る 同会で光瑞氏が講演</p> <p>西本願寺に於ける大谷光瑞氏の歓迎会は20日午後7時から開催、中瀬殖産局長、野口知事、松岡市尹はじめ信徒三百餘名出席したが席上台湾光瑞会組織の提唱あり口場一致の賛成あつたので口和藤次郎氏を委員長に参会者全部を發起人にして組織することになつた、來台以来揮毫と講演は絶対にせぬ光瑞氏も自分の会であるからとて同会は3月帰北中に開催の予定である希望者は予め本願寺宛申込みたいと。</p>	『台湾日日新報』昭和10年2月22日、第(二)版
2月21日				<p>台北発、南部方面及び東海岸全島の視察に向ふ（これより先、産業視察のため渡台、爾来台北市各方面を視察す）。</p>  <p>台湾島踏破中の大谷光瑞殿下</p>	<p>大谷光瑞、『大谷光瑞全集第9巻』、有光社、東京、昭和11年。</p> <p>『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、111ページ。</p>
3月1日			台北に帰着す。		
3月2日			板橋無線電信局及び植物園を視察す。		
3月3日			台北発、再び南下、日月潭に至る。		
3月5日			帰北、草山に泊す。		
3月6日			総督に対して台湾産業に関する意見書を執筆す、また士林の産業を視察す。		
3月7日			中央研究所農業部、台北帝大農学部等に赴く、また軍司令部にて講演す。		
3月8日	朝日丸	基隆	台北別院で「光瑞会」の主催により「台湾の経済価値」を講演す。		
3月12日			神戸	神戸入港、三夜荘に帰る。	
4月19日				「三夜荘」書齋で『台湾島之現在』執筆中の光瑞師（昭和10年4月	



						
				19日)		
	9月27日					大谷光瑞、『台湾島之現在』、有光社、東京、昭和10年10月。
					築地本願寺の居室	
	10月				『台湾島之現在』を大乘社より刊行す。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、111ページ。
	10月16日				大谷光瑞殿下には随員六名と共に御来台相成り、当別院に御宿泊。同十九日、更に随員二名来着。同日より熱帯産業調査会に御出席。同二十五日より南部方面御視察あつて翌月九日に御歸院相成り、九日十日の両晩、総督以下を御招宴。同十日午前十時より光瑞会員の為めに庫裡裏庭にて御講演遊ばされ、同十一日より中部方面を御視察の上、同十四日に御離台。	「一筆啓上」、『一味第15巻17号』、一味、昭和10年12月10日。
	10月19~23日				熱帯産業調査会。	『大乘』昭和11年1月号。



					
11月8日				<p> 人事 來台視察中之伯爵大谷光瑞師。一行四名。訂本八日午後一時半。由台南到員林由台中州口山技師。導往永靖庄視察柑橘園。</p>	『台湾日日新報』昭和10年11月8日、第(四)版
11月10日			台北	<p>光瑞氏が野天講演 台湾光瑞会主催の大谷光瑞氏の講演会は十日午前十時ら西本願寺別院にて行はれた、中瀬殖産局長、中辻喜次郎氏其他会員約三百名、光瑞氏は大乘仏教に於ける信仰問題の哲学口根口を闡明せる「仏説不増不減経」を約二時間に互つて解説口大の口口を興へた。</p> 	『台湾日日新報』昭和10年11月11日、第(七)A版
11月10日				<p>天然茶を利用して 茶業の発展を圖れ 之ガ山地開發に最も有效 中南部視察の大谷光瑞氏談</p>	『台湾日日新報』昭和10年11月10日、第(二)A版
11月14日				<p> 大溪 光瑞伯来 大谷光瑞伯。月十一日。攬勝来溪。有新竹州下茂産業主事及中田郡庶務課長。出為東道覽賞公園及各名勝。後乗台車視察角板山三井製茶工場。受大島所長餐與茶菓。及説明該工場経営狀況。至午後三時頃下山上北云。</p>	『台湾日日新報』昭和10年11月14日、第(四)A版
11月18日			神戸	かねて台湾産業視察のため渡台中の処、各方面の視察を了し、是日神戸入港、三夜荘に帰る。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年111-112ページ。
12月3日				大阪津村別院において大阪「光寿会」の主催にて「台湾の現状」を講演す。	
12月28日				東京へ。	
12月29日	横浜丸	横浜	南洋	横浜出航横浜丸にて南洋諸島視察のため発途す。是月『大谷光瑞全集』全13巻の刊行を了る。	

昭和 11年 (61 歳)	2月5日				 パラオ産業試験場ニ於テ。	『大乘』昭和 11年4月号。
	2月11日				 南洋庁長官邸（両側、林長官夫妻）。	
	2月20日				<p>大谷光瑞氏が今年高雄に移住柑橘園の経営と山茶の製造にいよいよ本腰に着手</p> <p>大谷光瑞氏は屏東郡長興庄麟洛に柑橘園経営と中央山脈の山茶より紅茶製造の為め本年中に高雄に移住する模様である、柑橘園の予定地十一甲歩は既に登記も完了し又大武山腹に発生の子茶も新芽が出始めたので同氏の南洋方面の事業擔任者たる廣瀨氏は二十日入港蓬萊丸にて来台し所定計画に基いて本格的に柑橘園経営と紅茶の試験に着手することとなつたが山茶の方は本島斯業の劃期的試みとして又山地開發上將又蕃人授産上大いにその成果は期待されてゐる。</p>	『台湾日日新報』昭和11年2月20日、第(五)版
	2月21日				<p>「その日その日」</p> <p>大谷光瑞師が台湾に注目し出した事は注目に値する、大谷師を引き付けた台湾其ものも亦注目もの。</p> <p>廣瀨了乘氏 大谷光瑞氏の事業着手準備の為二十日来台（鉄道ホテル）。</p>	『台湾日日新報』昭和11年2月21日、第(一)A版
	2月23日		南洋	横浜	南洋諸島の視察を了え、パラオ島より是日横浜に入港し、三夜荘に帰る。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年111-112ページ。
	2月25日	朝日丸	門司	台湾	台湾に出航す。	朝日新聞社、 『朝日新聞：外地版1巻(台湾版1935-1936
	2月26日				熱帯産業研究に大谷光瑞氏渡台す	

				さきに南洋視察を終へて歸つたばかりの大谷光瑞氏は席の温まる間もなくこんどは台湾の茶葉視察ならびに氏自慢の熱帯産業研究のため二十五日正午門司出航の朝日丸で台湾へ向つた、春の彼岸すぎに歸來の予定である。	年)』、ゆまに書房、東京、平成19年5月。
2月29日				その日その日 大谷光瑞師の台湾永住説は、冬季だけの居住、謂はば避寒の程度。	『台湾日日新報』昭和11年2月29日、第一版
3月2日				人事 大谷光瑞氏 二日午後四時二十四分屏東より来高寿山館泊。	『台湾日日新報』昭和11年3月4日、第五版A版
3月8日				台湾屏東の砂糖園。 	『大乘』昭和11年5月号
3月9日				臺灣の産業は 平均三十點 大谷光瑞氏の産業縦横談	『台湾日日新報』昭和11年3月9日、第五版A版
3月12日				大谷光瑞氏の祕書を七年も勤めたミス上海 敬虔と清純そのもののやうな 井上武子さんを寿山館に訪ふ	『台湾日日新報』昭和11年3月12日、第七版A版
3月19日				大谷氏欲常住台湾 建屋高雄買入土地 (漢文版面) 大谷光瑞氏為在高雄州下栽培山茶及興各種事業、決定常住高雄。襄託内海知事選定敷地、經大谷氏実地調査、決定于市内大港高雄刑務支所前、田一萬七千坪。去十七日、集業主十一名、于三塊厝派出所、由伊藤地方課長交渉実收、每坪價格二圓。得業主承諾、蓋印完了者九名。其餘三名、不久可得承諾。據聞大谷氏新築家屋于同地以外、欲栽培各種蔬菜輸出滿州方面、又欲住高雄時期為十一月至翌年三月云。	漢文版『台湾日日新報』昭和11年3月19日、第十二版A版
				光瑞氏の農園候補地	『台湾日日新

				<p>買収交渉が成立 満洲向けの蔬菜を栽培 【高雄電話】</p> <p>高雄州下に於て山茶栽培を始め各種事業を起すべく高雄市内に居住することに決定した大谷光瑞氏は住宅敷地選定方を内海知事に依嘱してゐたが州当局にて選定した数ヶ所の候補地を過般大谷氏来高滞在中実地視察をなした結果市内大港高雄刑務支所前の水田一萬七千坪を買収することに決定したので十七日伊藤地方課長は三塊厝派出所関係地主十一名を招致し買収交渉をなしたが地主側も好意的に快口し坪当り平均二圓にて九名との契約調印を残り残る三名も大体異議なく数日中に調印に至る模様にて仄聞するに大谷氏は同地に住宅を新築する外蔬菜園を設け満洲方面に輸出すべき各種蔬菜を栽培し毎年冬期即ち十一月より翌年三月頃迄半ヶ年を高雄に居住する予定であると。</p>	報』昭和 11 年 3 月 19 日、第 (二) 版
3 月 20 日	吉野丸	台湾	神戸	三夜荘に入る。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和 29 年、112 ページ。
3 月 25 日				<p>埔里待附近 栽茶適地 拂下数十甲 (漢文版面)</p> <p>台中州新高郡魚池。及能高郡埔里街方面。為茶栽培適地。而魚池方面。業經中研。以三箇年計畫。著手開墾七十甲。而此次大谷光瑞氏。于埔里街米坑派出所前高地。受拂下数十甲。將為栽培經營。為是大谷氏支配人廣瀨了乘氏。府坂井屬。竝州井出上。土地係長等。同赴現場実査。以該地方最合適于茶園。而樹立将来大計畫云。</p>	漢文版『台湾日日新報』昭和 11 年 3 月 25 日、第 (八) A 版。
3 月 26 日				<p>大谷氏土地買収に 一部市民が反対運動 高雄駅敷地問題の纏れ</p> <p>高雄駅敷地買収問題に關聯してその間に大谷光瑞氏が介在して何らかの画策を行つたといふので一部地方民が激昂し反対運動を起さんとしてゐる折柄二十五日基隆出帆の商船大和丸で上京する内海高雄州知事はこれが、同</p>	朝日新聞社、 『朝日新聞：外地版 24 卷 (台湾版 1940 年)』、ゆまに書房、東京、平成 21 年 4 月。

				<p>氏を鉄道ホテルに訪へば。 今度の内地行は高雄市を将来工業都市として発展せしめんがために都市計画を実施せんとしてゐるので内地の實際を視察してこれが万全を計らんとするのが目的である、最近高雄駅の敷地買収と大谷氏の農事試験場の敷地買収との間に何か醜関係でもあるかのやうに伝えられてゐるやうだが駅の敷地にしてもして大谷氏の買収土地にしても決時価よりも安く買収したものではなく相当の値段であつた、大谷氏の土地買収に対しては我々は同氏の事業は高雄市発展のため是非実現せしめんと考へ従つて土地の所有者が法外の買収価格を要求しないやうに適当な斡旋をしたまで、今後かゝる口業に対してはどし斡旋の勞をとる考へである。 と語つた。</p>	
4月					<p>大谷光瑞、『大谷光瑞全集第2巻』、有光社、東京、昭和11年。</p>
4月					<p>大谷光瑞、『大谷光瑞全集第3巻』、有光社、東京、昭和11年。</p>
4月29日				<p>三夜荘において光寿会園遊会を催す。</p>	<p>『大乘』昭和11年6月号。</p>


				 <p>三光荘に於ける農園會進會 (昭和十一年四月廿九日)</p>	
7月28日			<p>南方漁場の開発に 大谷光瑞氏乗出す 使用船は竣功次第高雄に廻航</p> <p>南方国策に順応し帝国の南方発展に挺身すべく高雄を中心に果樹園紅茶製造等各種事業を企図してゐる大谷光瑞氏は先設南洋各地の産業を詳細に視察した結果に基き南洋漁場の鮪、鯉漁業の最も有望なる事に著眼し同漁場開拓の計画を進めてゐたが偶々農林省水産局の高島技師が新し考案せる流線型の相洋丸が素晴らしい好成績をあげたのを見て同型漁船を建造すべく島田農相に斡旋方を依頼し目下建造中にて竣功の 暁 には直ちに高雄に廻航して無限の宝庫南洋漁場を目指して活躍すると。</p>	『台湾日日新報』昭和11年7月28日、第(九)版。	
9月1日			<p>『光瑞縦横談』を実業之日本社より刊行す。</p>  <p>大谷光瑞氏 一にて三夜三山荘に於て</p> <p>伏見三夜荘新館御書齋の前にて。</p>	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、113ページ。 大谷光瑞、『光瑞縦横談』、実業之日本社、昭和16年。	
10月23日			<p>屏東郡麟洛の農園で 果実類を試作 大谷光瑞氏愈よ著手か</p> <p>高雄州下に於ける大谷光瑞氏の農園経営計画は州下農産業に新</p>	『台湾日日新報』昭和11年10月23日、第(九)A版。	

				生面を開くものとして多大の期待をかけられてゐるが、同氏は近日中に来高し愈々農園経営に著手する事となり之に先立ち今春四月農園敷地として買収した高雄大港埔に屏東郡麟洛の二ヶ所の内麟洛の約十甲歩の地上物整理をなすべく価格査定方を州当局に依頼し来つたので目下勸業課にて調査中であるが同農園にはレモン等果樹の大々的試作をなすものと見られてゐる。	
10月27日				大谷光瑞氏 神戸発渡台の途に 【神戸二十六日日本社特電】 大谷光瑞氏は蓬萊丸にて渡台の途に就いた同氏は語る。 総督府め長官局長等の更迭で種種し度い事もあるので其挨拶を兼今一つは高雄に新築の家の入札だ設計書を持つてゐるが鉄筋コンクリートの永久的のものにする心算だセメントが何程で鉄材がいくらと皆知つてゐるので請負もにはならんだらう、それと台湾に特有の自生茶がものになるかどうか埔里や武界に入る心算で廣瀬君を連れて行くのも之が為めだ今度は十二月頃まで台湾に滞在する心算である。	『台湾日日新報』昭和11年10月27日、第(十一)版。
10月29日				蓬萊丸より (来航)昨夜門司発以来絶好の秋日和暖か、29日午後零時半基隆港外着予定、大谷光瑞、廣瀬秘書、島田文教局長、谷本高校校長、小野工兵大佐、迫田主計正、谷井海軍少佐、木原帝大教授、大平弓道士、池田台湾製麻軍役、加藤三井物産社員、曾根秀之介、小川国際運輸社員、一同元氣(28日着無電)	『台湾日日新報』昭和11年10月27日、第(七)版。
10月30日				大谷光瑞氏談 台拓漸く出来上つた台湾の今迄の主なる産業と云へば糖業であつて一般的なものもやつてはゐるが今度台拓が生れた以上自分も事業もやり又指導的立場に立つ事出来る南支南洋の発展は余力のあつた時にやればよい私自身としては島内産業を組織的に開発し産額を2倍3倍にする事を考へてひたい、大きな団体が範を垂れ又は機関車ともなつ	『台湾日日新報』昭和11年10月30日、第(十一)A版。

				て小さなものを引張つて行く事も必要である、幸ひ官有財産の現物出資があるから直ちに仕事は出来る何れ適当な重役が決まり事業に掛れるだらうが加藤氏とは 20 数年来懇意であり久宗氏、日下氏等皆知つてゐるから私の意見。	
10月31日				大谷光瑞氏を総督が招待 30日午後6時半から総督官邸に於て総督主催のもとに来台中の大谷光瑞氏の招宴が開催され各部署長、台北州知事の諸氏が陪席した。	『台湾日日新報』昭和11年10月31日、第(二)版。
11月2日				畑軍司令官 大谷氏招待 畑軍司令官は目下来台中の大谷光瑞氏を2日夜6時軍司令官官邸に招待の筈。	『台湾日日新報』昭和11年11月2日、第(二)版。
11月3日				光瑞氏の主唱で 古陶磁の陳列展 三日、西本願寺別院で	『台湾日日新報』昭和11年11月3日、第(二)A版。
11月16日				大谷農園内に鐘詰工場設置か 高雄市近郊に熱帯果菜農園を經營する事となつ大谷光瑞氏は更に果菜の加工を企図し先設来食料品缶詰工業口權威者たる北海道日本食品製造合資会社代表社員戸部信氏に依頼し調査中である口同氏は本邦に於けるオートミル缶詰製造の創始者として著名で同氏の調査の結果によつては右農園内鐘詰工場を設置する計画である。	『台湾日日新報』昭和11年11月16日、第(五)版。
11月19日				大谷光瑞氏 東部を視察 【花蓮港電話】 来台中の大谷光瑞氏は来る21日台出發、同日夕口来花、22日花蓮港附近視察、一泊の上23日台東に向ひ24、5両日知本泊東部視察を行ふと。	『台湾日日新報』昭和11年11月19日、第(五)版。
11月26日		神戸	台湾	台湾に赴く。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、113ページ。
11月27日				大谷光瑞氏 臺東地方を視察	『台湾日日新報』昭和11年11月28日、第(五)A版。

	11月29日			高雄	高雄光瑞会 二十九日第一回講演会 大谷光瑞氏は高雄市に住居を定め茶園、果菜園その他各種事業の経営を策し台湾産業の開発指導に当る事になつたが今回同氏の□博豪邁なる□見により啓発を受けんとする同志相□り高雄光瑞会を組織して時々同氏の任□講演、座談等を乞ふ事となり目下会員募集中であるが来る二十九日午前九時より公会堂に於て「高雄の将来」なる講題下に第一回講演会を開催すると。	『台湾日日新報』昭和11年11月25日、第(二)A版。
	12月3日				大谷光瑞氏が講演 台湾光瑞会ではさきに大谷光瑞氏の「台湾の経済価値」「仏説不増不減経」と2回にわたる講演会を催して会員に多大の感銘をあたへたが、第3回として3日午前7時半から一時間西本願寺台湾別院で「支那古陶瓷」との演題の下に光瑞氏の講演会を開催する。	『台湾日日新報』昭和11年12月3日、第(二)A版。
	12月初旬		台湾	神戸	台湾より三夜荘帰る。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、113ページ。
昭和12年(62歳)	1月17日	朝日丸	神戸	台湾	台湾に向ふ。	『台湾日日新報』昭和12年2月3日、第(二)A版。
	2月3日				大谷光瑞氏 3日午後4時27分高雄着。	『台湾日日新報』昭和12年2月3日、第(二)A版。
	2月5日				大谷光瑞氏がカカオを寄贈 台東試験場で育成 【台東4月発】 大谷光瑞氏は□に東部地方視察の際特に台東庁下の熱帯産業について熱心に視察したが、同氏は今回の来台に当り□南洋より持参したカカオの実30荷(約800箇)を4日台東庁に寄贈して来たので庁当局では同氏のこの厚意を謝し直ちに之を東部農業試験場に委託し育成する事になつた。	『台湾日日新報』昭和12年2月5日、第(七)版。
	2月17日	高千穂丸	台湾		大谷光瑞氏 17日高千穂丸にて内地へ。	『台湾日日新報』昭和12年2月18日、第(二)A版。
	2月21日	高千穂丸		神戸	三夜荘に入る。	『大乘』昭和12年2月号、131ページ。 『鏡如上人年


	3月1日				大阪光瑞会クラブ発会式予定。	譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、114ページ。
	3月7日				三夜荘にて大阪光瑞会クラブ発会式を挙ぐ。	
	3月22日	秩父丸	神戸	上海	支那情勢調査	
	5月6日	吉野丸		台湾	台湾視察。	『台湾日日新報』昭和12年5月10日、第(七)版。
	5月9日				吉野丸入港 大谷光瑞氏が来台 午後一時半基隆に入港、知名者は大谷光瑞と美しい女秘書漆原まさ子さん。大谷氏は語る 高雄に造る別荘のことでやって来たのだが何しろ法主の□□があつてなか……出られずちよつと隙を見て大急ぎでやって来たのだから十六日の船で帰る、建築のことは台北浦田組にまかせてあるが台湾では人手が足らずそれにいい大工や職人がゐないのでなか……□らず今度よく調べてから京都らでも伴れて来ようと思つてゐる、別荘といふよりは私の台湾に於ける本宅といった方が適當だらう、台北西本願寺の問題はちよつと聞いたがその理由の中に私の名があげられてゐるなんて大きな間違ひだ、第一私は寺とは無關係なのだからそんなことをいはれる□がない、流言蜚語だよ、一つ二見警務局長に話して調べてもらはうかな、呵々。	
	5月19日				帰洛す。	
	5月				猥下は3月22日 郵船秩父丸で神戸発、上海に渡られた。その後の支那情勢を調査の上、4月5日、神戸お着。5月初め台湾へ旅立たるゝまでは、三夜荘に御滞在の予定。	『大乘』昭和12年5月号、108ページ。
	7月8日				支那事変	名越二荒之助・草開省三編集、『台湾と日本・交流秘話』、展転社、1996年、344ページ。
	7月12日		横浜	南洋	委任統治南洋へ赴く。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人

					七回忌法要事務所、昭和29年、114ページ。
8月6日		南洋	横浜	帰国。	
11月10日				大谷光瑞氏 15日の富士丸で来台約一ヶ月滞在の予定。	『台湾日日新報』昭和12年11月10日、第(五)版。
11月12日	富士丸	神戸	台湾	台湾に向ふ。是月『支那の将来と我帝国の使命』を有光社より刊行す。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、115ページ。
11月21日				光瑞會を公会堂に開く 【高雄電話】 高雄光瑞会では大谷光瑞氏の来高を機に21日午前10時より公会堂に於て光瑞会を開催、内海知事を始め会員多数出席し大谷氏の「現下の支那情勢」と題す講演あり同11時半盛況口に散会した。	『台湾日日新報』昭和12年11月22日、第(五)版。
11月24日				大谷光瑞氏臺北へ 【台南電話】 南部地方視察中の大谷光瑞氏は24日午前9時20分着列車にて高雄より来南、糖業試験所、台南農事試験場外市内各所を視察後午後11時28分発列車にて台北に向つた。  <small>(右端部) 大谷光瑞氏 左端部 台南農事試験場長</small>	『大乘』昭和13年4月号。 『台湾日日新報』昭和12年11月25日、第(七)版。
11月27日				台湾光瑞会 大谷光瑞氏の来台を機とし27日午前8時から新起町西本願寺別院にて第四回台湾光瑞会を開催する由大谷光瑞氏の演題は「現下の	『台湾日日新報』昭和12年11月26日、第(二)版。


					支那事情」である。	
	12月1日	高砂丸	台湾	神戸	帰国。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、115ページ。
	12月				西本願寺錦華寮、東面全景。 	『大乘』昭和13年1月号
	12月21日				高雄光瑞会 二十一日午前十時より公会堂に於て高雄光瑞会員に対し、大谷光瑞氏の支那問題に対する大講演あり、堂々一時間半意味深長にして会員に多大の感銘を與へたり。	支部通信『台湾刑務月報』、台湾刑務協会、昭和13年。
昭和13年 (63歳)	2月2日		上海	台湾	台湾に赴く。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、116ページ。
					大谷光瑞氏 2日午後5時27分着列車にて来高(高雄電話)。	『台湾日日新報』昭和13年2月3日、第(五)A版。
	2月17日	高砂丸	台湾	神戸		『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、116ページ。
	4月1日				国家総動員法。	名越二荒之助・草開省三編集、『台湾と日本・交流秘話』、展転社、平成8年、344ページ。
	5月12日	鹿島丸	神戸	上海	三夜荘に引続き御滞留中であつた猊下は、5月12日、神戸出帆の郵船鹿島丸で上海に向はれた。次いで台湾へも赴かるゝ由。今後は「日本へ一寸立寄る」と云つた程度で、中支方面に本拠を決められ	『大乘』昭和13年6月号、43ページ。

				ると。	
6月15日		上海	台湾	上海に御滞在中の光瑞猯下は、6月15日同地を出発、台湾に向はれた。本月中は同地に留り、7月上旬御帰洛の由。 三夜荘に御守居の廣瀬了乗氏は、15日夜京都発急抛台湾の猯下の許へ立たれた。猯下より一足先に帰洛さるゝ由。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、116ページ。 『大乘』昭和13年7月号、97ページ。
7月				印刷所移転の為に『大乘』の発行が遅れた。御諒察を乞ふ。	『大乘』昭和13年7月号、118ページ。
8月				大谷光瑞師御題字。 	牧野宗十郎、 『熱帯植物産業写真集』、開成館、東京、昭和14年。
10月18日	大和丸	神戸	台湾	台湾へ行き、高雄に滞在し、台北へ移動す。 三夜荘に留守だった廣瀬了乗は、11月16日に必要な品物を台湾に運ばれ、12月中旬に3泊所に戻る予定だ。	『大乘』昭和13年12月号、69ページ。 『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、117ページ。
12月3日				大谷光瑞師の講演 市内新起町西本願寺に於て来る4日午前9時より11時まで台湾光瑞会主催の下に講演会開催（講題金光明最聖王經）する由。	『台湾日日新報』昭和13年12月3日、第（七）版。
12月18日		台湾	上海	その後台北に御滞在の光瑞猯下は台北高雄の間を数回往復の後、12月18日離台、渡滬の御予定の由。	『大乘』昭和14年1月号、112ページ。
12月23日				新南群島の日本領土編入	
12月28日				新南群島は台湾総督府の管轄下に（高雄市）	
昭和14年（64）	1月17日			上海本願寺別院内に大谷光瑞事務所を設く。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事

歳)						務所、昭和 29 年、117 ページ。
	2 月 11 日	高砂丸	神戸	台湾	<p>光瑞猯下は 11 日神戸発高砂丸にて、台湾へ向はれた。</p> <p>3 月上旬には同地より上海に赴かれ、4 月下旬には、光寿会本部講演が、5 月上旬大阪で催されるにつき、それを兼ねて帰国せられる予定。</p> <p>別掲廣告の通り、光瑞猯下は、今回支那事変善後処理の必要上、三夜荘を閉鎖上海へ転居せられるにつき、4 月頃、京都高島屋に於て其の不用品を展観、即賣される由。以つて台湾高雄にも設けられんとするお住ひの費の一端に当てられるのだそうである。御希望の向は、予め大乘社へ御申越し頂いて置けば、日時決定次第御案内状を差上げる事として居る。</p>	『大乘』昭和 14 年 3 月号、116 ページ。
	3 月 13 日		基隆	南支	<p>前號本欄に於て、資源愛護の意味で以つて三夜荘の猯下御手廻りの不用品を京都高島屋で、展覧の上御希望の向に頒たれる旨を記し、其の御希望者は予め大乘社まで申出て置いて頂けば、当日御案内申し上げると附記したのであつた。</p> <p>処が三夜荘の御都合で、予定を早め、急に去る 12、13 の両日にそれを催される事になつた。為に御申込頂いた方々へ御案内する時間無く、誠に申し訳ない仕儀になつてしまつた。誌上をかりて呉々もお詫申し上げる次第である。</p> <p>尚、其の日は天候が悪かつたにかゝらず、非常な盛会で、初日 12 日の午後 2 時には既に全部赤札が貼られると云ふ有様で、参会された方々に対しても御満足をして頂けなかつたのは残念であつた、と係の人は云つて居た。</p>	『大乘』昭和 14 年 4 月号、101 ページ。
	4 月 1 日				興亜学院名誉院長に就任す。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和 29 年、117 ページ。




4月				 最近の光瑞猯下（上海にて御撮影）	『大乘』昭和14年5月号。
6月12日	高砂丸	台湾	神戸	廣瀬了乘氏 先に猯下の用務を帯びて台湾に渡られた同氏は、去る6月12日神戸着の高砂丸で帰来、同23日東上猯下に隨行して南洋へ行かれる。 尚、去る2月から、手不足の社に猯下の御手許から手伝ひに来て呉れみた 西田忠君 も、猯下に御供して南洋へ行つて来る事となつた。	『大乘』昭和14年7月号、105ページ。
6月				『大谷光瑞興亜計画』を有光社より刊行を初む。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、118ページ。
7月13日	山城丸	パラオ島	蘭領印度		
7月27日				蘭領ジャヴァ・スマドン島着、熱帯産業に対する研究をなす。	『大乘』昭和14年9月号、100~101ページ。
8月1日				北支開発会社総裁大谷尊由台下の薨去。	
8月6日				バンドン市着。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、118ページ。
8月10日				バタビヤ市を訪ふ。	
8月13日				チスルパンに着し、この地に滞在、各地を視察す。 チスルパンは事業地の近在、海拔四千尺の高地。	
9月3日	マカツサ丸	スラバヤ	横浜		『大乘』昭和14年11月号、118ページ。 『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29
10月14日	大和丸	神戸	台湾	約一箇月滞在、同島南北を往来し、種々視察研究をなす。	

						年、119 ページ。
	11月20日	富士丸	基隆	神戸	光瑞猯下は10月14日台湾へ渡られて以来、同島南北を往来、種々視察研究せられて居たが本月十八日より開催されて居る興亜委員会に委員として参列さるゝ為、二十日基隆発の富士丸で二十三日神戸帰着、即日東上せられる事となつた、同委員会が終るまでは東京に御滞在の筈。	『大乘』昭和14年12月号、57ページ。
	11月30日				生母円明院往生(86歳)。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、118ページ。
	12月8日				京都都ホテルにおける経都三夜倶楽部例会に臨む。	
	12月11日	高砂丸	神戸	台湾	光瑞猯下は11月23日富士丸で台湾より神戸御着、即日東上折柄開会中の興亜委員会に委員として参列、年来抱懐せらるゝ興亜意見を傾倒せられて居たが、12月7日燕にて西下、京都都ホテルに御二泊、9日、10日の両日は新大阪ホテルに宿泊の上、11日神戸発の商船高砂丸にて再び台湾へ向はれた。 大谷学生募集 光瑞猯下国策的見地的から従来人材養成に絶えず努力して居られるところであるが、今年は時局に反映して頭脳明晰、資性敏活ならば必しも身体強健でなくともよいとて昭和15年尋常小学卒業の者20名を新に募集養成せられる事となつた。詳細は当大乘社内の大谷学生募集係へ照会せられ度い(募集締切は1月10日である) なほ合格者は先づ台湾高雄の熱帯産業試験所へ入所せしめ、適性に従つた教育を施行の上、夫々海外に発展せしめらるゝ予定の由である。	『大乘』昭和15年1月号、89~90ページ。
昭和十五年(65歳)	1月		台北	高雄	田中勝治： 急にこのたび高雄に建設される逍遙園に行く様に命ぜられ、廣瀬了乘先生に連れられて南へと旅立ちました。 光瑞師は寿山館にお泊りです。	田中勝治、「台湾での思い出」、『大谷光瑞上人 生誕百年記念文集』、瑞門会、394ページ。
	1月29日				光瑞師は高雄に『熱帯農業』という本の結語を書かれた。	大谷光瑞、『熱帯農業』、昭和

					17年、有光社、東京、811 ページ。
2月				大工棟梁二角幸次郎高雄に到着。	田中勝治、「台湾での思い出」、『大谷光瑞上人 生誕百年記念文集』、瑞門会、394 ページ。
2月16日	蓬萊丸	台湾	神戸	台湾より帰国。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、119 ページ。
2月17日				大阪相愛高女にて南洋発展の人材養成を目的とする大谷学生応募者を選衡し、十五名を採用す（四・五月頃台湾高雄に集め、南方向教育を施すことを予定する）	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、120 ページ。
3月初				田中勝治： 三月の初め頃西田正さんが来られて三人で暮す様になり私も肩の荷が降りてやれやれの思いでした。	田中勝治、「台湾での思い出」、『大谷光瑞上人 生誕百年記念文集』、瑞門会、394 ページ。
4月				田中勝治： 四月末には台北、北京、上海などから学生が次ぎ次ぎと到着し、十五名余りの新入学生も参りまして、一度に賑やかな逍遙園が出来上ったものです。それでもまだ池を掘って其の土で築山を造り、作業は続けられて居りました。猥下は東向きの庭園を見下ろせる部屋で機の前に立ったまま熱心に原稿を書いて居られましたが、其のお姿を今でも思い浮かべる事が出来ます。	田中勝治、「台湾での思い出」、『大谷光瑞上人 生誕百年記念文集』、瑞門会、395 ページ。
4月7日				台湾屏東番屋前ニテ撮影。 	二角龍蔵氏提供
4月27日	新田丸	神戸	上海	また新採用の大谷学生、神戸発富士丸にて台湾に向ふ。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所

					務所、昭和29年、120ページ。
5月23日	高砂丸	神戸	台湾	台北・高雄等を巡察す、6月5日帰国。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、121ページ。 末廣正昭氏提供、大谷記念館蔵。
7月1日	ジョホール丸	神戸	蘭印 ジャバ ヴア	ジャバへ、スラバヤよりパラオ島経由で9月帰国。 田中勝治：私は軍隊の学校を志願し、内地へ其の受験の為に台湾を後にして帰りました。  ジャワ島カリキル佐藤農園にて	
9月				『熱帯農業』を大乘社より刊行す。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、121ページ。
9月27日				日独伊三国同盟。	名越二荒之助・草開省三編集、『台湾と日本・交流秘話』、展転社、1996年、344ページ。
10月3日				内閣参議を仰せつけらる。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、121ページ。
10月12日				大政翼賛会発足。	名越二荒之助・草開省三編集、『台湾と日本・交流秘話』、展転社、1996年、344ページ。
10月17日		神戸	台湾	消息 大谷光瑞猊下 十月十七日神戸発台湾に渡られた光瑞猊下は十一月一、二の二日間毎日午前十時から二時間宛高雄市役所樓上に於て光寿会々員の為に「無亮光如来安樂莊嚴經」を講ぜられ、三日は現下の世界壯勢特に三國同盟の意義に就いて御講演があつた。	『大乘』昭和15年12月号、89ページ。

				<p>尚此の三日間高雄の新邸逍遙園の開園式が挙行せられた、時局柄簡粗な宴であつたが、台湾官民多数の招待者で三日間非常な賑であつた。</p> <p>光寿会参聴団</p> <p>十一月一、二、三の三日間台湾 高雄に於て光寿会本講が催されるに就き内地光寿会々員の内左記諸氏が参聴に出掛けられた。児島長之助、中西武五郎、井上幸一郎、唐橋友造、稲本為次郎、伊藤繁一、伊藤盛典、小林泰二郎、松本菊太郎、堀田圭三、田村十一、三川勉吉、菅原與三郎、森瀬さん、高木了相、北地聡夫、中東定次郎、宮川利八、堀場金寿、能村金茂、津木操一郎、曾我了雲、菅原圓住、藤田熊吉、西村道之村、黒原久清、北垣元兵衛、阿部慈原、山本百合子の諸氏、光寿會からは山本実氏が行かれ、社からは消息子も参加させてもらつたのであつた。尚猯下の御講演の速記を取るために森卓明氏に行つてもらつた。</p>	
10月				『大谷光瑞興亜計画』(全10巻)の刊行を了る。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、121ページ。
11月1日	香取丸	神戸	台湾	<p>高雄の新邸逍遙園開園式を挙行す、また光寿会講演会を開き、「無量光如来安樂莊嚴經」を講じ(一・二両日)また現下の世界情勢特に三国同盟の意義について講演す(三日)。</p> <p>逍遙園は高雄に新築した邸宅で、附属園では一万餘坪剩り、ゴム・コーヒ・マンゴー・アボカド・サボジラ・バナナ・荔枝・柑橘等の試験栽培を今春来開始しつゝあつた。またこの度の講演会には参聴団を組織し、すでに10月26日富士丸で渡台していた。</p>	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、122ページ。大阪津村別院大谷光瑞資料室。

						
	11月3日			開園式の当日、「大谷学生」を撮影。  <small>高雄大谷造橋園にて(造橋園開園式の当日) 昭和15年11月3日</small> 	田中勝治、「台湾での思い出」、『大谷光瑞上人 生誕百年 紀念文集』、瑞門会、391 ページ。 岩佐博男氏提供。	
	11月10日			賞勳局より紀元 2600 年記念章を授与さる。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和 29 年、122 ページ。	
	11月23日	浅間丸	基隆	神戸	十一月二十三日基隆発二十七日神戸に於て浅間丸に移乗東上され、十二月五日龍田丸にて神戸御着、七日台湾へ御発迄、京阪神三都に各一泊さるゝ御豫定である。	『大乘』昭和 15 年 12 月号、89 ページ。
	11月				『蘭領東印度地誌』を有光社より刊行す。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和 29 年、122 ページ。
	12月8日	香取丸	神戸	高雄	高雄へ。	
昭和 16 年	1月1日				高雄逍遙園にて新春を迎ふ。	『台湾日日新
	1月4日				高雄の出初式	

(66 歳)				新東亜建設の意象も高らかに戦時体制下に迎へた紀元二千六百年の春一月四日高雄消防組では午前八時より市庁舎前廣場に於て赤堀知事、桂要塞司令官、宗藤市長、大谷光瑞氏その他軍官民多数参列下に恒例の出初氏を挙行、先づ遥拜、□□、検閲等の後昔□しい本□□□に合せてたる□振り梯子□り消火演習等あつて□十時終了検閲子□り□一隊は市内主要の□所を□り歩いて□所に□技を□開した。	報』昭和16年1月6日、第(三)A版
2月27日	富士丸	基隆	神戸	台湾より帰国。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、122ページ。
3月2日				本年度募集の大谷学生を選衡す、また大阪策進倶楽部懇親会に臨む。	
4月				新入学生十名余りが到着した。	田中勝治、「台湾での思い出」、『大谷光瑞上人 生誕百年記念文集』、瑞門会、395ページ。
4月2日	高砂丸	神戸	高雄		『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、123ページ。
4月20日	高砂丸	基隆	神戸		
5月17日				17日この頃より発病す。	
5月26日				東京アソカ病院（創始者：九条武子夫人）に入院。	
6月29日				退院、築地本願寺に入り。	
7月				神戸にて静養。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、124ページ。
10月22日		神戸	高雄	内閣参議を辞す。台湾総督府経済会議に出席、十一月帰国。	
12月8日				大東亜戦争勃発。日米開戦を東京で聞く、台湾に向う。	
12月17日				午前3時19分嘉義地方烈震	『昭和16年12月17日嘉義地方烈震報告』、吉村商会印刷所、台北、昭和17年。
12月20日				台湾に向ふ、高雄逍遙園に滞在、越年す。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、124ページ。

						ジ。
	12月				『随筆百則』を有光社より刊行す。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、124ページ。
昭和 17年 (67 歳)	2月				大東亜建設審議会委員に就く。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、124ページ。
	3月		台湾	名古屋	台湾より帰国。	
	5月10日				東京築地本願寺にて。	大谷光瑞、『印度地誌』、有光社、昭和17年、536ページ。
	6月15日				東大にて膀胱乳嘴腫と診断され手術を受く。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、125ページ。
	6月5日				ミッドウェー海戦	名越二荒之助・草開省三編集、『台湾と日本・交流秘話』、展転社、1996年、344ページ。
	7月6日				東京築地本願寺	大谷光瑞、『マダガスカル島誌』、南洋資料第102号、財団法人南洋経済研究所、昭和17年9月。
	7月17日				京都にて少憩の後、神戸北野町の邸に入り、病後の静養につとむ。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、125ページ。
	8月				北野町4の170にて。	大谷光瑞、『印度地誌：附マダガスカル地誌』、有光社、昭和17年、666ページ。
	10月30日				『マダガスカル島誌』発行。	大谷光瑞、『マダガスカル島誌』、南洋資料第102号、財団

						法人南洋経済研究所、昭和17年9月。	
	12月				『印度地誌』を有光社より刊行す。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、126ページ。	
昭和18年 (68歳)	1月1日				杭州にて新春を迎ふ。		
	3月19日				高千穂丸(内台航路)撃沈。		名越二荒之助・草開省三編集、『台湾と日本・交流秘話』、展転社、1996年、344ページ。
	6月				大東亜仏教総会名誉総裁に就任す。		『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、126ページ。
	12月				大正十一年一月以来主宰続刊した雑誌『大乘』是月をもって終刊す。		
昭和19年 (69歳)	1月				上海にて新年を迎ふ。	『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年、126ページ。	
	12月20日				内閣顧問仰せつけらる、築地本願寺に滞在す。		
昭和20年 (70歳)	1月				東京築地にて新年を迎ふ。		
	4月5日				内閣顧問を辞し。		
	6月21日				旅順長官々邸に入り。		
	8月15日				大連関東別院へ移る。		
	11月				膀胱腫病で満鉄大連病院に入院。		
昭和21年 (71歳)					古稀により天盃を賜ふ。		
昭和22年 (72歳)	2月28日	遠州丸	大連	佐世保	引揚船遠州丸で大連を出航。		
	3月7日				佐世保着。佐賀嬉野国立病院に入院。		
	3月24日		別府	神戸	別府から船で神戸へ。京都大学病院へ入院。		
	5月12日				京都大学病院を退院。		
	5月13日				別府へ向かい、別府亀川国立病院へ入院。		
	11月				大分・福岡・佐賀・熊本・鹿児島・宮崎を巡迴、知事其の他に会い産業復興に助言を与う。		
	12月				別府・鉄輪別荘に移る。		
昭和23年 (73歳)	4月				公職追放令によって追放(著作による)		
	10月5日				午後5時45分、別府鉄輪別荘で遷化。病名膀胱腫瘍兼貧血。		
	10月8日				遺骨帰山。		

	11月18日				大谷本廟にて葬儀、遺骨を大谷の祖隴に葬る, 信英院と諡す。	
--	--------	--	--	--	-------------------------------	--

出典：『鏡如上人年譜』・『大谷光瑞師著作総覧』・『大谷光瑞上人 生誕百年記念文集』・『大乘』

参考文献

1. 加藤斗規、「大谷光瑞と南洋」、『大谷光瑞とアジア 知られざるアジア主義者の軌跡』、柴田幹夫編、勉誠出版、平成22年発行。
2. 加藤斗規、「大谷光瑞と台湾」、『大谷光瑞「国家の前途」を考える』、柴田幹夫 編、勉誠出版、平成24年8月発行。
3. 柴田幹夫、『大谷光瑞の研究—アジア広域における諸活動』、勉誠出版、平成26年発行。
4. 柴田幹夫、『興亞揚佛：大谷光瑞與西本願寺的海外事業』、博揚文化、新北市、平成29年発行。
5. 「逍遙園戦後の運命」論文、『台湾の日本仏教—布教・交流・近代化』、柴田幹夫編、勉誠出版、平成30年8月。
6. 黄朝煌、「大谷光瑞の高雄別邸「逍遙園」—日本側の関係資料」、公益財団法人日本台湾交流協会に提出した論文。、平成30年3月。
7. 三谷真澄編、「台湾・逍遙園と修復事業」、『大谷光瑞の構想と居住空間』、法蔵館、令和元年2月。
8. 「高雄逍遙園再認識：逍遙園雑詠の観点から」、「台湾の日本仏教—布教・交流・近代化—」国際研究集会、新潟大学東京事務所、令和元年11月30日。
9. 『西六條幻夢抄』、龍谷大学大宮図書館。
10. 『内海忠司日記』、近藤正己・北村嘉恵・駒込武編、京都大学学術出版会、平成24年。
11. 『高雄新報』第九冊、昭和15年11月2日。
12. 『台湾日報』第二十八冊、昭和15年11月2日。
13. 『台湾日日新報』、漢珍図書。
14. 朝日新聞社、『朝日新聞：外地版1巻（台湾版1935-1936年）』、坂本悠一監修、ゆまに書房、東京、平成19年5月。
15. 朝日新聞社、『朝日新聞：外地版24巻（台湾版1940年）』、坂本悠一監修、ゆまに書房、東京、平成21年4月発行。
16. 『日本勸業銀行档案』、台湾中央研究院台湾史研究所。
17. 『高雄州及澎湖庁電話帖』台湾総督府交通局通信部、昭和12年6月。
18. 「大谷光瑞猥下買取書類-昭和13年3月」、行政法人高雄市立歴史博物館、登録番号KH2020.019.0054。
19. 『台湾総督田健治郎日記』、台湾日記知識庫。
20. 『台湾拓殖株式会社事業概観』、台湾拓殖株式会社、台北市、昭和15年。
21. 『熱帯産業調査会会議録』、台湾総督府、昭和10年10月。
22. 『台湾総督府熱帯産業調査会概況報告書』、台湾総督府熱帯産業調査会、昭和11年。
23. 『爪哇に於ける邦人事業調査』、台湾総督官房調査課、昭和6年。
24. 笈干城夫、『土と人と砂糖の一生（上巻）』、さきたま出版会、平成元年8月。

25. 小生夢坊、「光瑞の矛盾性」、『再認識の台湾』、日滿新興文化協会、昭和12年。
26. 児玉花外、「南洋の島王大谷光瑞」、『拓殖新報』第84号、大正8年9月。
27. 「一筆啓上」、『一味第15卷17号』、一味、昭和10年12月10日。
28. 大園市蔵編、『台湾人物誌』、台北谷沢書店、大正5年。
29. 『大乘』、大乘社、昭和10年-昭和18年。
30. 『瑞門会誌第二号』、瑞門会、昭和27年9月1日。
31. 『瑞門会誌第三号』、瑞門会、昭和28年1月1日。
32. 『瑞門会誌第四号』、瑞門会、昭和30年8月1日。
33. 『瑞門会誌第五号』、瑞門会、昭和32年3月1日。
34. 『瑞門会誌第六号』、瑞門会、昭和35年4月10日。
35. 『瑞門会会員・客員名簿』、瑞門会、平成9年3月1日。
36. 『鏡如上人年譜』、鏡如上人七回忌法要事務所、昭和29年。
37. 『大谷光瑞上人生誕百年紀念文集』、瑞門会、昭和53年。
38. 岡西為人編、『大谷光瑞師著作総覧』、瑞門会出版、昭和39年。
39. 縣義治、『朝降る雨 縣義治歌集』、白玉書房、昭和33年。
40. 曾駿文、「新興区日本皇族別墅之探討與訪談」、『高市文献第17卷第4期』、高雄市文献委員会、2004年12月。
41. 葉振輝、「高雄市日本皇族別館考証」、年代不明。
42. 曾玉昆、「林慶同先生訪問記録」、『高市文献第10卷第2期』、高雄市文献委員会、1988年。
43. 国立高雄大学、『高雄市新興区日本皇族別邸逍遙園基礎調査』、高雄市政府文化局、2008年。
44. 楊玉姿、『高雄市史蹟賞析』、高雄市政府文献会、2009年。
45. 黄朝煌、『日治晚期高雄市大谷光瑞の逍遙園之源流與建築構成』、国立高雄大学都市發展與建築研究所、2009年。
46. 林世超建築師事務所、『高雄市市定古蹟高雄州水産試験場（英国領事館）即前清打狗英国領事館登山古道調査研究暨修復計画』、高雄市政府文化局、2008年。
47. 国立高雄大学、『高雄市歴史建築『逍遙園』調査研究與修復計画』、高雄市政府文化局、2013年。
48. 陳秀珍等五人、「時代巨流中湮沒的医療地景-陸軍第八〇二総医院的前世今生（1941-1977）」、高雄中学、2015年12月。
49. 彭大年、『眷恋：陸軍眷村』、中華民國国防部、台北、2007年。
50. 許台英、「走在六合路上」、『人生放異采』、林白出版社、台北、1986年。
51. 「支部通信」、『台湾刑務月報』、台湾刑務協会、昭和13年。
52. 山田金治、「大谷光瑞師を嘉義及び恒春に迎へて」、『台湾の山林』、昭和10年。

- 5 3. 牧野宗十郎、『熱帯植物産業写真集』、開成館、東京、昭和14年。
- 5 4. 岡部庸三郎、『熱帯衛生』、聚英閣、東京市、大正14年。
- 5 5. 徳富猪一郎、『烟霞勝遊記 上巻』、民友社、大正13年。
- 5 6. 久保三友、『大正實観』、帝国軍人教育会、大正5年。
- 5 7. 「海事日記」、『台湾通信協会雑誌』、大正7年。
- 5 8. 井出紀和太、『南進台湾史攷』、誠美書閣出版、東京、昭和18年。
- 5 9. 高濱三郎、『台湾統治概史』、新行社、東京、昭和11年。
- 6 0. 末光欣也、『台湾の歴史 日本統治時代の台湾：1895-1945 / 46五十年の軌跡』、致良出版社、台北、平成16年。
- 6 1. 薛化元、『「農業台湾・工業日本」一考察』、公益財団法人日本台湾交流協会、平成18年。
- 6 2. 名越二荒之助・草開省三 編集、『台湾と日本・交流秘話』、展転社、平成8年。
- 6 3. 『奉祝紀元二千六百年 躍進台湾大観続編 台湾特輯記念号』、中外毎日新聞社、東京市、昭和16年。
- 6 4. 『昭和16年12月17日嘉義地方烈震報告』、吉村商会印刷所、台北、昭和17年。
- 6 5. 大谷光瑞、『放浪漫記』、民友社、東京、大正5年。
- 6 6. 大谷光瑞、『世間非世間』、実業之日本社、東京、昭和6年。
- 6 7. 大谷光瑞、『花』、大乘社、東京、昭和6年。
- 6 8. 大谷光瑞、『無題録』、大乘社、東京、昭和7年。
- 6 9. 大谷光瑞、『大谷光瑞全集第2巻』、有光社、東京、昭和11年。
- 7 0. 大谷光瑞、『大谷光瑞全集第3巻』、有光社、東京、昭和11年。
- 7 1. 大谷光瑞、『大谷光瑞全集第6巻』、有光社、東京、昭和11年。
- 7 2. 大谷光瑞、『大谷光瑞全集第9巻』、有光社、東京、昭和11年。
- 7 3. 大谷光瑞、『大谷光瑞興亜計画』第5巻、大乘社、昭和14年。
- 7 4. 大谷光瑞、『隨筆百則』、有光社、東京、昭和16年12月発行。
- 7 5. 大谷光瑞、『熱帯農業』、有光社、東京、昭和17年発行。
- 7 6. 大谷光瑞、『マダガスカル島誌』、南洋資料第102號、財団法人南洋經濟研究所、昭和17年9月。
- 7 7. 大谷光瑞、『熱帯農業』、有光社、東京、昭和17年。
- 7 8. 大谷光瑞、『台湾島之現在』、有光社、東京、昭和10年10月。
- 7 9. 「伏見三夜荘解体へ」、『読売新聞（大阪本社版）』平成28年2月9日夕刊。

謝辞

今年の（2021年）3月9日の朝、「大谷学生」であった岩佐博男先生が九十歳半ばを過ぎて亡くなったという知らせが、日本から届きました。2018年1月に、意気高揚として優雅に煙草を吹かしている岩佐先生の姿を思い出しました。わたしが日本にやって来て、「逍遙園」関係の資料を探し求めていることを知っておられ、協力をさせていただきました。今はもう彼に合うことはできません。「逍遙園」の研究に従事していましたが、時間が経つにつれて思い出が消え去り、感傷的な気分が湧き上がってきました。

2008年8月6日初めて「逍遙園」に足を踏み入れてから、今日に至るまでわたしの心の中では今でも研究は終わったという安堵感はありません。わたしはこの研究に従事するのに十分な学問と教養を持ち合わせてはいませんが、幸運なことに多くの人々の助けを借り、研究を続けることができました。

新潟大学大学院現代社会文化研究科に博士学位論文請求をする際に主査を務めていただいた柴田幹夫先生、それに大谷記念館の掬月誓成副館長先生、ならびに加藤斗規研究員、工学院大学客員研究員菅澤茂先生はじめ龍谷大学国際学部長の三谷真澄先生および新潟大学非常勤講師の應雋先生に感謝の意を表したい。2012年の12月以前には、彼らを知る由もありませんでしたし、また彼らがわたしに論文を書くという機会を与えられるとは思いませんでした。論文の完成に向けてさまざまな協力を惜しみなくわたしに注いでいただいた先生方、先輩たちにこの上なく深い感謝を表します。

論文指導：柴田幹夫教授、角谷聰教授、池田英喜教授、菅澤茂先生。

大谷記念館：掬月誓成副館長、加藤斗規研究員。

龍谷大学：三谷真澄教授、王達来博士、李蔓寧博士。

瑞門会：岩佐博男氏、中路孝信氏、縣義治氏。

二角工務店：二角龍藏氏。

浄土真宗本願寺派徳浄寺住職潮留哲真師。

国立高雄大学

国立高雄師範大学：楊玉姿教授。

一貫道天皇学院：林仁政教授。

高雄中学：歴史科陳秀珍先生、陸家霞、涂峻政、戴雍哲、劉柏毅。

研究協力：Jérôme Lanche、林子博、王大維、林宜瑩、黃乙立、麥晏誌。

徳昌印刷廠：林慶同。

日本語翻訳：應雋、董春玲、湯茗富、曾傳彰、黃婉婷

黃朝煌謹識